文部科学省 地(知)の拠点

静岡大学

地域課題解決支援プロジェクト成果報告書

第3号

目　次

成果報告書第3号の刊行にあたって

地域課題解決支援プロジェクトの概要 …… 3

地域課題一覧

公開シンポジウム「地域課題から地域創造へ」 …… 9

三保の松原における地域づくりの課題と可能性
学生参画による地域連携の取り組み
松崎町における地域づくりの課題と可能性
東伊豆町における学生参加のまちづくり
パネルディスカッション

東伊豆町におけるプロジェクト進捗状況 …… 39

静岡市生涯学習センターにおける課題解決支援 …… 41

静岡市生涯学習センター4館エリアにおける地域住民の意識調査報告

研究フォーラム「伊豆半島の学習・交流・協働拠点づくりを考える」 …… 71

能登半島の先端、人材養成プロジェクト10年の歩み
伊豆半島の地域資源とジオパーク～ジオパークは地域の未来を変えるか?～
学生参画による地域連携の取り組み
地域創造学環フィールドワークの取り組み
パネルディスカッション

フューチャーセッションin南伊豆町 …… 102

地域課題解決支援プロジェクトと地域創造教育センター

静岡大学地域創造教育センター

2017

成果報告書第３号の刊行にあたって

静岡大学学長
石井　潔

本学は昨年、「地域志向大学」宣言を行い、下記の方向性を確認しました。

「自由啓発・未来創成」の理念に基づき、社会の中の一員として、社会に開かれた教育研究を推進するとともに、社会が直面する課題に協働して取り組み、成果の発信と共有及び知の価値の共創を通して社会に貢献すること。また、知（地）の拠点として、地域社会と学生・教職員が相互に啓発しあう関係を構築するとともに、地域との協働による課題解決を通して、地域社会の価値の創造と持続的な発展に貢献すること。このため、地域志向教育の充実や、地域課題の解決に向けた取組の推進等の方針を、本学の学生・教職員、地域の皆様と共有し、地域を志向した大学改革を推進することです。

こうした方針は、本学のこれまでの歩み・精神を継承し発展させるものであり、地域に根差した大学という本学の方向性をあらためて確認するものです。

平成23年度には学生・教職員が地域社会と協働で取り組む地域活性化活動を支援する「地域連携応援プロジェクト」を開始し、今年度までのべ125件の応募に対し、これまで89件を採択して支援を行ってきました。

平成25年度からは新たな展開として、これまで大学との接点がない地域からも広く課題を公募する「地域課題解決支援プロジェクト」を立ち上げ、第1期・第2期の公募で県内各地から計44件の応募をいただき、地域に赴きヒアリングを行って、地域課題データベースを作成・公開しています。興味関心を持った教職員・学生とのマッチングをはかりながら、年度をまたいで諸課題に取り組んでいますが、その後の成果も積み上がり、成果報告書第3号を刊行する運びとなりました。

本学は、静岡の地に根を張って成長してきました。「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」にも採択され、他大学、自治体、企業と連携して県内就職率の向上、新たな産業の創出、地域活性化に取り組んでいます。全学部の学問領域を横断する教育プログラム「地域創造学環」は、本学の地域志向宣言の核となる取組で、2年目を迎え、地域の抱える課題を解決支援する人材を育てようとしています。この地域課題解決支援プロジェクトも地域創造学環のフィールドワーク等とリンクしながら展開しています。

これまで刊行した成果報告書でもふれられていますが、大学の構成員が恒常的に社会連携・地域貢献活動に携わることで、教育・研究のあり方が深化・拡充する、それがまた次なる社会連携につながるといった、教育・研究・社会連携のサイクルをつくることが本学の目指す方向性であると考えます。今回の報告書で取り上げられた取組もまだ端緒についたばかりですが、ご一読いただき、幅広くご助言、ご示唆をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

地域課題解決支援プロジェクトの概要

「地域課題解決支援プロジェクト」は、地域社会が抱える課題を大学が再発見し、大学のもつ様々な資源を活かしながら地域と大学が連携し、対応策をともに考え、協働することによって課題解決を支援する事業です。大学と地域との新たな連携を立ち上げるべく、これまで大学と接点がなかった地域や団体も含め、広く学外から地域課題を公募し、県内全域から27件（準備不足のため辞退された1件を除く）の応募があり、重点的に取り組む課題群をモデル事業として取り組みました。

モデル事業以外の課題についても、提案地域に赴いてヒアリングを行い、地域課題データベースとして学内外に広報し、興味関心をもつ教職員・学生とのマッチングをはかってきました。

第1期の地域課題に取り組む中で、継続的に地域とかかわった学生たちの成長がみられました。そこで、これまでの地域課題に引き続き取り組みながら、平成28年度には第2期公募として、継続的に学生を受け入れていただける地域課題の募集を行い、全15件の課題が寄せられました。

寄せられた42件の提案課題については、ウェブサイトにて一般公開中であり、学内では各研究室・学生とのマッチングを進めています。学内外を問わず、各課題にご協力いただける研究室・教職員・学生・その他関係機関の皆様は、当センターまでご連絡ください。担当者がコーディネートをいたします。

・ウェブサイトURL：http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies_index.html

・連絡先：TEL 054-238-4817、E-mail：kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp

地域課題一覧

≪第1期≫

No.	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
1	夢の里みつかわあぐりぃ（袋井市）	三川地区の課題は、『三川が誇る3つの財産（農業・環境・人）をより合わせ、欲しい、行きたい、住みたい地区を創る』こと。人との絆を大切に、心通い温もりのあるまちづくりに取り組みたい。	①出会いの場の提供をし、結婚する人を増やす方策 ②袋井市地域の活性化方策 ③地産地消の推進のための方策
2	御前崎市役所	御前崎市では過去の人口増加を背景に、原子力関連交付金等により公共施設の整備を進めたが、少子高齢化や人口減少により公共施設のあり方が変化した。公共施設マネジメントへの取組が必要である。	①今後の当市の財政状況分析 ②公共施設マネジメントの可能性及び取組手法 ③公共施設の費用便益分析
3	ユークロニア株式会社（静岡市）	県内の小中学校では睡眠不足からくる問題が顕在化している。「睡眠授業」の依頼が増えているが、研修にはマンパワーが不足。地域の課題として睡眠を整えることができる仕組み作りが必要である。	①睡眠教育の標準化や効果検証 ②教育者の育成 ③静岡独自の睡眠問題の調査により、地域にあった生活スタイルを探る。
4	NPO複合力（静岡市）	両河内地域の高齢化は進み、休講農地が増えている。森林公園「やすらぎの森」は、老朽化にもかかわらず年間30万人が訪れる。脱・限界集落の手がかりを得て、地域を活性化する手立てを考えたい。	①農産物の品質を高め、商品化する栽培知識技術。竹林等を伐採し、循環型資源とする知識技術。 ②グリーンツーリズムを活性化するための知識技術 ③大学生など若いマンパワーが恒常的に来園する方策
5	静岡市北部生涯学習センター美和分館	潜在的な利用者ニーズの把握が十分ではない。広く地域住民の生涯学習に対するニーズ把握のため調査を企画した。それにより、一層充実した学びの機会を地域に提供し、地域コミュニティ活動の推進につなげたい。	地域住民に対するアンケート調査への助言及び分析

6	静岡市立登呂博物館	リニューアルオープン後、年々来館者数が減少している。イメージ・キャラクターを使った誘客活動を行ってきたが、マンネリ状態になっている。また、多様化する来館者に対応するため、多言語仕様の資料が必要となる。	①イメージキャラクターを活用した教育普及事業の開催への支援。 ②登呂遺跡および登呂博物館の概要を紹介した多言語対応パンフレットの作成とHPの構築
7	NPO法人 富士川っ子の会 （富士市）	子育て支援中心の活動を、今後は生涯学習の観点から事業を広めていく必要がある。当NPO、行政、企業が協働できるようなテーマで解決を図る活動を展開する。活動拠点の確保、会員の若返り施策と後継者の育成が課題。	①当団体、行政、企業との協働により、団体の若返りと活動の幅を広げ、定款に示す事業展開の具体化。 ②活動拠点の確保。
8	油山川のマコモを根絶する会 （袋井市）	油山川では700mにわたってマコモが繁殖し、流下能力を著しく低下させ、景観上からも問題になっている。河川管理者が年に1回刈り取りを行っているが、マコモは繁殖力が旺盛で、2カ月もすると元の状態に戻ってしまう。	活動の中で、マコモは根が残っていると再生するが、完全に取り出せば再生しないこと、天地返しにより根が腐り取り出せることが分かった。マコモの生態研究、根絶手法の検証で研究支援を期待する。
9	袋井市三川自治会連合会	高齢者が地域社会に飛び出せない、“生き甲斐や社会貢献”の機会が確保できない。	①高齢者の意識調査 ②高齢者のライフスタイルの解析 ③高齢者の社会進出の仕掛けづくり ④全国での成功（失敗）事例の紹介 ⑤街づくりワークショップ等への共同参加
10	南伊豆新生機構 （南伊豆町）	①未利用の土地の有効活用がされていない。 ②地場産業が稼働していないため人口が流出している。 ③人材が育っていないため、外部の人材との交流がうまくできていない。 ④行政の協力体制がない。	①知的アドバイスの支援 ②人材の支援 ③資金の支援
11	焼津市役所総務部政策企画課	焼津市では、高度成長期の急激な人口増を背景に公共施設の整備を進めてきたが、老朽化が進んでいる。効果的に公共施設をマネジメントしていく取組が求められている。	地域の人口推移の検証や施設の利用状況を詳細に分析し、老朽化を迎えている集会施設の複合化案について提案頂き、市民への説明、話合いを経て、建設計画を実現可能レベルに調整
12	浮橋地域のスローフードを考える会 （伊豆の国市）	中山間地の活性化	①大学生の視点から、中山間地を幅広い世代にアピールするための意見がほしい。 ②ワークショップを取り入れながら、地元の自然を最大限に利用し、農業・観光へと循環させるプランを検討してほしい。
13	株式会社アイ・クリエイティブ／ジョブトレーニング事業 （静岡市）	①ニート（若年無業者）増加問題。 ②静岡県耕作放棄地増加問題。	①大学に望むこと…ニート・ひきこもりや発達障害などの教育心理の知恵を貸してほしい。 ②ジョブトレーニングが提供するもの…ゼミ等の一環として参加してもらうことで、実態現場＋学びの場を提供する。
14	松崎町	町内にはなまこ壁を配した歴史的建造物が残されている。所有者の高齢化、維持のコスト高等で取り壊すことが多い。町の財産ではあるが個人の所有物である歴史的建造物を、いかに後世に残していくべきか悩んでいる。	最小の費用で最大の効果のある維持や修繕方法を一緒に考え、古民家を利用したまちづくり手法と収益事業のアドバイスや、学生による町おこしや収益事業の模索など。
15	松崎町	町民の森「牛原山」を利活用したいが、中途半端に行政主導で整備してきたため町民の利用が少ない。眺望はよく晴れていれば展望台からは富士山も望める素晴らしい山だが、利用されない。	人が集まる仕掛けや、町民が自ら維持や修繕に携われる方法を一緒に考え、里山の素晴らしさを内外に発信し、愛され利用される森にしたい。アドバイスや学生の知力、体力、気力を町おこしに活かしたい。
16	松崎町	松崎町では、ソフト、ハード両面からの防災施策が急務である。津波対策として水門の建設や防潮堤の嵩上げなど必要な事業だが、景観などの問題で全体の理解が得られない。	防災機能だけの無機質な防潮堤や水門を、どうしたら景観に配慮したデザインや機能を持たせることができるか、一緒に考えてほしい。
17	松崎町	過疎化・少子高齢化により、当町もご多分に漏れず耕作放棄地が急増してきている。このままでは町内の農地が荒地だらけになり、今年度加盟を認められた「日本で最も美しい村」連合に恥ずかしい姿をさらしかねない。	耕作放棄地の解消だけでなく、永続的に利活用し続けることができる仕掛けづくりを期待する。当町での有効な作物の選別や耕作方法の指導、学生による農業体験事業化などでの協力がほしい。
18	松崎町商工会	松崎町の中心市街地である商店街が、過疎化・少子高齢化によりどんどん寂れている。このままではゴーストタウン化してしまう。現在でも転居し、空き地になるところが後を絶たない。空き店舗も多く、シャッター商店街になりつつある。	商店街の魅力発掘と、買い物弱者である高齢者への商店街への買い物支援法。商店街のアート誘致、コミュニティ公園化について助言がほしい。全体的なデザインについても関わってほしい。

19	浜松都市環境フォーラム （浜松市）	浜松市はマイカーに依存した都市となっている。深刻な渋滞問題が予測され、抜本的な交通対策が急務である。工業都市として発展してきた浜松が、今後も持続的に発展していくには観光・文化都市としてのまちづくりが必要になる。	持続可能な都市づくりは、行政・民間が扱いにくい空白の分野で、大学の持つ知的・人的資源を活用して研究する価値が高く、実現を前提に「特区」の認定を受けられるような研究を期待したい。
20	伊豆半島ジオパーク推進協議会	伊豆半島ジオパークの進捗を判断する評価指標や調査方法の不足。貴重な資源の保全、教育、防災、地域振興等、様々な分野での取組があるが、活動の検証とフィードバックが難しい。	伊豆半島ジオパークの活動の進捗状況を把握し、フィードバックするのにどのような調査や指標が適当なのか、大学の知的、人的資源を活かしたモデル調査の実施、各種資料の収集と分析等。
21	三保の松原フューチャーセンター （静岡市）	①三保の松原の保全。 ②三保の魅力を知り、次世代へ伝えていく仕組みづくり。 ③三保住民の安全な生活環境の確保。三保で活動している団体は数多く存在するが、横の連携が取れておらず、協働できるきっかけがほしい。	①耕作放棄地を活用し、三保自生の松から植樹用の松を育て、商品化するための支援。 ②子供や住民が気軽に参加できるイベントを開催し、地域の関わりを強化するための支援。
22	焼津市市民活動交流センター運営協議会	焼津市内には市民団体が数多くあるが、団体相互の交流が少なく、協働もできていない。焼津市の抱える様々な問題に行政、企業、市民が協働して解決策を模索するようになれば、もっと良いまちになると思われる。	市民活動の実態を知り、その活動を直接・間接に支援できる人材育成を依頼したい。センターへの支援として、情報発信能力の強化、交流会の企画立案、市民が参加しやすい方法論の検討などがある。
23	静岡市葵生涯学習センター	①「生涯学習」の学習格差の解消 ②「生涯学習」に興味・関心がない地域住民に「生涯学習」に取り組んでいただけるよう支援していく	①地域の現状調査の一連の事業の中で、調査方法や課題解消への取組方法、評価方法へのアドバイスがほしい。 ②大学生等の若年層の認知を高める手法を開発、事業実施をする。
24	伊豆を愛する会 （南伊豆町）	ジオサイト候補地の里山を所有しているが、安全面の不安を理由に、南伊豆町観光協会と行政は消極的である。これまで500名以上の方が問題なく見学しており、地域の不安を取り除くために力を貸してほしい。	①岩石構造専門家の派遣をお願いしたい。 ②石切り場には、昔の人が文字を掘った跡が何か所かあり、解明されていないことも多く、歴史文化の専門家の派遣をお願いしたい。
25	静岡県／松崎町	①棚田保全・活用－石部地区の棚田を保全するとともに活用を検討。 ②特産品を活用して加工品づくりと販路拡大までを検討。 ③伝統芸能保存。 ④大学と地域のネットワーク化。	①既存のつながりでは生み出されていない部分の開拓に期待。 ②新しい視点で工夫を加えた加工品を開発してほしい。 ③継続的課題解決活動に取り組み、地元との連携を築いてほしい。
26	静岡県／東伊豆町	①エコタウンとしての売り出しに向けたガイドシステムの研究。 ②地域づくりインターンとしての学生の参加。 ③オリーブの里づくりへの大学の参画。	①エコ資源の活用方法の提案。 ②従来より長期的な関わりが可能な大学生の派遣と、長期的な関わりを求める。 ③オリーブの栽培の可能性について、植樹の段階からの研究を希望。
27	静岡県／南伊豆町	①竹の子振興方策の検討－産地化に取り組んでいるが、竹林の利活用についての研究が必要。 ②過疎地域における公共交通サービスの在り方の検討が課題。	①従来と異なる新たな竹の子の活用策の提案に期待。 ②集落が分散し、主要道路周辺のみを運行するのではカバーしきれない公共交通網維持の問題の検討に期待。

≪第２期≫

No.	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
1	東伊豆町観光協会 （東伊豆町）	東伊豆のジオスポット・細野高原の「すすき祭り」は、町民による活動が実を結び集客が伸び始めた現在、さらなる活動の展開が課題となる。町内へ観光客を誘導するための食品開発・土産物の展開などを通して、細野高原・東伊豆町の価値を高めていきたい。	学生たちには細野高原イベント委員会へ参画という形での支援を期待する。参画することによって、実行委員会や地域住民と交流を図るとともに、地域の実態を学生たちの目線で捉え、問題提起・解決方法の提案・提案の実行を実行委員会や当団体とともに作り上げていきたい。
2	静岡市葵生涯学習センター 指定管理者（公財）静岡市文化振興財団	静岡市生涯学習センターは地域住民が豊かな人生を送るための場として活用されているが、学生・勤労者層は利用率が低い。すべての地域住民の生涯学習活動を充実し、地域と密着した活動とするため、事業の企画立案・運営に地域住民自身、特に若年層が参画することが重要である。	①市民協働・若者参画による生涯学習の活性化のため継続的な意識調査において、企画・実施・分析作業を支援してほしい。 ②若年層に対して、施設や生涯学習の認知を高めるための手法を開発・事業実施をしているが、そのプロセスに参画してほしい。 ③実習生制度への学生参加を推進してほしい。

3	富士のさとの森づくり実行委員会（御殿場市）	国立中央青少年交流の家には様々な樹木が存在するが、一定の考え方をもって植栽するべきであるとの意見が寄せられている。すでにグランドデザインが一応存在しているが、これをひとつのたたき台にしてコンセプトを固めていくことが必要である。	①学生の意見を反映した森づくりのグランドデザインの再構築作業 ②グランドデザイン再構築に必要な森林の伐採等の作業 ③既存の草花の生育等に配慮した環境の専門家の指導、助言（整備時期、整備内容の決定）
4	松崎町	旧依田邸は築300年以上の歴史をもつ建造物で、伊豆半島の発展の原点であり、歴史的・文化的な価値が高いが、修繕・保存という課題に直面している。また町の地域資源として活用し、まちおこしの拠点とする方策を立案・実行することも課題である。	最少の費用で最大の効果のある維持や修繕方法を一緒に考え、歴史ある建造物を利用したまちづくり手法を提案してほしい。教職員・学生を送り出してフィールドワークとして支援していただきたい。
5	松崎町	当町では近隣に大学がなく、せっかく素晴らしい公開講座などがあっても、移動時間を考えると参加をあきらめるしかない。また、大学生との交流に時間とコストがかかるため、いつ何時でも交流が持てる状態にない。	今夏オープンした、シェアオフィス「ふれあいとーふや。」において、静大の公開講座を受講できるように配信を検討していただきたい。大学生との交流にも使っていただきたい。
6	松崎町	松崎町が抱える課題として、人口集中地域から遠いこと、交通手段が整っていないことがあげられる。そうしたハンディキャップを克服して交流を進める方法としてのICTの活用が考えられる。光ファイバー網の整備をしたが、利活用の具体的な方法が見つからずにいる。	防災や観光、福祉をICT技術で地方の不利、不便さを解消できる技術や提案の提供。
7	松崎町	全国で活発に行われているふるさと納税だが、当町では返礼品競争ではないふるさと納税本来の趣旨を踏まえた活性化を検討しているが、思ったように納税額が伸びない。	外部から見た松崎町の魅力を探り、そのうえでどのような返礼品やどうしたら納税満足度があがるかを一緒に研究してほしい。
8	松崎町	町内に大学の施設や研究室などがないため、産官学の連携した取り組みができない。また、仕事が少ないため若い人が出ていく。	新しい働き方や隙間産業などを学生と一緒に考案していただきたい。 例：耕作放棄地や放棄果樹園を集約し、都市部の週末農業体験のニーズへ繋げるなど。
9	茶夢来（菊川市）	環境整備や農業を核とした新たなライフスタイルを実現する地域づくりが必要となっており、食と農の拠点創造、食育の場づくりを目指している。地域住民の意識調査やニーズ調査をベースに、地域住民が一体となった取り組みを行っていきたい。	農業を核とした食育、地域食材を活用した商品開発、レシピ開発、ノルディックウォーキングを活用した地域健康づくりと観光開発など地域が一体となったまちづくりを目指したい。菊川ブランドのストーリー性の創造に大学の支援をいただきたい。
10	NPO法人 富士川っ子の会 （富士市）	地域全体に「かわっこカフェ」の存在を周知し、自由に集える居場所であることを認知させる手立てを見出すことが課題である。参加者には「かわっこカフェ」の存在意義が理解されつつあるが、地域住民に「一度は行ってみようと思わせる仕組みの工夫」が必要である。	遊び塾と「かわっこカフェ」の活動を通して、次の点を明確にしたアドバイス。 1.地域に求められている居場所とはどんなものか 2.それはどのように形作られるべきか 3.地域での連携で欠かせないものは何か
11	NPO法人 富士川っ子の会 （富士市）	富士市の高齢化率は全国平均程度だが、要介護者数が多く深刻な問題となっている。解決法として、高齢者が後期高齢者の介護を担当するようにして、循環型の介護要員を確保するという構想のもとで活動を進めている。	課題に対応する団体設立の可能性と実現のために必要なことのアドバイスをいただきたい。 1.介護者と要介護者の区分方法 2.適正報酬額の算出 3.団体の設立及びあるべき介護支援形態
12	自立快活プログラム実施　自立援助ルーム 訪問レストランf （浜松市北区）	障碍に対しての理解と認知が低すぎ、まだ障碍者であることをカミングアウトできない社会性が問題である。自立して一人暮らしする障碍者も増えてきたが、結果的に介助者の手を借りるため、介助者本位のサービスを受けている。本来的な意味での自立援助が必要である。	①事業自体が本格始動していないので、まず、グレーゾーンにどれくらいの障碍者が存在しているのか示してほしい。 ②障碍者のための恋愛対策に共に踏み込んでほしい。 ③理解促進を深めるための方策を検討してほしい。
13	認定NPO法人 クリエイティブサポートレッツ （浜松市西区）	障害福祉サービス事業所「アルス・ノヴァ」では、毎日30名以上の障害を抱えた方々が通ってきている。「多様で寛容な社会」の実現のため、できるだけ多くの人にこの場を体感してもらいたいが、一般の方々に足を運んでもらうことが難しい。	①学生たち自身が障害福祉施設を体験・体感してほしい。 ②その体験をもとに、どうしたら自分の知り合いが障害福祉施設に関心をもつのか考え、実際に身近な人を誘ってきてもらいたい。 ③広く一般の人に関心をもってもらうための方法を共に考え実行していきたい。

14	空き家再生プロジェクト （静岡市駿河区）	空き家の利活用を促進し、地域社会の活性化に貢献することを課題として、次のような活動をしている。 ①空き家に関する研究活動（発生と利活用方法、意識調査） ②空き家の利活用にむけた啓発活動（イベント・セミナー） ③空き家再生活動（マッチングサポート・リノベーション）	積極的にまちづくりへ関わることを目指して、空き家を再生したサテライト研究室を設けて、地域を活性化するためのリサーチ・研究を進めているが、この活動に継続的に関わってもらいたい。
15	南伊豆町	伊豆半島最南端に位置し、人口減少と地方経済の縮減が続き、その克服が基本的課題である。一方、豊かな自然環境をはじめとした地域資源も有し、大都市圏との連携を取りながら健康創造のまちづくりを進めているが、大学と連携することによってそうした取り組みを加速できる。	宿泊型のフィールドワークや長期休暇を利用したインターンシップ等を企画し、南伊豆ならではの地域資源を活かしたまちづくりに関わってほしい。

地域課題をきっかけに、それぞれの地域に入り、住民の方と交流し、課題解決を一緒に考えることを通して、学生たちは大きく成長しています。

これまでに取り組んできた各課題の進捗状況は、こちらからご確認ください。

http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies_history_list.php

公開シンポジウム

地域課題から地域創造へ
～域学連携による学びの環づくりのために～

日　時：2016年12月27日（火）12:45～16:00
会　場：静岡大学静岡キャンパス　共通教育A棟301講義室
プログラム：
　報告1「三保の松原における地域づくりの課題と可能性」
　　報告者：前島國治（三保の松原フューチャーセンター）
　　宮城島史人（NPO法人三保の松原羽衣村）
　報告2「学生参画による地域連携の取り組み」
　　報告者：宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター准教授）
　報告3「松崎町における地域づくりの課題と可能性」
　　報告者：深澤準弥（松崎町企画観光課）
　報告4「東伊豆町における学生参加のまちづくり
　　―学生リノベーション事例「ダイロクキッチン」―」
　　報告者：荒武優希（東伊豆町地域おこし協力隊）
　パネルディスカッション
　　パネリスト：報告者各氏
コメンテーター：平岡義和（静岡大学地域創造学環教授）
コーディネーター：阿部耕也（静岡大学イノベーション社会連携推進機構教授）

（阿部）

本日は、2013年度から始まった地域課題解決支援プロジェクトの成果報告と新たな課題の提案を行う会です。地域課題解決支援プロジェクトの公開シンポジウムの1回目は、2015年2月、松崎町で開催しました。そのときはまだ始まったばかりだったので、成果を報告するというより、静岡大学の地域連携や地域貢献の事例を地域の方々に知っていただき、参加いただくという意味合いが強いものでした。2回目は、2016年2月に東伊豆町で開催しました。河津町で交通がまひしたときで、その時期に伊豆に行くことがいかに大変かが分かり、私自身、地域づくりが大事だと言いながら、地域のことを知らずに語っているのだと痛感させられました。

今回は、課題の提案者にも来ていただき、少しあるいはかなり成果が集まり、報告する機会がようやく持てた感じがします。これを機に、継続して取り組んでいきたいと思います。また、第1期・第2期の応募もたくさんありましたので、関わっていただきたいと思います。

これから四つの報告をしていただきます。報告1「三保の松原における地域づくりの課題と可能性」では、提案者の前島さんと、三保の松原に非常に詳しく、さまざまな取り組みをされている宮城島さんから報告をいただきます。報告2「学生参画による地域連携の取り組み」では、地域課題解決支援プロジェクトを以前から進めておられ、課題解決に関しても一番活躍いただいている学生支援センターの宇賀田先生からお話があります。宇賀田先生はフューチャーセンターを立ち上げた方でもあり、たいへん貢献いただいています。報告3「松崎町における地域づくりの課題と可能性」では、学生や教員を受け入れていただいている松崎町の深澤さんに、

進捗状況、課題、これからの可能性についてお伺いします。報告4「東伊豆町における学生参加のまちづくり」では、東伊豆町地域おこし協力隊の荒武さんに、「ダイロクキッチン」など特徴的な取り組みについて報告していただきます。われわれにとって、とても参考になるお話が聞けるのではないかと思います。

報告 1

三保の松原における地域づくりの課題と可能性

前島國治（三保の松原フューチャーセンター）
宮城島史人（NPO法人三保の松原羽衣村）

（前島）

皆さん、三保の松原に来られたことはありますか。非常に風光明媚なところなので、ぜひ足を運んでください。

1．三保の松原で活動する団体

（宮城島）

私はNPO法人三保の松原羽衣村で理事長を務めていますが、実際に動いているのは、羽衣ホテルのオーナーのおかみさんである遠藤まゆみさんです。3年前に三保の松原が世界文化遺産の構成資産になる前から、このNPOはずっと活動しています。三保の松原は富士山を背景にした構図が15〜16世紀ぐらいにできて定着しましたが、そのような芸術や伝統を子どもたちに教え、広めるために、この羽衣村が立ち上がりました。しかし今は、松原の保全の方がマスコミでも取り上げられて、下草の処理や松葉かきなどをしているような団体として捉えられています。本来は違うのです。そこだけ一言申し上げます。

（前島）

そうなのです。初めは文化・芸術を掘り下げていくことが羽衣村の活動だったのですが、実際に三保の松原で活動する中で、これでは松原が守れない、まずは松原を守らなければと考えて、活動が大きく変わっていきました。

私は、三保の松原フューチャーセンターに所属しています。三保の松原は、富士山から50kmも離れているので、富士山の構成資産としてふさわしくないと指摘を受けていました。そこで関係各所が、日本人の原風景に三保の松原が不可欠であることを一生懸命訴えてくださり、ちょうど世界文化遺産登録の発表のときに、逆転で構成資産に残ったのです。その当時、日本全国、特に静岡の人たちは手放しに喜んでいたのですが、その中で、私は三保の地域に住む方々からさまざまな相談を受けました。

「前島さん、困った。世界文化遺産のときに知事が素晴らしいプレゼンをしてくれたけど、三保ではほとんどできていないぞ」、「世界文化遺産になって観光客がたくさん来たら、私たちの生活はどうなってしまうのだろう」。そんな声が地元からたくさん上がって、ではそれについてみんなで話し合う場所をつくろう、ということで立ち上がったのが三保の松原フューチャーセンターです。ですから、世界文化遺産に登録された6月22日の翌日、6月23日が設立日です。半分が地元の方、半分は私のように三保地域以外から参加している方で、毎回約20名が毎週活動しています。静岡大学にもフューチャーセンターがあり、私たちと同じ流れをくんでいます。

三保の松原フューチャーセンターでは、対等性、多様性、未来志向を尊重したセッションにより、いろいろなプロジェクトが立ち上がっています。例えば、地域との関係性を再構築する、キャンドルナイト「あかりともるよる」です。三保の松原の中でろうそくの灯をともす活動は、多分これでしかできないと思います。地域や行政の理解もいただきながら、今年（2016年）3回目が行われました。

もう一つは、「まつぺれプロジェクト」です。松原の保全に非常に重要なのは松葉かきです。松は枯れた土地を好みます。松葉がたまって腐葉土化すると栄養価が高くなり、どんどん広葉樹林が育ち、松にとっては生育しづらい環境になってしまうので、松葉をかかなければいけません。このプロジェクトは、その松葉をペレット燃料に変え、資源として捉えて、みんなでエネルギーの地産地消をしていくものです。

2. 富士山世界文化遺産に登録される前と後

（前島）

このように世界文化遺産登録が一つのきっかけになっているのですが、宮城島さん、世界文化遺産になった後で、例えばどんな問題が起きましたか。

（宮城島）

最近はポケモンGOです。ちょうど羽衣の松のところにピカチュウが出るということで、昼間より夜間に人が多いぐらいでした。静岡市がジムの削除を申請して今は画面から消えたので、騒ぎは少し収まったようです。

世界遺産に登録されたとき、羽衣村事務局の遠藤まゆみさんがテレビに出て、泣きながら「うれしい」と言ったのがまだ記憶に残っていますが、世界遺産の登録活動をしているときから、行政でも静岡県と静岡市では全然温度が違っていました。県はパンフレットを作り、一生懸命、富士山を世界遺産にしよう、三保の松原も構成資産にぜひ入れようとしていました。しかし、静岡市は、「絶対に無理だから諦めた方がいい」とずっと言っていました。だから、決まった当日は、富士市や富士宮市などで「おめでとう」とくす玉が割られましたが、静岡市は用意していませんでした。そして、観光客がたくさん来たらどうしようなど、対応が後手後手になっていったのです。

今の静岡県知事と静岡市長の仲が悪いのは、その辺から深まってきたのではないかという感じがしないでもありません。静岡市はどう見ても準備が遅かったです。世界遺産になったらどういうことが起こるかを準備しておけば、あそこまで慌てなくて済んだのではないかと思います。

電線地中化も、今は取りあえず電線の横のラインを取りましたが、われわれ地元は以前から、「富士山を見るときにどう見ても電線が邪魔だから、ぜひ電線地中化をしてほしい」と、市議会議員や市長などいろんなところに要望を出していたのです。しかし、「無理だよそんなの、お金があるわけないじゃないか」と言われていました。ところが、世界遺産になった途端に、電線地中化を静岡市が打ち上げたのです。これには本当にびっくりしました。「宮城島君、一生無理」と言って相手にもしていなかった人が、「宮城島君、頑張ろうね」と言ったのです。人間というのはそういうものなのだなと思いました。

実際に非常にたくさんの方が来られたので、三保の松原の象徴である「神の道」は大渋滞になりました。あれだけ車が来て排気ガスが出て、松は大丈夫かと思いました。市も当然そう思ったのでしょう。「では、取りあえずバスだけ乗り入れをやめよう」と言ったのです。僕からすると、「バスだけですか。乗用車はいいのですか」ということです。

また、そのバスも、確か5月の連休前ぐらいに、「宮城島君、（規制は）もう少し待ってくれないか」と言われました。乗り入れを禁止すると観光業者が困ると言うのです。世界遺産は、観光業者や観光客のためにやっているのでしょうか。三保の人たちは、何百年も松と共に生きてきました。自分の庭にある松の枝1本切るのも、行政に連絡して、許可をもらって切っていたようです。そうやって守ってきたのです。それが今回、観光業者、観光客のためということで、残念なが

ら要望は聞き入れてもらえず、ある程度観光シーズンが終わってからの実施になりました。これではやはり不信感を持ちます。

行政というのは、地域住民と共に自然を守るものですが、そこに少しずつずれが出てしまったのです。何十年もお金を掛けないでいたのが、世界遺産になった途端にたくさんお金が入るようになり、手のひらを返したように「これをしましょう、あれをしましょう」と、電線が取れたり、今度ビジターセンターもできたりします。しかし、地元の住民との間にはずれがあるのです。

世界遺産に登録されたら、たくさんの人が羽衣の松だけにやってきました。そこで静岡市も考えて、三保半島全体に人を回遊させようという施策を取っています。一生懸命アピールしていますが、電線を外しているのも羽衣の松周辺だけです。だから、お客さんは羽衣の松に行けばいいのだと思ってしまいます。すべてがその場しのぎなのです。これからも松は何百年もわれわれが守っていかなければならない。そのためには、羽衣の松だけ守ればいいというのはちょっとおかしいのではないかと思います。

フューチャーセンターさんもいろいろ活動されているので、地元にお金が落ちているかどうかは別として、非常にたくさんの人が三保に来ています。構成資産が25もある中で、「三保の松原が一番いいよね」とみんなが言ってくれています。他の構成資産は私もなかなか名前が出てきませんが、やはり三保の松原や浅間（せんげん）さん、忍野八海といったところしか行かないです。あとの構成資産は、富士宮の人穴というところがあり、この前行ってきたら、ものすごく立派な事務所があってトイレもきれいなものがあるのですが、人が一人もいませんでした。逆に言うと、何だかその事務所が浮いているのです。多分、あくまでも観光客のために慌てて造ったのだと思います。行政はどこを見て造るのかと、あらためて考えさせられた事例でした。

（前島）

三保ではいろいろな取り組みがある一方で、まだまだ潜在的な課題は解決されていないという話になっていますが、世界文化遺産登録の前と何が違うのかというと、良きにつけ悪しきにつけ、非常に注目されるようになったことです。非常に広報力が付きました。その中に松原の松枯れの問題があります。三保の松原は非常に松枯れが進んでいて危機的な状況にあります。40年前は5万8000本あった松が、2015年には3万699本、多分、今は2万8000本を下回っているのではないかと思います。これも、ほとんど今まで数えられていなかったのです。文化遺産に登録されたことがきっかけとなって、実際に松原には何本松があるのだろうという話になったのです。そこで協力してくださったのが、静岡市内の子どもたちです。ボーイスカウト、ガールスカウトの方々が一生懸命松を数えました。安全にカウントできるように地域の人も協力しながら、まず、松原の松を数えるという活動が起こりました。それでまず現状が一つ分かったのです。今まで5万8000本あると思われていた松が3万699本しかなかったということを知ったのは、文化遺産になった後です。

そのように、世界文化遺産になった後は、まずは非常に広報が進みました。除外勧告を受けながら、それが復活した三保の松原とはどんなところだろうと、たくさん人が来てくれました。実はその除外勧告を受けたときがお客さんのピークでした。三保の松原の構成資産は60haありますが、お客さまは羽衣の松に集中し、ほとんど他へ行きません。それもあって、大型バスが乗り入れると松の根を固めてしまうから手前でストップさせよう、もしくは、松の根を踏み固められてしまうと松が弱ってしまうので、ある程度人の動線をしっかりつくっていこうという考え方に及びました。これは間違いなく文化遺産に登録されたからだと思います。

今、宮城島さんがおっしゃったように、さまざまな関係者の大人の事情もあり、温度差がた

くさんあるのは事実です。ただ、その温度差をなくしていくものとして、この世界文化遺産になったということが非常に前向きに捉えられるのではないかと期待しています。もし文化遺産になっていなかったら、この松の本数は今ごろ、多分1万を下回っていたのではないかと思います。そのぐらいこの構成資産に登録されるということは大きなことでした。

ただ、どういうわけか景観だけが注目され、観光だけがクローズアップされて、そこに対する目に見える取り組みはたくさん行われてきますが、目に見えない活動がほとんど進んでいないという現状があります。それは、文化遺産というものの理解がまだまだ及んでいないことが原因ではないかと思っています。

地域の方々が、世界文化遺産に登録されて私たちの生活はどうなるのかと非常に危機感を持ったのは、三保の松原の観光の在り方、お客さまの受け入れ態勢がほとんど議論されていないことが原因だったようです。どんなルートでどんなふうに三保を楽しむのか、どこまで車が乗り入れられるのか、生活道路は守られるのか、緊急車両は私たちの家まで来てくれるのか。今、土日や長い休みになると、三保は大渋滞します。すると、緊急車両の進入がなかなかままなりません。今はカーナビがあるので、三保街道が渋滞すると生活幹線道路に車がどんどん入ってきて、非常に危ない状況も出てきます。それらをしっかり整備するためには、まず現状をしっかり知ることと、文化遺産をどうやって守っていくかを考えることが重要ではないかと考えています。

私たちに最も不足しているのは、松原保全に必要な知識です。もう既に4年たちましたが、厳密な土壌調査はされていません。松の生態研究などもまだ行われていません。盛んに植樹は行われているのですが、その植樹用の松はすべて、東北もしくは長野から来たものです。三保に適性のあるDNAを持った松は植樹されていない状況です。

また、松原と人々との関わりが希薄化しています。例えば、松葉です。今では厄介者になっている松葉ですが、100年ぐらい前はお米を炊くときの燃料用として常に松葉かきをしていたので、枯れた土地を好む松原はおのずと保全されていました。しかし、今はかまどでご飯を炊く家はほとんどないので、それが放置されてしまった。そういった生活文化の変化が、松原との関係性をどんどん希薄にしていったという現状があります。まずは松原との関係性をもう一度私たちがつくり出していかなければいけない。そのためにはどうしたらいいのか。そういったものも一つ、三保の課題です。

（宮城島）

羽衣の松へ集中するということと、もう一つ忘れてならないのは、東日本大震災のときの津波です。

三保地区は、地曳き網、ウインドサーフィン、カヌーなど、学校の子どもたちが教育旅行に多く訪れる場所でした。今も来てはいますが、東日本大震災の翌年から、キャンセルが相次ぎました。学校としては行きたいが、宿泊施設が三保にあると、津波が来たらどうするのかというのです。特に東海地震では津波が5分ぐらいで来るということで、どこに逃げるのですかと父兄から質問があり、校長先生が答えられないのです。そのような事情で、3分の2ぐらいがキャンセルになりました。

地元の人や学校も、浜に子どもたちを連れていきたがりません。でも、日本は海に囲まれているので、浜から遠く離れたところに住居を構えられるかというと、特に三保の住民はそういうわけにはいかないので、安全をどう担保するのかも重要なのです。ですから、今、三保半島には津波避難ビルが幾つか造られ、東海大学の三保研修館なども避難ビルとして指定されています。

今は海岸に人が集まらなくなりました。それ以前から、ゲームなどの普及で外で遊ばなくなっていました。私たちの子どものころはそういうものがなく、常に遊び場は松林や浜だったので、松の状況がよく分かっていました。でも、現在は、地元の人たちも浜に近寄らなくなりました。散歩する方は何人かいますが、特定の人だけです。地元の人たちでも、松林に何年も行ったことがないという人がたくさんいます。ですから、浜でどういう楽しみ方をするのかをもう一度考えて、浜というのは楽しいんだよということを、まず親の世代が子どもに教えなければいけないと思うのです。

一つの良い例として、夏の水泳があります。今はプールがあるので、学校で泳ぎを教わりますが、私たちの時代はプールがなかったので、海で泳ぎを覚えました。ガキ大将に桟橋から落とされて、あっぷあっぷしながら泳ぎを覚えたのです。だから、海の怖さも知っているし、楽しいことも知っています。しかし、今の若い親の世代はプールで泳いでいるので、海では泳げないとか、海は嫌だという親御さんが多く、海水浴に連れていかないという話も聞いたことがあります。そこで、海の楽しさをもう少し知ってもらうために、アロハ三保フェスティバルや三保あさり祭りなど、さまざまなイベントを行って海岸に人を集める努力をしています。

3. 広がりゆく地域活動

（前島）

三保にはさまざまな課題がある中で、地域の中の取り組みが進んできています。例えば、「あかりともるよる」は、1回目が約3000人、2回目が7000人を超えました。3回目はもう少し縮小しないと危ないということで、約5000人の規模で開催されています。これは、地域の自治会、消防団、青年団など、さまざまな団体が足並みをそろえて行う一つの象徴的なイベントになっています（図1）。

図1　あかりともるよる

学生の皆さんが参加している「三保松原地域活性化プランコンテスト」は、静岡出身の学生たちが企画してくれたもので、今年（2016年）2回目をやり、今度は3回目です。関東・関西など、10以上の大学から参加いただき、三保のためにどんなことができるかというプランのコンテストです。ちなみに、第1回プランコンテストの最優秀賞は「三保ポーズ」です。これは、みんなで写真を撮るときに三保ポーズで撮ろうというような発案です。

また、三保の松原を資源として捉え、多くの学校に教育の場として使っていただいたり、ふじさん部の子どもたちが植樹をしてくれたりしています（図2）。これまでは植樹することが目的になってしまい、その後の整備がおろそかで、なかなか松が育たないという状況があったのですが、ふじさん部の皆さんは、植樹をした後、その松を自分たちで守ろうということで、月に1回、必ず植樹した松原の清掃活動に来てくださっています。

図2　ふじさん部による植樹

三保フラダンスフェスティバルが、真崎の灯台のハーバルキャンプ場で開催されています。今年は第2回を開催し、非常にたくさんの方々がこの三保の松原で文化活動をしてくださっています。

また、海岸清掃も行われています(図3)。複数の団体が、毎月、海岸清掃をしています。

図3　海岸清掃活動

羽衣の松に大型バスが集中していますが、何とか観光の回遊性を促したいということで、ノルディックウォーキングも行っています。これは2本のポールを使って歩くスポーツで、それで三保の松原を歩いて楽しんでもらおうということです。静岡大学にもノルディックウォーキングの研究をされている先生がいらっしゃいます。

私たちは、なかなか松原について勉強が進んでいないのですが、他の地域ではどんなことをしているのだろうということで、まずは佐賀の虹の松原、京都の天橋立、福井の気比の松原に実際に足を運んで意見交換をしてきました。虹の松原は、日本で最も松原の保全に地域が関わって取り組んでいる地域だと思います。各地で講義・講習会の依頼を受けて発表されています。今、そこと年に2回交流しています。私が佐賀に行ったり、佐賀の方々が三保に来てくださったりという形です。また、文化的な人材育成のための「三保松原学」文化講座も、今年は第2回を開催中です。

4. 今後の展望

（前島）

今後は、ぜひ学校教育で三保の松原というフィールドを使ってほしい、修学旅行などで皆さんを受け入れていきたいと考えています。また、エコツアーも検討しています。近年非常に盛んに行われていますが、三保の松原の保全活動に参加する機会を提供していこうということも、今考えられています。

松原の保全については、保全活動の先駆者である、全国松原保全協議会のさまざまな地域の実務者の方々と連携していて、「白砂青松、松露の採れる松原の復活」が合い言葉となっています。行政は「白砂青松」が目標になっているところが多いのですが、実務者レベルになるとその後ろに「松露の取れる松原」が付いてきます。健全な保全をされないと松露は取れないので、松露の復活する松原を目指そうという合い言葉です。

私はこれまで地域づくりに関わってきましたが、何をもって地域活性とするのか、これは非常に重要な問題だと思っています。例えば、私たち三保のフューチャーセンターもそうです。さまざまなところでコミュニティが開催されますが、そこに参加される方々は、地域の中のごく一部です。非常に積極的な方々の意見は拾いやすい。しかし、そこに足を運ばない方は、意識が低いわけではないのです。もう当たり前のように地域に愛着を感じて、そこで生活をされている方々です。そういった方々の声もどんどん拾って、住民の理解と意見がきちんと反映された状態をつくることが地域活性には必要ではないかと思います。

その中でぜひ行ってみたいと思うのは、松崎町で常葉大学がしている聞き書きという取り組みです。学生が地域の方々のところに行き、インタビューして、本にまとめ上げているのです。松崎町ではもう4年続いていて、住民の声からなる郷土史のような、非常に素晴らしい本が4冊できています。いろんなところでそういった活動が行われると、本当に住民の理解や意見が反映された地域づくりができるのではないかと思っています。ぜひ、静岡大学の皆さんにも、フィールドワークとして三保に来ていただきたいと思っています。

報告２

学生参画による地域連携の取り組み

宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター准教授）

学生支援センターでは学生の就職支援、インターンシップの企画推進をしています。学生参画による地域連携として私が学校内で取り組んでいる地域連携は、大きく分けて三つあります。インターンシップ、フィールドワーク、フューチャーセンターです。インターンシップの話からさせていただきます。

1．インターンシップ

来年度、地域創造学環の2年生のインターンシップ科目が始まるので、今ちょうど地域創造学環の先生と一緒に企画を進めていますが、そもそもインターンシップが約20年前に日本でスタートを切ったときは、産学連携のための人材育成が主な目的だったのです。それが少しずつ変わっていきます。

1999～2000年に、キャリア教育の中でインターンシップが語られるようになってきます。これには時代背景があります。このころ、新卒の求人は非常に厳しい時代でした。氷河期、超氷河期といわれ、2000年卒の求人倍率は0.99倍でした。そういう状況の中で、インターンシップによって若者の失業を避けようという政府の方針があり、キャリア教育の方にバトンタッチされるようになりました。

先ほどの三保松原の発表に「ずれ」という話がありましたが、この「ずれ」というのは私の発表のキーワードにもなります。大人あるいは担当者がよいと思うことを少しずつやるのですが、その受け皿となる側の思いと一致しないということが起きているのではないかと感じています。

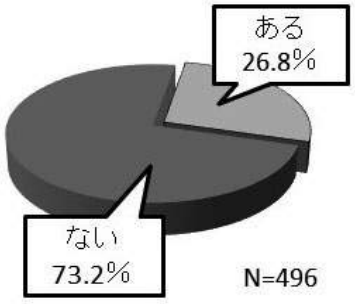


図1　「職場体験・インターンシップ」実施の有無
（出所）「静岡県における新卒者採用に関する実態調査」および「新卒者の就職活動時の実態調査」集計結果報告／公益財団法人就職支援財団・静岡県経済研究所共同調査　2012年5月実施

例えば、4年前（2012年）の静岡県内のインターンシップの実施状況は、4社に1社です（図1）。なぜ受け入れが進まないのか。当時の調査によると、受け入れは大変だということです。つまり、日常業務に追われている中でさらに学生の面倒を見るのはごめんだというふうに捉えられます（図2）。インターンシップは、産学連携としては非常に良い試みとして日本でも取り組まれますが、受け皿の方でスムーズに移行できなかったといわれています。

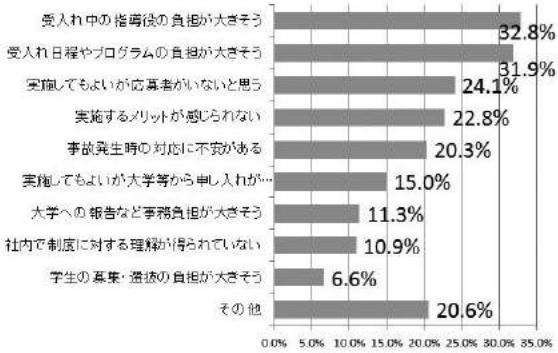


図2　「職場体験・インターンシップ」が実施できない理由
（出所）前掲に同じ

ただ、就職活動解禁時期が変更になり、さらに売り手市場と言われて、学生の方が企業を選べる時代になりました。1年生の皆さんは、就職難と聞いて大学に入っている方もいると思いますが、今は就職難ではありません。今はバブルの時代よりも求人が多いです。むしろ、自分に合うか合わな

いかというところで選択が難しいような状況です。そうなると、企業は「インターンシップへぜひ来てください」、学生も「就職の準備のためにはインターンシップに行った方がいい」という感覚になってきていると思います。

しかし今、採用活動の一環としてインターンシップを始めた企業の満足度が実際にどうかというと、経済産業省の調査データによれば、決して高くありません（図3）。ですから、目的はなかなか果たせていないのです。一方で、学生が持つ専門知識の活用や職場の活性化という面では満足度が高いです。こういうところに副次的、間接的な効果が出ており、それぞれの期待と思惑がずれているケースが出てきているのではないかと感じています。私も今、企業もWin、学生もWin、大学もWinとなるインターンシップをどうつくっていくかを本当に模索しながらやっています。

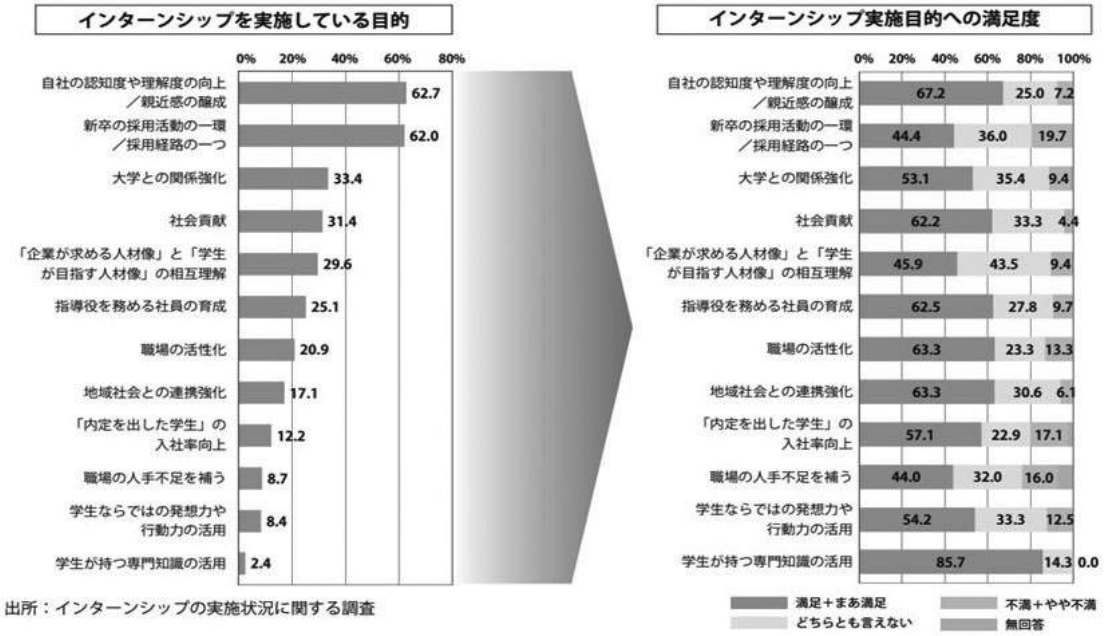


図3　インターンシップ実施目的と満足度
（出所）経済産業省「共育型インターンシップ　～人が育ち企業が伸びる新たな「場」～」（2014年発行）より

2. フューチャーセンター

われわれが運営している中で考えているフューチャーセンターの定義は、オープンな雰囲気で、多様な見方を尊重し、未来志向で捉え、アクションにつなげる場です。フューチャーセンターは、もともと北欧の企業が問題解決の手法として始めたものが日本に伝わり、企業が最初に導入し、その後は地域や大学に広がっています。

地域の中でフューチャーセンターが広がっている背景は、課題が複雑化していて、そのコミュニティの人たち、いわゆる当事者だけでは先に進めないような問題が出てきていることです。そのときに、ステークホルダーといわれる利害関係者や、まったく関係のない方も含めて意見交換をすることで、当事者意識を持つ新たな担い手が生まれ、プロジェクトを進める上での一端を担ってもらうことにより解決への負担が少なくなります。重いものを1人で持つのは大変ですが、何十人かで持てば負担は少なくなるからです。

静大フューチャーセンターには、多様性、対等性、自主性、対話、未来志向という五つのキーワードがあります。静大フューチャーセンターの活動は3年前の2013年8月16日に第1回が始まり、私の研究室（共通教育棟C棟）で平日の夜に実施しています。定員は約12名ですが、最大約25名が見に来たりして、廊下まではみ出して2グループで、お菓子やジュースをつまみながらい

ろいろ話をしています。全体の進行は学生が行いますが、静大フューチャーセンターの運営に携わっているディレクターの学生は5人おり、1人は海外に留学中です。興味があれば、今日履修されている方々ものぞきに来ていただければと思います。行政の方、社長さん、今はニートという多様な社会人の方もいらっしゃるし、卒業生も来ます。いろいろな方が見えて、そのときそのときの課題に取り組んでいます。

私の研究室だけではなく、来てほしいと言われて、外へ行くケースもあります。2016年9月1日には「きくがわフューチャーセンター」を菊川市の市民協働センターで行いました。市内でお茶の振興に取り組む「茶夢来（さむらい）」のメンバーにアジェンダをいただいて、それを学生がファシリテートしながら、地域の方や学生、32名で3時間ぐらい話し合いました。

静大フューチャーセンターは、当時理学部4年生であった天野君との話の中で生まれました。フューチャーセンターは、その当時、県立大学で始まっていました。その取り組みについては私も承知していて、そのフューチャーセンターに参加したことがある天野君と話をしている中で、お互いの思惑が合ったのです。彼は、静大でもフューチャーセンターをやってみたい、地域に関わりたい学生はもっといるのではないかと考えていました。私は、キャリア支援をする中で、学生と社会人は交流機会をもっと持つべきだと感じていました。インターンシップやフィールドワークもいいけれど、もっとカジュアルに触れる機会が欲しいと思っていました。

なぜかというと、学生は、社会に出ること、働くことに対する恐怖心、不信感、不安感をわれわれが思っている以上に持っていると感じていたからです。それから、今の学生の価値観、大事にしたいと思うことと、例えば私が持っている価値観とは大きく違います。でも、これからを担っていくのは学生の皆さんです。大人の価値観を押し付けるのは簡単かもしれませんが、それでは未来は開けないのです。われわれは、むしろ若者が持っている価値観を学びながら、未来を開いてやることが大事なのだろう、その機会が欲しいと思っていました。何人かの大人から、「ぜひこういうことを学生さんが手伝ってくれたらいいな」ということも聞いていました。そういうこともあって、フューチャーセンターをやってみようということでスタートしたのです。ただ、もともとはこのような目的で始めましたが、周りの期待も変わってきます。これはいい意味で受け止めるべきだと思います。周りの期待に沿えるものは適合していけばいいと考えています。

今、静大フューチャーセンターの運営は、私と佐藤先生（学生支援センター）が顧問のような形でいて、4代目ディレクターの学生たちが行っています。初代ディレクターは天野君一人でした。そして、ぜひこのことについて話し合いをしてほしいとアジェンダオーナーに課題を持ち込み、一緒に打ち合わせをしてセッションが行われます。ですから、私はどのようにセッションが行われるかは、当日までほとんど知らないのです。私も一参加者として参加しています。

3. 地域課題解決支援プロジェクトと静大フューチャーセンター

2015年2月、松崎町で地域課題解決支援プロジェクトの公開シンポジウムが開催されたとき、地域の方々に、フューチャーセンターの活動を松崎町でもやってほしいと言われ、「静大フューチャーセンターin松崎」が2015年3月に実現しました。松崎町の深澤さんのご協力で、当日は松崎町のいろいろな立場の方が見えて、学生が運営しました。翌日は中高生と一緒にやりました。実は私どものフューチャーセンターの価値の大きな発見があったのはこの会でした。

ここで思惑とずれの話をします。ちょうど阿部耕也先生が論文で、自治体から大学への期待と、大学が考える自治体への貢献とのずれをまとめられています（表1）。これは非常に実態を

表1　自治体と大学、それぞれの期待と思惑のズレ

地域に対する大学の貢献項目	自治体から大学への期待(順位)	大学が考える重要度(順位)
学生の社会貢献活動(ボランティア活動等を推進)	1	7
実践に役立つ専門的知識・技能を有する人材養成	2	1
幅広い教養を身につけた人材の養成	3	3
人間性豊かな人材の育成	4	5
公開講座の充実	5	6
大学教職員を市町村へ講師や助言者として派遣	6	10
生涯学習や教育の最新の動向等について情報提供	7	12
公開講座を市町村で行うこと	8	16
住民向けの講演会を実施すること	9	24
地域の活性化のためのプログラムを開発・提供	10	9
中・高校生を対象とした講演会やセミナーの実施	11	11
実際的、または実践に直結する研究の推進	12	2

（出所）阿部耕也「大学と地域連携の要因分析の試み：大学と地域との連携によるまちづくり調査から」（『静岡大学生涯学習教育研究』2008）を基に作成

表していると思います。例えば、自治体への貢献で大学が一番重要だと考えているのは、実践に役立つ専門的知識・技能を有する人材養成ですが、自治体からの一番の期待は学生の社会貢献活動なのです。しかし、大学が考えるこの重要度は7番目です。そこが随分ずれていたのではないかと思います。

キャリア教育は私が専門とする分野の一つですが、下村英雄先生が、『キャリア教育の心理学』という本の中で、働くこと、学ぶこと、生きることを教えられる場所は、課題を持っている地域だと書いています。私の授業を受けた方には何回か話していますが、キャリアを考えるとか、就職とかということではなくて、今後生きるために働いていく、でも、働くために学び続けなければいけない、それは何かにせかされてではなく、自分の生活を豊かにするために学んでいく必要があるのです。働くことと学ぶことは一体感があるはずですが、今の世の中ではなかなかそれを一体化して考える場所がありません。自分が今勉強していることがどのように役立つかよく分からないとも言われます。働くこと、生きること、学ぶことを、昔は大人が伝えられる場所があったけれど、今はなかなかない。でも、この三つのことを教えられる場所がある。それは、課題を持っている地域です。ここに学生が入ることによって、生で理解することができると私は思います。

ただ、そこにもやはりずれがあります。地域から学生への期待としては、学生の柔軟な発想で何かをやってほしい、学生が来ると活気が出る、町の取り組みを知ってほしい、祭りの担い手がないのでそれを請け負ってほしいなど、いろいろいただきます。私もインターンシップ、フィールドワーク、フューチャーセンターに取り組んでいる中で、失敗例と成功例を感じてきましたが、失敗例で、地域側に共通していることは三つあると考えています。一つ目は、何とかしてほしいとおっしゃる地域の方々に当事者意識がないことです。二つ目は、成功イメージが共有できないことです。複数の大人が、どうなったらいいのかということについてまったく違うものを考えています。三つ目は、大学や学生に対する固定観念です。大学の教員は融通が利かないのでしゃしゃり出ないでほしい、学生は大体暇だろうから手伝ってもらえばいい、というものがあります。しかし、今の学生は勉強もアルバイトもあって、非常に忙しいのです。このような固定観念があって、随分思惑が違うのです。

これは失敗例で地域側に共通していることでしたが、「地域」を「大学」や「学生」に置き換えてもまったく同じです。大学がそもそも地域課題に当事者意識がないと駄目なのです。大学の教員が成功のイメージを共有できていないもの、大学の教員が地域や学生に対する固定観念を持っているものもうまくいきません。学生も同じです。今、地域創造学環でフィールドワークをされている学生も多いと思いますし、これからインターンシップや地域に出る方も多いと思いますが、そもそもそこに対して何かアイデアを出さなければいけないというような、お客さん気取りで参加しているのであれば、何のメリット、成果もないと思います。また、学生は、結果どうなったらいいかという成功イメージが普通は分からないと思います。分からないからこそ地域の方に聞かなければならないのですが、それを勝手に「こうなったらいいのではないか」と自分たちの思いだけで進めてしまう学生のチームがいて、うまくいかなかったことがあ

りました。地域に対する固定観念、こういう仕事はなかなか大変だろう、こういう大人はこうなのではないか、というような固定観念を持った学生がやったケースもうまくいかなかったです。このようなところに、ちょっとしたずれが生じているのではないかと思います。

表2　地域と大学連携のためのノウハウ

	連携のためのノウハウ
成功するためのポイント	学生主体の組織づくり、地域からの教員への信頼
中心的役割	教員、支援組織、学生の代表、学生同士の協働
地方自治体の支援内容	事業関連データ提供、事業関連ステークホルダーの紹介
地域活性化の成果	次世代育成、伝統行事の継承、観光振興支援、地域の魅力発見、生き甲斐づくり
大学側のメリットや効果	学生の成長、大学の競争力

（出所）大宮登「大学のマンパワーを活かした地域活性化」『平成26年度地域活性化ガイドブック』を一部表現修正

地域活性学会の会長でもある、高崎経済大学の大宮登先生は、地域と大学連携がうまくいく方法を述べています。その内容は、「成功するためのポイント」は、学生主体の組織づくり、地域からの教員への信頼、「中心的役割」は、教員、支援組織、学生の代表、学生同士の協働、「地方自治体の支援内容」は、事業関連データ提供、事業関連ステークホルダーの紹介、「地域活性化の成果」は、次世代育成、伝統行事の継承、観光振興支援、地域の魅力発見、生きがいづくり、「大学側のメリットや効果」は、学生の成長、大学の競争力、というものです（表2）。それぞれ非常に大切だと思っていますが、特に地域からの教員への信頼ということは私も常に考えています。地域から見たときに、間に入る大学教員が信頼がある人なのか、それを自分自身に問いながら、普段のインターンシップやフィールドワーク等々に取り組んでいます。

4.「地力発掘」の仮説

学生は、企業の資本金、従業員数、給料、休日など、目に見える価値に敏感ですが、企業には、チームワーク、顧客との信頼性、経営者との関係など、職場の雰囲気、コミュニケーションといわれる目に見えない価値があります。今、私が学際科目で行っているインターンシップでは、目には見えない価値が大事であること、それがどういう形で表れていることが企業のタフさ、素晴らしさ、企業価値につながるのだということをしっかり座学で教えることによって、それに着目できる学生をインターンシップに送り出すことができました。そうすると、学生はそこに着目しながらインターンシップに取り組み、知名度や仕事内容だけではないところに職場の価値を見いだしていきます。そして、そのことを企業に還元することによって、企業が新しく、自分たちでは分からない価値を発見できるのです。これはフューチャーセンターでも少し感じたことです。

これが、学生が地域に入ることで成功する事例の一つのポイントになるのではないかと思っています。私はこのことを「地力発掘」と名付けています。地力とは、辞書では、「もともと備わっている力。本来の力」と定義されています。学生が入ることによって、地域や企業が、もともと持っていた自分たちの力に気付くというケースがあるのです。

また、松崎町で3月にフューチャーセンターの活動を行った後で振り返ったときに、私たちは何か素晴らしい成果を残せたとはまったく感じていませんでした。しかし、行政や町の方から非常に好意的な感想をいただき、これはどうしてなのかということをよくよく考えていきました。たどり着いた答えの一つは、かすがい機能です。地域の大人は普段、それぞれの立場やコミュニティの中でものを考えています。松崎町の例で言えば、観光協会、農業委員会、猟友会、婦人会の方たちが、それぞれが良いと思うことをやっていこうとはするけれど、大人同士で町の未来を語ることはあまりありませんでした。それが、学生が入ることによって本音の話ができるようになり、大人がつながっていったということを実感しました。

そうすると、地域が点の集合体ではなく面になって、大学が地域にもっといろいろな関わり方ができるようになってきたと感じています。現在までに、何十回と学生が個人的に松崎町を訪問し、いろいろな機会をいただいています。やはり愛着が生まれるのです。その愛着は、地域のいろいろな資源ではなく、人のつながりに持つのです。人のつながりが生まれるには、思惑のずれや期待のずれを話し合っていかなければいけない、感じていかなければいけないと思っています。それがいつもいるメンバーだとうまくないとしたら、学生が入ることによってきっかけができるのではないかとも思っています。

2016年9月、フューチャーセンターで菊川に行ったときも、私どもは目に見えた成果はまったく残せていないと感じましたが、茶夢来さんが地域の中でいろいろな取り組みをされていることに対して後押しはできたのではないかと思いました。少なくとも、私自身は応援団の一人になりました。フューチャーセンターをやることによって、突然何かのプロジェクトがスタートするわけではありませんが、応援団の一人が増えることによってできることが増えてくるはずです。そういったきっかけを少しずつつくっていかなければいけません。大人は短期的な成果ばかりを追い求めがちですが、長期的な成果を見据えながらやる、さらに、それは目に見えない成果なので、われわれが学生にそれをきちんと言葉として教えていかなければならないと考えています。

報告３

松崎町における地域づくりの課題と可能性

深澤準弥（松崎町企画観光課）

松崎町は、伊豆という名前が付かない町なので、どこにあるのかといつも聞かれます。私たちも、松崎町をみんなに知ってもらうためにさまざまな取り組みを行っています。

松崎町では、富士ゼロックスと一緒に、古民家を再生して今年度（2016年度）からコワーキングスペースとして、最新の機械を入れ、テレビ会議のシステムを整備しました。新しい働き方が見つけられるようなスペースになっています。地域の方が勉強をするにしても、静岡ではたくさん公開講座が開かれていますが、松崎町からはなかなか行けないので、近距離で講座ができたらと考え阿部先生に相談させていただいて、今回はテレビ電話で松崎町とこの会場をつなげることができました。

1．松崎町の概況

牛原山という中心部にある山から松崎町を眺めると、海があり、山があり、そして富士山も見えます。駿河湾も世界で最も美しい湾クラブに加盟しているので、世界一の富士山と世界一美しい海の両方が見えます。

位置は伊豆の西南部で、西伊豆町と南伊豆町の西側の間にあります。裏は下田市、河津町があります。東伊豆だけは直接、接点がありません。でも、今日参加している東伊豆町の荒武君とは接点があります。宇賀田先生の報告でも話があったとおり、地域のつながりは人がつながることから始まるので、東伊豆町ともつながっていると言ってもいいのではないでしょうか。

人口は、静岡県で最少で、現在約6300人です。高齢化率は約43％です。静岡県内の高齢化率は、1位が西伊豆町、2位が川根本町、3位が南伊豆町、4位が熱海、そして5位が松崎町となっています。

町の観光施設は、町が100％出資している（一財）松崎町振興公社が指定管理者として運営しています。漆喰（しっくい）文化が昔からあり、松崎町出身で東京で活躍した、漆喰鏝絵（こてえ）の名工、入江長八の美術館「伊豆の長八美術館」（図1）や、なまこ壁の建物があります。

宿泊施設としては、公共の宿伊豆まつざき荘があります。

図1　伊豆の長八美術館

2．まちづくりの施策

松崎町が取り組んでいるまちづくり事業を紹介します。まずはグリーンツーリズム推進事業です。修学旅行、体験型の学習旅行を受け入れ、カヌー、シュノーケリング、地曳き網などを中心に行っています。ただ、最近こればかりだと少し弱いと思って、山のアクティビティも取り入れることを考えています。その一つとして、棚田の保全活動があります（図2）。

図2　棚田保全事業

また、「スケッチの町宣言」をして、今、県も力を入れ

ていますが、絵に残したくなるような農村や町の景観を守ろうとしています。

次になまこ壁技術の伝承です。町の景観の一つに、なまこ壁の建造物があります（図3）。格子になっている部分が盛り上がっていて、海のナマコに似ているのでなまこ壁といいます。このような建物が、昔栄えていた証として港町に多く見られます。お金持ちが防湿・防火対策で造っていました。これも一つの文化で、これを残すためにはお金が掛かるので、町でも補助したりしています。また、漆喰の絵画を全国から公募し、1年に1回コンクールを開いています。このようなことをして人寄せを一生懸命しています。

図3　なまこ壁の建造物

さらに、花の咲くまち推進事業として、5万8000m^{2}の田んぼを農閑期には花畑にしています。時期によって花が変わります。桜並木も6kmほどあり、見栄えがするので、春には人がたくさん来ます。

シーカヤックマラソンや伊豆トレイルジャーニーなどのスポーツ事業も行っています（図4）。シーカヤックマラソンは海のスポーツで、伊豆トレイルジャーニーは、松崎町を出発し、山の中をずっと走って伊豆市まで行くというレースです。1万9000円を払って地獄のようなランニングをします。私たちスタッフも朝3時から夜10時まで付きっきりで、なかなかハードなイベントです。

図4　シーカヤックマラソン

また、その他の取り組みとして、言った者勝ちということで、「世界でいちばん富士山がきれいに見える町」を勝手に宣言してしまいました。これは住民の方の発案でした。ちょうど駿河湾越しに真正面に富士山が見える地域が多くあり、駿河湾も世界で最も美しい湾クラブに認定されたので、世界一の海と世界一の山ということで、今、声を大にして言っています。

交流拠点施設整備事業を行い、冒頭に述べたように、富士ゼロックスと官民協働でお試しシェアオフィスを整備し、移住・定住につなげたり、新しい働き方を模索したりしていきます。今回のように地域の人がテレビ会議室等を使って、生涯学習的なスキルをより上げることができたり、静大フューチャーセンターのサテライトのようにして、ここに中高生を呼んで、静大フューチャーセンターとつないでみたり、さまざまな可能性が広がるということで、自分としてはすごく期待し、感謝もしています。

松崎町は、桜餅を包む塩漬けの桜葉が有名で、日本産では日本一になっています。それも担い手がいなくて、いろんな工夫をしなければならないので頭を悩ませているところです。その桜葉がなまこ壁のスカートをはいたマスコットキャラクター「まっちー」もつくりました。あまり人気はありませんが。

日本には「日本で最も美しい村」連合というものがあり、松崎町は平成25年に加盟しました。これは、「世界で最も美しい村連合」がヨーロッパで発足し、北海道の美瑛町長とカルビーの会長が「日本でもやるべきだ」と考えて始めたものです。素晴らしい地域資源を持つ、規模としては1万人に満たない町村や地域で、自分たちの宝を自分たちで磨き、誇りを持って維持していくことは、そこで生きるということにつながります。地域の活性化には、そこに生きとし生ける人たちの暮らしが充実していることが大事だと思っています。そうしていくと観光客や交

流人口が増えてくるのではないかと考えています。さまざまな方に来ていただくために、自分たちを磨く。自分自身がしっかり光り輝けば、人は集まってくるのではないかと思っています。「日本で最も美しい村」連合の趣旨にも、地域外の人との連携による共通体験こそが最も美しい村の価値を創造していくとあるように、やはりつながることは大事だと思います。

なまこ壁の現況ですが、どんどん減っています。古い建物は取り壊されていくのが世の常ですが、それを維持していくことによって、その地域が光るのではないかと思っています。建物は各地域の文化・風土を映し出すので、それらを残していく活動を一生懸命しています。ただ、所有者の方は経済的な負担が増えるので、価値意識がなければ到底残せません。従って、できるだけこのようなものを、個人の所有物であっても地域の宝として持ち上げていこうという話をしています。保存に向けてはいろいろな形で政策を重ねています。景観ガイドラインの策定も昨年度（2015年度）に済ませています。

石部の棚田地域も6割以上は高齢者で、いわゆる限界集落と呼ばれるところです。限界集落は年齢で区切られますが、若い人がたくさんいても無関心な人が多ければ、あまり意味がありません。関心を寄せる方がより多くいれば限界にはならないというのが私の持論です。これもオーナー制度、一社一村運動等を使って、外からの人をたくさん呼び込んでいます。冬の夜には棚田に自動点灯式のLEDをつけて景観をつくっています。

3. 松崎町の課題と可能性

静岡大学地域課題解決支援プロジェクトへの第1回応募数は、松崎町のプロジェクトが四つ、商工会のプロジェクトが一つ、第2回は松崎町のプロジェクトが五つと、課題の豊富な松崎町です。人口流出による過疎化・少子高齢化・地域産業の担い手不足など、課題はどこの地域でもあることなのですが、アクセスするチャンスが伊豆半島南部は極端に少ないので、大学や企業との連携はこれからも大事になっていきます。

松崎町の可能性として、代表的なものは静岡大学をはじめとした大学との連携です。インターンの受け入れを積極的に総務課に働き掛けています。担当者の負担という問題もありますが、私は担当者の人材育成につながると考えています。人に物事を教えるときは、自分が本当に理解しないとその先に行けません。それが町の、ひいては行政職員のスキルアップにもつながると考えています。そこはWin-Winになれると思っています。

県内外の自治体との連携・協力も行っています。最近では北海道の美瑛町や、島根県海士町の副町長といろいろな話をさせてもらっています。最近仲がいいのが鳥取の智頭町です。そこは小さいけれど特長のあるまちづくりをしていて、「森のようちえん　まるたんぼう」や「タルマーリー」という有名なパン屋の人とも交流を持たせてもらい、何かできないかと考えています。

他にも、三島信用金庫や静岡銀行などの金融機関と連携協定を結んだり、日本政策金融公庫と連絡を取り合うなど、さまざまな形でつながりを持ち知恵を借りています。日本政策金融公庫には農業関係の部署があるので、協力して一次産業を振興させたいと考えています。静岡銀行は全国的にも地銀ネットワークを持っているのでそれを活用、三島信用金庫は地元金融機関なので、そのノウハウや力をお借りします。両行とも地域活性化については、地方創生の部署を作って対応しているので、利用しない手はないだろうということです。協定を結んで終わりの自治体が多いようですが、松崎町は何でもすぐ専門の部署に電話してお願いしています。

企業の研修等の誘致は、1月にコニカミノルタのリーダーズ研修を誘致することができました。1週間かけてコニカミノルタの新リーダーとなる人たちが松崎町で考え方の勉強をし、最終的に町長にプレゼンをしてもらうというものです。

今、移住・定住が盛んに行われていますが、松崎町は対応しきれない面があるので、二拠点居住を推進しています。ある時期だけ来るとか、松崎町は雪がないので、長野・新潟・山梨などから、閉山している時期にこちらへ来て新しい働き方ができないか、などを考えています。

美食のまちづくりも行っています。料理マスターズ倶楽部という団体があり、そこは東京でシェフズキッチンというディナーイベントを開催しています。このシェフズキッチンで、松崎の食材を使った1万5000円のディナーを出してもらいました。このイベントを松崎に持ってくることを企画しているのですが、予算が厳しく、工夫しなければいけない状況です。しかし、人のつながりから、このようにいろいろな事業、いろいろな考え方が生まれてきます。

料理を担当するのは、北沢正和シェフという、長野の職人館の館主です。職人館のお客さんは、ほとんど東京から外車に乗ってやってくるセレブです。彼らは、築地で高い金を出せば全国の高級食材が手に入るのですが、わざわざ長野まで食べに来るのです。北沢シェフは、地元で作ったものを使って付加価値の高い料理に仕上げています。そうすることで、仕入れの単価を上げられるので、農業者も生きていけるという、循環的な経済観念を持っているのです。だから、この人を頼って就農者がこの地域に50人ぐらい移住してきています。いわば、料理による地域活性化です。最近、「星のや東京」がオープンしましたが、そこのフレンチの料理長がこの方を崇拝しているそうです。

また、景観のまちづくりとして、景観と防災、景観と観光、景観と人づくりについて考えています。

先日、静岡大学の地域創造学環の学生に来ていただき、フィールドワークをしました。商店街の空き店舗を使った無料休憩所では、町民に見てもらえるように、前回と今回の途中経過の報告や成果を貼って、みんなで記念撮影しました。大学生が来ることによって、地域の大人たちが刺激を受け、自らも考え直すきっかけになったようです。また、当事者意識の醸成というか、当事者意識に気付くことができるなど、みなさんが起爆剤になっています。受け入れ側の考え方一つで、いろいろな形でWin-Winになれるのではないかと考えています。学生に何かをお願いするというより、学生に松崎に来てもらい、学んで成長してもらうことで、私たちにフィードバックされるものが大きいのではないかと思います。

このような形で、住民自らが住んでいる地域に誇りを持ち、行政と協働でまちづくりを進めていくことを目指していかなければならないと考えています。行政だけでも駄目ですし、住んでいる方々だけでも足りないところが多々あるので、いろんな形でつながることが大事だと痛感しています。住む人にも、訪れる人にも、愛され、誇れる町へ。松崎町で地域の課題解決を楽しく学びましょう。

報告４

東伊豆町における学生参加のまちづくり
―学生リノベーション事例「ダイロクキッチン」―

荒武優希（東伊豆町地域おこし協力隊）

僕は25歳で、出身は神奈川県横浜市です。2010年に芝浦工業大学工学部建築学科に入学しました。大学院に進学してから、「空き家改修プロジェクト」という学生団体を設立しました。今年2016年の春、卒業と同時に東伊豆町に移住し、地域おこし協力隊として活動しています。2016年11月には学生団体の仲間たちと一緒にNPO法人を設立しました。今回は学生団体の活動と、その後の話をさせていただこうと思います。

1．活動のきっかけ

東伊豆町で空き家対策の担当をしていた町職員の方が、ある学生に「町の空き家を改修してみないか」という話をして、それをきっかけに、その話を受けた学生と、僕を含めた同級生が「空き家改修プロジェクト」という学生団体を設立しました。

まちづくりに参画している学生団体は多いと思うのですが、僕たちは建築を勉強していたので、空き家改修をまちづくりの手段にできないかと考えて活動をスタートしました。僕たちの大学の課題は、机の上やパソコン上でこなすだけのものだったので、実際に地域に入って、自分たちが考えた提案を形にしていく体験ができて、とても感動を覚えました（写真1）。

ところが、自分たちの思い描く理想の提案が実現するまではよかったのですが、改修した建物が町の人たちにまったく活用されなかったのです。とてもショックを受けました。先ほど宇賀田先生が、地域側の失敗パターンを紹介されましたが、これは学生側の失敗パターンだと思いました。僕たちは、自分たちが考えたことをただただやりたいから東伊豆町でやる、というような気持ちで地域に入っていて、東伊豆町はどこか遠い町で、他人事に感じていた部分があったと思います。このショックな出来事をきっかけに、自分たちが建物の改修に関わることの責任感を意識するようになりました。つまり、当事者意識を持つようになったのです。このプロジェクトが、現場での活動も含めて自分ごとになったきっかけだったと感じています。

写真1　他人事で活動していた1年目のプロジェクト

2．２年目の活動

町からは空き家の活動をとても評価していただき、2年目は次の物件を紹介していただきました。東伊豆町の稲取温泉のメーンストリートにある、みすぼらしい建物でした。物置小屋と化していて、紹介してくれた職員の方も、学生たちもさすがにこれは断るだろうと思っていたようですが、僕らは「ぜひともやらせてください」と言って改修に取り組ませていただくことになりました。

そして、1年目の反省を生かして、町の有志からなる空き家利活用推進協議会と月に1回議論

してきました。基本的に学生が学校で考えてきた内容を東伊豆町に持ってきて、地元の方たちともんで、それを町の元大工さんやリタイヤされたお年寄りにも手伝っていただきながら、自分たちの手で、改修プロジェクトを進めていきました。

2016年の3月に改修が完了し、ささやかながらオープニングイベントを開きました。テープカットには協議会の代表、町長、区議会議員なども列席し、これから始まることにわくわくするような写真が撮れました（写真2）。

写真2　ダイロクキッチンオープニングイベント

1年目の空き家改修プロジェクトはほとんど単独で空き家を改修していましたが、2年目になるとある程度町の雰囲気も分かってきて、いろいろな方に空き家の改修に携わっていただくことができたと思います。空き家利活用推進協議会や地元の業者さんにも技術指導をしていただきました。

2年目の改修活動で、1年目と大きく変わった部分は、改修した後、自分たちの手でこの場所を町の方たちから愛される場所にしていきたいという気持ちが芽生えたことでした。この改修した空き家は昔、第六分団の器具置場だったので、そこにキッチンを置き、「ダイロクキッチン」という名前のシェアキッチンをオープンしました。

僕は卒業と同時に東伊豆町の地域おこし協力隊になり、実際にこの町に住みながら、改修した建物の活用を考えていくような仕事をしています。学生団体の方でも、卒業したメンバーを中心に、NPO法人を立ち上げて改修した建物に携わっていこうという話を進めています。

3. 現在の活動

僕が東伊豆町に引っ越してからの活動を紹介します。伊豆はイチゴ農家が多く、イチゴ狩りをされているところが多いのですが、あるイチゴ農家のハウスが病気にかかり、イチゴ狩りができないという話を聞きつけました。それで、そのイチゴを地元の皆さんで採って、ダイロクキッチンに持ってきてジャムを作ろうというツアーを企画しました。これは僕の初めての企画です。

そこに来ていたお客さんの中に、写真部を立ち上げて町の魅力を写真で発信していこうという市民活動をされている方たちがいて、その方たちから、ダイロクキッチンを使って展示がしたいというお話をいただきました。また、町でバンド活動をされているおじさんたちが、その写真展の期間中にライブをしてくれたり、稲取町出身のアマの落語家さんが、地元に娯楽をもっと増やしたいということで、ダイロクキッチンで落語を開いてくれたりしました。

他にも、子どもたちにも使ってもらえる場所になればということで、小学生を招いてカレーパーティを開いてみたり、伊豆から若者が流出するというお話をよく耳にするので、この町に引っ越してきて知り合った同年代の方たちを集めて、小規模ですが、若者の交流会を企画したりしています。改修から1年ぐらいたつと、そのようにして人がどんどん増えていくことが分かってきました。キッチンと言っている割には料理系のコンテンツが少なかったのですが、最近ようやくパン教室や料理教室を開催するようになりました。パン教室の先生は近所の方で、料理教室の先生は、空き家改修を担当してくれていた職員の方が紹介し

写真3　さまざまな形で使われはじめたダイロクキッチン

てくださいました。

もともと僕は空き家の対策で地域おこし協力隊になったのですが、イベントの企画でほとんどの仕事が終わってしまっていて、空き家についても何かやらなければいけないとなったときに、空き家に見識がある、「空き家クラブ伊豆」を主宰されている方をお招きして、空き家についての意見交換会を開きました。伊豆に移住してきたアーティストの方たちを講師としてお招きして、子どもたちを対象に、お年玉袋づくりのワークショップも開催しました。

僕が引っ越してきて9カ月ぐらいになりますが、できるだけ当事者意識を持ってダイロクキッチンに接してくれるような機会をつくっていけば、いろいろな方たちに主体的にこの場所を使ってもらえるのではないかということが少しずつ分かってきました（写真3）。

4. 今後の活動

地域おこし協力隊は、今後、ダイロクキッチンを拠点に、地元の子どもたちと地域の情報誌のようなものを作りたいと思っています。静岡大学の「静岡時代」という雑誌の取り組みをされている学生たちと連携させてもらえたらと考えて話を進めています。

また、町の若者世代のコミュニティを活性化・促進できないかということで、町と連携して、うまく若者交流が促進できるような事業をダイロクキッチンを拠点に進めていこうと考えています。さらに、料理コンテンツを充実させたいので、クッキングスクールもいつかできたらいいと考えています。

僕は、少しずつですが、思うことを実践していくことがとても大事だと思っています。大体失敗してしまうのですが、そこから何かしらの実感を毎回得られていて、改修した建物が少しずついい形に使われはじめているのではないかと思っています。

パネルディスカッション

阿部――まず、報告者の方々から、他の報告についての感想と、ご自身の報告に関する補足がありましたらお願いします。

前島――今日このように一堂に会せることはすごく夢のようで、静岡大学さんに感謝したいと思います。各地域では、地域課題に対する学生への期待、学生にぜひ足を運んでほしいという気持ちが、やはりすごく大きいのだなと感じました。学生たちに、自主的に行ってみたい、足を運んだらまた来たいと思っていただけるような受け入れ体制を地域でつくっていきたいと思いました。

宮城島――発表を聞いていて、学生が地域に関わることが非常に重要だなとあらためて感じました。私どもは古い人間なものですから、「今の若者はうんぬん」とよく地元では言うのですが、僕は、今の若者ほどしっかりした若者もいないと思っています。自分の学生時代はこんなに真面目にやっていなかったと思うので、今の学生さんは本当に立派だなと思います。

三保に学生さんたちが、三保松原地域活性化プランコンテストなどで入ってきているのですが、本当に自主的に来て、地元の人たちをつないでくれているのです。これはわれわれにはできないことです。今日の発表を聞いて、学生が人と人をつなぐことができるというのは、まさしくそのとおりだと思いました。皆さん同じような課題があったと思いますので、これから三保にも訪ねていただければと思います。

宇賀田――荒武君の発表を聞いて、すごく頑張っているなと、うれしくなりました。まだダイロクキッチンに行っていないので、ぜひ行きたいと思います。

三保については、2017年1月11日にフューチャーセンターで一緒にアジェンダをもんでいくので、ご縁が深いと感じています。

私の報告の補足ですが、フューチャーセンターは、2016年9月に、地域志向科目として、実践的な英語力を身に付ける集中講義を実施しました。この英語科目は、フューチャーセンターが2年前に取り上げた幾つかのアジェンダを組み合わせて実現したものです。静岡の観光を考えていた方々と、学生と大学が一体になって、最終的には授業という形で実現することができました。このような成果もあります。

深澤――ここにいる皆さんとは以前から関わりがあり、大変勉強させてもらっています。松崎町としても、いろんな人が来ることによって、いろんな気付きがあったり、普段見えないものが見えたりします。皆さんが関わってくれることによって、宝の掘り起こしや資源磨きのチャンスが訪れると思っています。松崎町は課題豊富な中で、その課題をどう解決するか、本気で考えなければいけません。その先に簡単に答えがあるものではないことは分かっています。多分、ずっとこのままあがき続けながら過ごしていくのではないかとは思いますが、皆さんと一緒に何かできたらいいなと心から思っています。

荒武――本日はとても興味深いお話を聞かせていただけました。僕は学生を受け入れる側というよりは、まだ受け入れられる学生歴の方が長いので、皆さんがそんなに熱意を持って受け入れてくださっているのは、とてもうれしいことだと思いました。少し学生を放り出すようなことをしても面白い、予期せぬ結果が出たりするのではないかとも考えながら聞いていました。

阿部――それでは、コメンテーターである地域創造学環の平岡学環長に、ご報告についてのコメントをいただきたいと思います。

平岡――今日は貴重なお話を本当にありがとうございました。また、テレビ会議を通じて、松崎町の皆さんにも、フィールドワークでやんちゃな学生たちがお世話になっているお礼を申し

上げたいと思います。

さて、静岡大学は2016年10月から地域創造学環の中でフィールドワークを立ち上げたばかりで、今日も学環の学生がかなり受講生として来ています。彼らも本当に初めての経験であり、現地で試行錯誤しながらフィールドワークに取り組んでいると思います。このような取り組みを始めた側として、気付いたことなどについてコメントさせていただければと思います。

それは、フィールドが全然違う、地域が全然違うところからの報告であったと同時に、立場の違う方々の報告であったということです。

最初の三保の報告は、現地の地元の方々のお話でした。どのような問題があるか、行政との間に認識の差があるなど、地元の人たちの目線から見た話をされました。

宇賀田さんは、大学に関わっている立場から、大学人らしく、分析的に問題を提示されました。

深澤さんは、松崎町の行政を担っている方ですから、行政の立場から、どういうことを進めてきたか、どういう課題があるかという話をされました。

それに対して、荒武さんはある意味よそ者です。よそ者として、しかも学生として、地域とどのような関わり方をして、どんなことをつかんできたのかということについて話をしてくださいました。

学生にとって一番近いのは荒武さんの報告で、皆さんがこれから実感していくことに近いのではないかと思いました。荒武さんの報告では、自分たちのやりたいことをやってしまうと、地域に入って見事に失敗するという話が出てきました。それは宇賀田さんの話の中でも出てきました。学生が変にやりたいことをやってしまうのは非常にまずい、まだ当事者になっていない人間が、外側から何かを変に持ち込むのは問題が大きそうだということです。学生というのは、やはり最初はよそ者なのです。それが、荒武さんのようにだんだん当事者になっていく。つまり、外から見ている目線で簡単に物事を考えてはいけないということです。よそから見て気が付くことは大切にはしてほしいのですが、地元の人にとっての当たり前が、よその人にとっては当たり前ではないという新鮮さだけでもいけないところがあります。外からの目線を持ちながらも、地域の人たちとの関わりのようなものをどうつくっていくかがとても重要なことだと思うのです。

荒武さんも失敗をして、2年目からの取り組みでは協議会という場を設けたという話がありましたが、地元の人たちはどう考えているのかを踏まえなければ、使ってもらえないことになります。フューチャーセッションも、地域のことについて地元の人たちはどう考えているのだろう、例えば高校生ならば10年後の松崎のことをどう考えているのだろうということを知ることから始めるしかありません。今、フィールドワークをスタートしたばかりの皆さん方は、まだその知る段階なのです。この段階で何か次にできることなど出てくるわけがありません。むしろ、こんな課題がある、こんな知られていないものがあるといったことを、どれだけ知るかがとても大切なことになってくると思うのです。

フィールドワークを指導する側としても、焦ってはいけない、われわれは時間のかかることをやっているのだ、という意識を持ちながらやっていくことが重要です。三保の取り組みも、本当は文化のことをやりたかったけれど、直近では松葉の問題を解決しなければいけないということで、動き出さざるを得ませんでした。それはやはり、三保の松原を見ていくと、そういうこともやらなければいけないということが見えてくるからです。それと同じように、皆さん方も、じっくり時間をかけて地域にある課題や資源を見つけてほしいと思っています。

そういう意味で、学環のフィールドワークは単発には行いません。3年か4年ぐらいの長い年月をかけて、1カ所の地域で取り組む形のカリキュラムにしています。皆さん方にその中で育っ

ていただきたいのです。その中で荒武さんのように、その地域にほれ込んでしまう人が出てくることもありがたいなと思っています。と同時に、松崎町が人口減で悩んでいるように、そう簡単に移住する人が出てくるわけではありません。前島さんはお住まいは三保ではないのですよね。どちらですか。

前島――静岡市駿河区です。

平岡――なぜ三保に関わるようになったのですか。

前島――三保の友達が、世界文化遺産登録が決まったときに、「大変だ。これからどうなってしまうのだろう」と危機感を抱いたことがきっかけです。

平岡――という話です。だから、町に住んでいなくても、そのようにサポーターとして関わる人たちをどのように集められるかがとても大切だということです。

そして、今の前島さんの話も人のつながりですよね。そのような関係がどうできるか。皆さん方がフィールドに行ったときに、フィールドの人とどういう関係がつくれるかが大切なことだと思うのです。それは地域づくりにおいても大切ですし、皆さん方がさまざまなことをやっていく上でも非常に重要なことになってくると思います。

阿部――フロアの皆さんからもご質問をただければと思います。

質問者（一般1）――静岡大学市民開放授業の受講生です。三保の方にお聞きしたいのですが、道路が渋滞しているという話はよく聞きます。それで、いつか新聞に、海のルート、フェリーを使ったらどうかと載っていたのですが、その話はその後どうなのでしょうか。

宮城島――塚間の渡しといって、昔、清水駅から三保には船で渡っていたのですが、エスパルスドリームフェリーという港内遊覧の会社が、世界遺産になってから、清水駅と三保の間の定期船を通年で出してくれるようになったのです。「ちゃり三保（さんぽ）号」という、清水駅とエスパルスドリームプラザと三保の三点を結ぶ定期航路で、1時間に2本程度出ています。今、非常にたくさんの方がそれで真崎にやってきます。東海大学の水族館のあたりです。

レンタサイクルも静岡市が今進めていて、各旅館や水族館のところにレンタサイクルが置いてあります。その自転車で三保を回遊して帰るという、非常に良い形になっています。2016年12月1日からタンデム自転車という、2人乗りの自転車が、県と市の条例改正で走れるようになりました。2017年1月7日から、三保のハーバルキャンプ場でそのタンデム自転車を無料でお貸しする実験をやることになっています。そのように、今は公共機関を使って来る方が増えてきたので、非常にありがたいと思っています。

質問者（学生1）――荒武さんに質問です。空き家改修プロジェクトの学生団体を立ち上げるに当たって仲間集めをしたと思うのですが、その仲間集めの経緯と大変だったことを教えてください。

荒武――仲間集めについては、まず一人の学生が町からお話をいただきました。その学生はまちづくりを専攻していたのですが、まちづくりの学生だけでは空き家を改修できないので、建築の設計を専攻していた僕に、設計ができる人間を仲間に巻き込もうということで話がきました。修士の1年になって、就活もまだで、これからどうしていこうか悩んでいる時期だったので、僕個人としては良いきっかけ、チャンスになったなと思っています。他の仲間も、大学の授業だけだと物足りなくてくすぶっているような人たちを、その代表になった人が集めてくれました。

学生団体を立ち上げるには10人必要でした。同級生は6人だったので、あとはそれぞれが理解し合っていたり、仲の良い後輩を引っ張ってきて、10人で立ち上げました。後輩は半ば強引に引っ張ってきたところはあるのですが、きっかけはそういうことです。

質問者（学生２）――三保の松原の活動で、関係性づくりの取り組みが幾つか挙げられていました。その取り組みが行われている最中は、共同作業の中で関係性はあると思うのですが、活動外でもその関係性の再構築の成果はあるのですか。

前島――関係性構築はすごく難しいというか、やはり時間がかかることです。私も三保には毎週2回ぐらい、4年ほど通っています。同じように、私は松崎町にも毎月2〜3回、7年ぐらい通っています。菊川市にも毎月3回ぐらい通い、ようやく10カ月です。形になる明確なものとしては、今、松崎町で2年ぐらいまちづくりに参加させてもらっています。三保の松原では、単発のイベント的なものは今まで幾つも出てくるのですが、ルーティーンで日常的に取り組まれるものは、まだなかなか難しいと思っています。

ただ、フューチャーセンターや東海大学など、今までばらばらに活動していた方々が、一緒に足並みをそろえるということがだいぶ見えてきたと思います。地域のつながりは、性急につくるものではなく、さまざまな方々の理解や興味から、だんだん皆さんと三保のつながりが芽生えていくことが大切ではないかと思います。かけるべき時間はかける、結果としてその方が効率的だと思っています。

質問者（学生３）――荒武さんに質問です。1回目の改修プロジェクトで失敗されたという話ですが、その失敗した物件はどうなったのでしょうか。

荒武――改修後、1回も使われることなく静かにたたずんでいる状態です。一応言い訳をさせてもらうと、1年目の改修活動は自分たちでお金を持ってきて、町の空いている建物を実験的にただ改修させてもらったという状態です。まだ改修工事は続いているのですが、後輩たちも、「あそこが活用されていないのは心が痛みます」と話しているので、いつか良い形で活用していきたいと考えています。

質問者（一般２）――菊川市から来た、茶夢来で活動している者です。荒武さんにさらに掘り下げてお聞きしたいのですが、1点目に、1軒目の改修はどのようなコンセプトで行ったのか、また、使われていない理由を教えていただきたいです。

2点目は、ダイロクキッチンについて、キッチンは私たちも改修案などで話は出てくるのですが、衛生管理面で問題点も多くて踏み切れないところがあります。衛生管理面はどのようにされているのか、そこで作ったものを販売しているのかということを伺いたいです。

3点目に、NPO法人としてお仕事をされているという話だったのですが、それだけで食べていけているのでしょうか。自分も生活をしていかなければいけない中で、NPO法人をやっていくということは、学生時代からどのようににつながっていっているのかを教えていただけたらと思います。

荒武――1年目の失敗した物件はかなり山の中にあり、もともとはその地域に住んでいたお年寄りが老人会で使用していた施設だったのです。それがなくなったということは、その人たちが集える場所が一つなくなったということだから、地域の方たちがたまに寄ってお茶でもしていけるようなスペースになるといいというコンセプトでした。たまたま介護バスの発着所が近くにあったので、休憩所として使ってもらえたらと考え進めてきました。「いい形で使ってくださいよ」と丸投げしてしまったのが多分一番良くなくて、結局、現地で使ってくれる人、管理してくれる人がいないというのが、僕らのプロジェクトの壁なのです。

2点目については、2年目の物件は、僕が引っ越して住みながら活用していくということで、ダイロクキッチンの管理は基本的に僕に一任していただいています。ですから、食品衛生の面に関しても、僕が食品衛生責任者の資格を取り、施設も飲食店営業の許可を受けています。僕自身は料理人になるつもりはないので、チャレンジショップとか、まだできてはいませんが、

飲食関係の仕事をしたいという方たちに使っていただけるような場所としては整えてあります。

3点目、NPOだけで食べていけるのかという話については、今NPOは人件費ゼロでやっています。もう一つの肩書きの地域おこし協力隊は3年間、生活の保障を受けながら、自分に与えられた課題を解決する、将来の仕事につなげるという取り組みです。しかし、正直に言うと、将来はかなり不安です。僕らが改修した建物に責任を持ちたいということと、その場所でやっていけば何かがつかめるのではないかという可能性を感じて引っ越してきました。

阿部――フロアからもまだ質問があると思うのですが、ずっとテレビ会議の画面の向こうで松崎町の方が待機されています。深澤さん、どなたか声をかけてみてください。

深澤――では、私が指名しようと思います。齋藤君、そちらで仕切って、感想もしくは聞きたいことをお願いできればと思います。齋藤君は、役場で私と一緒に仕事をしている方です。

齋藤（松崎町職員）――皆さん、何か感想や質問はありますか。

松崎町民――私は、観光というのは「歓光」にしていったらいいと考えています。

深澤――そのとおりだと思います。皆さん、同意されています。せっかく来ていただいているので、町会議員の藤井議員からも一言お願いできればと思います。

藤井（松崎町議会）――松崎町も地域おこし協力隊がいるのですが、方向性がばらばらではないかという感じがちょっとしているのです。先ほどの話では、1年目は失敗していて、その後、地域の仲間を集めていろいろやっていったということでした。地域おこし協力隊は何かテーマを決めるのがよいのではないでしょうか。そして、本来は地域おこし協力隊にこの町に居ついてもらいたいのですが、なかなか居ついてもらうことはできないと思います。地域おこし協力隊の方々が町民に方向性を示して、このようにやっていけば成功するのではないかということをやっていかなければいけないと思います。日本全国そうでしょうが、やはり根本的には人口減少の問題があると思うので、その地域で暮らしてもらう、人口を増やしてもらうというような宣伝になってもらいたいと考えています。

深澤――協力隊は松崎町にもいます。荒武君とも実はつないであって、伊豆おこし協力隊というグループを立ち上げるまでになっています。協力隊は協力隊でそれぞればらばらの活躍はしているのですが、ネットワークが構築されているので、今後、松崎町もいろいろアピールしていきたいとは思っています。

齋藤君、こうやって静岡大学の皆さんのおかげで、松崎町とつながる機会ができたことについて、一言。

齋藤（松崎町職員）――この施設もテレビ会議が入ってネット環境が構築され、活用をいかにしていくかを考えています。今回こうやってつないでいただいて、松崎町の人たちに、大学ではこんなことをやっているのだと知らせてもらうことができたらいいと考えています。今後もよろしくお願いします。

深澤――そちらの画面に映っているのは登壇者だけでしょうけれど、本当は会場にたくさんの人がいます。この緊張感を分けてやりたいぐらいです。どうもありがとうございました。

阿部――では、続けていきましょう。ご質問はありますか。

質問者（学生４）――こんなことを言うと生意気かと思われるかもしれませんが、正直な感想を言わせてもらいます。

私は地域創造学環に入って、最初は「地域、地域うるさいな」と思っていました。6月ぐらいに「プレゼンテーション入門」の授業があり、その中で「COC」という言葉を聞いて、「なんだ、結局は文科省の事業か、その言いなりになって動いているだけか」と思っていたのです。9月からフィールドワークが始まりましたが、結構大変で、「学生の柔軟な発想を利用して」と言われ

ても、学生は知識がないので、言い方は悪いのかもしれないですが、要はやりたい放題なのではないか、本当に地域課題を解決したいのならば、大学の教授などに依頼すればいいのではないかとずっと思っていました。

しかし、今日の荒武さんの話を聞いて、具体性が見えたと言いますか、学生でもできることがあると知り、少し心の励みになったと感じています。申し訳ありません。ありがとうございました。

質問者（学生５）――松崎町のことについての質問です。「なまこ壁保存に向けて」のスライドで、なまこ壁建造物の再利用として、「新たな形態（店舗・ギャラリーなど）での利活用」と記載してあったのですが、今実際に何か新しい形での利用はできていたりするのでしょうか。また、利用できていたら、その例などをぜひ教えていただきたいと思います。

深澤――松崎町のなまこ壁の利活用ですが、無料休憩所として活用している建物があり、地域の方に開け閉めや掃除、季節ごとの飾りつけなどもしていただいています。その近くに足湯もあって、その足湯の清掃も地域の方にやっていただいています。いわゆるPPP（Public-Private Partnership）という形態の管理方法になっていると思っています。

利活用していかなければならない理由の一つに、建物の保存があります。各地域でも古い建物がどんどん取り壊されている現状があります。静岡県内でも、川根だったか、古い建物が取り壊されると伺っています。松崎町の近くだと、下田市に、南豆製氷所という、昔の伊豆石を使った、電気がなかった当時の冷凍庫代わりの建物があって、保存活動が盛んだったのですが、結局取り壊されました。建築の荒武君が横にいるのであまり言いたくないのですが、建築物は壊れる運命にあるので、そういったものを宝や資源として残していくにはコストが掛かります。それをどう捻出していくかを考えなければいけません。美術館や博物館にしてしまえばそれはそれでいいのでしょうけれど、そこも結局お金が掛かるので、国の指定文化財になったとしてもなかなか保存が立ち行かないのです。

松崎町の場合、なまこ壁の建造物はきちんとした根拠のある文化財までにはなっていないのですが、町並みの景観の中の一つの要素として考えたら、失ってはいけないものと考えています。今、まったく新しい活用方法を模索していて、一つの方法ではなく、コラボレーションしながら保存活用していけるトップランナーになるべく、さまざまなことを考えて頑張っています。

形態としては、なまこ壁の蔵をゲストハウスにして使うことなどを考えています。壁が厚いので、静かな中で泊まることによってリフレッシュしたり、クリエーティブな発想を生み出したりすることをやっている地域もあるので、日本に限らず全世界、そのような古い建物を残している事例の中から、松崎に合うものを取り込んで活性化ができればと思っています。それには、たくさんの人たちの知恵をお借りしたいと考えています。試行錯誤中です。

皆田（教員）――地域創造学環のフィールドワークを担当している皆田です。主な役割はフィールドの新設に関することや各フィールドと学生の受け入れに伴う連絡調整です。細かい作業で言えば行程やスケジュールの作成、現地までの交通手段の確保などを担い、フィールドワークの中身の部分はそれぞれの担当の先生にお任せして、私は確実に活動が行われるよう、段取りを行う役割というと分かりやすいかもしれません。本日報告された松崎町の深澤さんにもフィールドワークの学生を受け入れてもらっていて、松崎町の住民さんと大学との間に立ってもらっています。

今日の報告の中で感じたことは、行政職員の深澤さん、地域おこし協力隊の荒武さん、それぞれ住民さんととても近い位置で接している立場にあると思いますが、住民さんにも役割、担当を決めるといいかなと感想を持ちました。住民さんの動きが見えるともっと、地域に一体感

が生まれて、躍動感が出るのではないでしょうか。

荒武さんは学生時代の東伊豆町での活動がきっかけで、移住されていまは住民さんとのネットワークづくりに苦労されているとお話しがありました。役割分担どころではないかもしれませんが、まずは自分の存在や役割を住民さんに知ってもらうと、興味を持って歩み寄ってくる人がきっと出てきます。そうすると、活動の幅が広がっていくと思います。将来の活動を期待しています。

質問者（学生６）――せっかく松崎の皆さんとつないでもらっているので、松崎の皆さんに質問します。先ほど地域づくりの成功という言葉がありましたが、松崎の皆さんは、まちづくり、地域づくりの成功は具体的にどういうものをお考えでしょうか。

齋藤（松崎町職員）――成功はなかなか形で表せないものだと思いますが、目指しているのは、今松崎町に住んでいる人が幸せに暮らすことだけだと思っています。

松崎町民――自分たちの町は自分たちで守り、発展させるという意気込みでやっていけばいいのではないかと思います。

藤井（松崎町議会）――私の公約もそうですが、自分たちの町は自ら守り発展させるということです。よそから手伝ってくれる人をあてにしては、なかなか町は発展していかないと思うのです。私たちがやることを、周りの人たちが見ている。そうすると、県や市も一生懸命やっている町を応援してくれる。補助金と言うとおかしいですが、一生懸命やっている人たちにはこういうところからお金が入ってくるのです。ふるさと納税なども今から頑張っていかなければならないと思うのですが、頑張っている町はそれなりに後からいろんなことが付いてきます。だから、今いる私たちが一生懸命頑張らなければいけないのです。なまこ壁などもそうですが、次の世代に残していきたいということで、皆さん、頑張っていると思います。

深澤――補足しましょう。これで成功だというところが見つけにくいので、あがき続けるという話ではないですが、その瞬間瞬間で考えるのですが、例えば、なまこ壁の建物は何代も続いているし、100年前の方に桜の木を植えてもらっているおかげで花見ができます。だから、今、現在、僕たちはこの流れの中で何をすべきか、どの立ち位置で考えるかということだけなのです。いつ何をもって成功したと判断するか、ある程度自分たちの中で基準を持っておかなければいけないという思いはあります。人に「いい町だね」と言われたらプチ成功かなと思うし、「来てよかった」「住んでよかった」「ここで生きていて、暮らせてよかった」という言葉を生きている間に何回言われるか、多ければ、いつも成功しているかなという感じにはなるのではないかと思っています。

阿部――今回、地域課題解決支援プロジェクト絡みのシンポジウムを開かせていただいて、当初の大学の取り組みを地域の方に紹介する段階から、さまざまな進捗が出てきました。と同時に、さまざまなところとつながっていくことも含めて、とてもうれしく思っています。確かにどれが成功、どうなると成功ではないというのは非常に難しいと思うのですが、それぞれ今日ご報告いただいた方に、本当に感謝したいと思います。

三保の松原の取り組みの報告を最初にいただきましたが、またとない地域資源だと思ったものが、実は課題に変わってしまうという現場についてお話しいただいたようにも思います。屋久島や熊野古道でもそういうことが起こっていると聞きましたが、あるのに人が学べないのはもったいないと思います。逆に、深澤さんからは、「うちには豊富に課題があるから来い」というような話もあって、課題と資源の関係は難しいと受け取りました。

宇賀田先生にはインターンシップ、フィールドワーク、フューチャーセンターと、学生が成長する方法をとても真剣に考えていただいていて、こういう方がいらっしゃるのは大学にとっ

て誇りだと思います。私がどんどん丸投げをして非常に迷惑を掛けているので、申し訳ありません。最近、表情で嫌がっているなというのは分かるので、気を付けるようにしたいと思います。

深澤さんからは松崎町についてお話をいただきましたが、松崎町には、受け入れ続けていただいて、本当にありがたいです。私は、深澤さんや齋藤さんやまちづくりの関係者の方々など、松崎町に住んでいる方々に、健康で長生きしていただくことだけが望みです。結構ハードな生活をしているので、健康に気を付けてください。

荒武さんには、今回提案者にもなっていただき、単独で来ていただきました。これで救われたかもしれない学生が1名いますし、非常にありがたかったです。また、荒武さんの、古民家を再生しても活用していないことを失敗と言える感性がすごいと思いました。私がもしやっていたとしたら、「きれいに出来上がった、成功だ」と言って、その後活用しないのは町の責任だと思うと思います。荒武さんの、失敗だと言ってその後また考えるところを、私たちは学ばなければいけないと思います。

本当にさまざまな事例を、しかも地域課題解決支援プロジェクト絡みでお話をいただいてありがたかったです。

宇賀田先生の地力のお話もありましたが、地域の良さは、もともと地域が持っている力なのです。われわれはちょっとした異物であって、何か刺激を与えたりすることはできるかもしれませんが、その取り組みにより、良さが他の人にも見えるようになったとしたら、それはもともと地元が持っていた力なのだと思います。きれいな真珠の色は、真珠の形になっているからみんなありがたがっているけれど、もともと貝殻の内側の色であるという話を聞いたことがあります。われわれは、地域とそういった形で関わらなければいけないのではないかという気がします。異物が入るのは、いくら松崎町でも負担は負担なので、ありがたい機会だと思って利用させていただけたらと思います。

平岡先生から最後におまとめいただいて終わりにしたいと思います。

平岡――フロアの方々、学環の学生、人文の学生も含めて、率直な質問や意見が出てきて、このシンポジウムは学生たちにとってそれなりに意味のあるものになってくれたのではないかと思います。

学生の感想に、地域の課題解決は教師がすればいいということがありましたが、学環は、地域の課題を解決してくれる人間を育てることが目的なのです。だからみんなにそういう現場に出ていってもらいたいという思いがあります。確かにうっとうしい部分、しんどい部分などがありますが、皆さん方はどこに行っても必ず地域の住民になるのです。地域の住民として関わることのできる人になってほしいという思いを強くしています。ですから、皆さん方に少しでもそういう力を身に付けられる経験を持って社会に出てもらいたい、そのために、こういうカリキュラムを作って、松崎町も含めていろいろな場を提供していただき、皆さん方を育ててもらっているのです。

今回、地域の受け入れ側の思い、やっていること、実際に地域で育ててもらった方の話も聞かせてもらい、本当にいい経験ではなかったかと思います。このシンポジウムを皆さん方のこれから学びの中で生かしていただければと思っています。

東伊豆町におけるプロジェクト進捗状況

平成25年に始まった第1期プロジェクトから地域課題の応募があった東伊豆町であるが、第2期でも追加の課題提案があり、継続的に取り組みが進んでいる。

平成28年12月に開催された公開シンポジウム「地域課題から地域創造へ～域学連携による学びの環づくりのために～」でも、東伊豆町地域おこし協力隊・荒武優希さんによる報告「東伊豆町における学生参加のまちづくり～学生リノベーション事例「ダイロクキッチン」～」があり、学生・教職員への情報提供がなされた（本報告書掲載）。

○東伊豆ガイドツアーの開催

上記の公開シンポジウムに参加し、地域課題解決支援プロジェクトならびに東伊豆町での空き家再生プロジェクトに興味関心を示した人文社会科学部・地域創造学環の学生9名が教員とともに平成29年2月27日、東伊豆町を訪問した。

課題提案者でもある地域おこし協力隊の荒武さん、芝浦工大生の関根さんをガイドに、空き家再生プロジェクトの成果として種々の事業を展開しているダイロクキッチン、現在改修が進められている東海汽船事務所跡「岬の館」等を案内いただき、東伊豆町の魅力や可能性についてうかがった。

早速、東伊豆町をプライベートで再訪する者、細野高原すすき祭やキンメマラソン等のイベントのボランティアの希望者が出て、その後の活動につながった。

写真　東伊豆ガイドツアーの様子（左：ガイドによる説明、右：集合写真）

○東伊豆町での勉強会と「第２回キンメマラソン」ボランティア参加

平成29年6月10、11日の2日間にわたって、地域創造学環の学生3名と教員1名が南伊豆町周辺および東伊豆町を訪問した。地域おこし協力隊・荒武さんのコーディネートにより、ダイロクキッチンにて勉強会が行われた。「稲取の歴史について」（東伊豆町の神主・稲岡さん）、「東伊豆町の観光について」（東伊豆町観光商工課課長・森田さん）の講演があり、終了後には講師およびNPO法人ローカルデザインネットワーク、空き家改修プロジェクトのメンバー、町内出身大学生と交流する懇親会があった。

翌11日は、東伊豆町のイベント・第2回キンメマラソンのボランティア・スタッフとして活動した。

写真　勉強会の様子

写真　「第2回キンメマラソン」でのボランティアの様子

○東伊豆町での地域創造学環フィールドワーク

上記の取り組みを経て、東伊豆町でのフィールドワーク受け入れの実施の可能性を探るため、地域おこし協力隊・荒武さんが副理事長をつとめるNPO法人ローカルデザインネットワークとの打合せを重ね、平成29年度後期から地域創造学環フィールドワークが開始された。

現在は、地域創造学環1年生4名が参加し、教員2名が引率をする体制でフィールドワークが展開中である。

写真　フィールドワークの様子（左：ダイロクキッチンでのディスカッション、右：街歩き）

静岡市生涯学習センターにおける課題解決支援

概要

静岡市生涯学習センターと静岡大学における地域連携・生涯学習担当部門（生涯学習教育研究センター等）とは、以前から継続的な協力関係にあった。その中で、静岡市葵生涯学習センターおよび北部生涯学習センター美和分館から、地域住民の意識調査や大学生によるセンター事業への参画等の協力依頼があり、地域課題解決支援プロジェクトへの応募につながった（第1号・第2号成果報告書を参照）。

平成28年度に葵生涯学習センターをはじめとした4センターが各々の担当エリアの住民・学生向けに実施した意識調査の分析結果は、調査報告として掲載した。

また、葵生涯学習センターからは「大学生等の若年層の認知を高める手法を開発、事業実施をする」という課題も提案されており、事業企画に関する学生ボランティア、インターンシップ制度（実習生制度）が28年度から本格的に実施された。平成29年度、静岡大学ではこれを「地域づくりフィールドワーク実習生」として位置づけ、「地域づくり副専攻」の学生が葵生涯学習センターの支援のもと、事業「地元の伝統　駿河漆工芸品に親しもう！！」の企画・運営に携わらせていただいた。こうした連携事業については、今後も継続予定である。

写真　12月17日に実施された事業の様子

静岡大学地域づくりフィールドワーク実習生×静岡市葵生涯学習センター

キニナル スキニナル プロジェクト
静岡市文化振興財団

地元の伝統
駿河漆工芸品に親しもう!!

2017年
12/17(日)

講座の前半で駿河の漆工芸についての理解を深めます。
そして後半では箸と箸置きづくりにチャレンジします！

時　間：１３時～１６時

対　象：小学校４年生以上　１５名

参加料：ひとり 2,000 円

申込み：電話申し込み（先着順）
11 月 17 日(金) 13 時～ 受付開始
※TEL：054-246-6191

場　所：アイセル 21
４階 第45 集会室

※体験では職人さんがあらかじめ本漆を使って塗ったものを研いで仕上げる過程を行います。こちらで用意したゴム手袋を着用して作業をしますが、肌の弱い方はかぶれにご注意ください。

当日の予定

13:00～　担当者・講師挨拶
13:05～　工芸品の魅力について
13:30～　作品の製作
16:00～　解散

※進行上、時間が前後する場合があります。

今日の工芸品というものは「ものすごく高価で普段の生活からは程遠い」というイメージを抱いていませんか？しかし、それらは古い時代に生活雑貨として日常的に使われていたものなのです。

現在は量販店が数多く進出し、古いものは捨てられ、次から次へと新しいものが使われる、まさに大量生産・大量消費の時代になりました。そのような現代社会の中で、名工たちが生き残りをかけて、従来の生活雑貨に高付加価値を追求して魅力を高めたのが工芸品なのです。ゆえに、生活雑貨とは違う、特別なものという感覚が私たちのなかにあるかも知れません。

講座では、工芸品についての理解を深め、漆器の箸と箸置きを仕上げます。特に「マイ箸」は職場や学校など、活躍の場は幅広いはずです。これを機会に、工芸品を生活雑貨として毎日当たり前のように使う文化を再び広めて行きましょう!!

講師紹介

安藤　嘉津夫

静岡漆器工業協同組合理事長
静岡市伝統工芸技術秀士

静岡市駒形生まれの 78 歳で、昭和 21 年に田町に移り住みました。昭和 32 年、父の漆職人業を受け継いだ代替わりの際に安藤漆公房を開業し、約 60 年間この仕事を続けています。時代の流れとともに生活様式が変化して行く中、工芸品の魅力を広めるため、県や市のイベントに積極的に参加したり、同業者と一緒に地元の浜松や東京などの大きな消費地に出掛けてＰＲする活動を行っています。またデザイナーと協力し、従来の赤や黒にとらわれない、カラフルで斬新な商品を生み出す努力もしています。最近は、イベント出展のためのお椀作りに特に力を入れています。

交 通 案 内

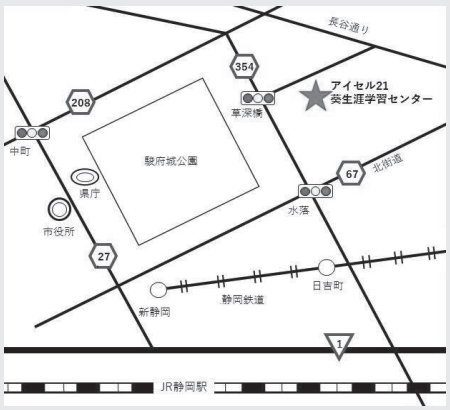
静岡市葵生涯学習センター（アイセル 21）
指定管理者　静岡市文化振興財団共同事業体

TEL：054-246-6191
静岡市葵区東草深町 3-18

≪バス≫ＪＲ静岡駅北口 10 番線のりば
県立病院高松線「アイセル 21」
駿府浪漫バス「アイセル 21」

≪徒歩≫ＪＲ静岡駅北口より約 30 分
静鉄新静岡駅より約 20 分
静鉄日吉町駅より約 15 分

※駐車スペースに限りがあります、
公共交通機関等でのご来館にご協力お願いします。



調査報告

静岡市生涯学習センター４館エリアにおける地域住民の意識調査報告
～西部、北部、藁科、駿河の４生涯学習センターの生涯学習意識調査から～

はじめに

本報告は、静岡市生涯学習センターによって実施され、静岡大学・地域連携生涯学習部門が企画・分析に協力した「平成28年度 生涯学習に関する意識調査」において収集されたデータをもとに、大学生を含む地域住民の生涯学習センターに関する利用実態・要望等をまとめたものである[(1)]。

地域課題解決支援プロジェクトでは、これまで葵生涯学習センターおよび北部生涯学習センター美和分館における住民向け意識調査の支援を行ってきたが、その調査内容は別々で調査票も異なっていた。

今回は上記2館による調査結果を手がかりに、西部、北部、藁科、駿河の4生涯学習センターがそれぞれの担当地域の住民を対象として同じ調査票による調査を行い、比較・分析を試みた。

Ⅰ　調査の概要

本調査の概要は以下の通りである。

１．調査の目的

生涯学習センターの利用の有無を問わず広く市民にアンケートを実施することで、生涯学習に対する意識の実態を調査し、今後の事業計画に活用する。

２．調査実施施設

以下の４施設が調査を実施した。

西部生涯学習センター、北部生涯学習センター、藁科生涯学習センター、駿河生涯学習センター

３．調査実施期間

配布期間：平成28年6月～8月

回収期間：平成28年6月～9月

４．調査対象

静岡市葵区の生涯学習センター近隣の自治会町内会に属する組長とその家族、及び駿河区の大学に通う学生を対象とした。

表1　調査対象と回収数

西部	田町学区（467）、三番町学区（422）
北部	井宮北学区（534）、賤機南学区（646）、賤機中学区（70）、賤機北学区（48）
藁科	服織学区（982）、南藁科学区（160）
駿河	県立短大（330）、県立大学（160）、静岡大学（335）、東海短大（130）、競輪場（20）、白寿荘（20）、芹美（20）

５．調査方法

各地区の連合自治会長を通じて各自治会長へ、各組長へのアンケートの配布及び回収を依頼した。大学へは学生課及び大学教授へ依頼し、アンケートの配付及び回収を依頼した。

６．回収状況

アンケート回収数は3,249件、平均で74.8％の回収率であった。

表2　配布枚数と回収数

	配布枚数	回収枚数	回収率
西　部	889	648	72.9％
北　部	1,298	978	75.3％
藁　科	1,142	984	86.1％
駿　河	1,015	639	62.9％
合　計	4,344	3,249	74.8％

※回収割合は、図4のとおり

Ⅱ　調査結果

今回のアンケート調査は、同一の調査内容を静岡市生涯学習センター4館で実施した（調査票および結果概要は章末に添付）。前半では全体の傾向を取り上げ、後半では4館の比較を中心に、クロス集計結果を報告する。

１．回答者の属性

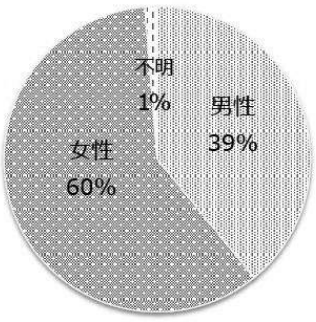


図1　回答者の性別

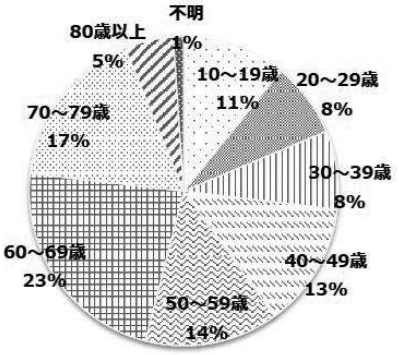


図2　回答者の年代

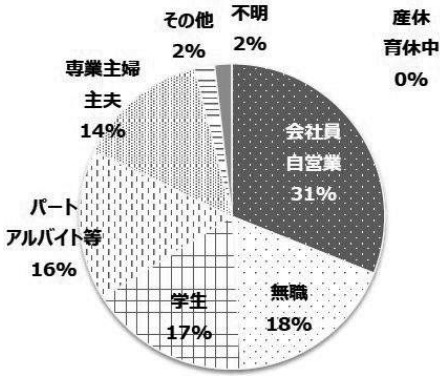


図3　回答者の職業

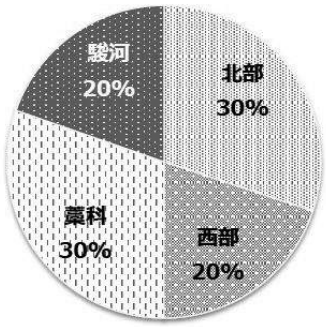


図4　アンケートの回収エリア

2. 一日の中で自由になる時間帯

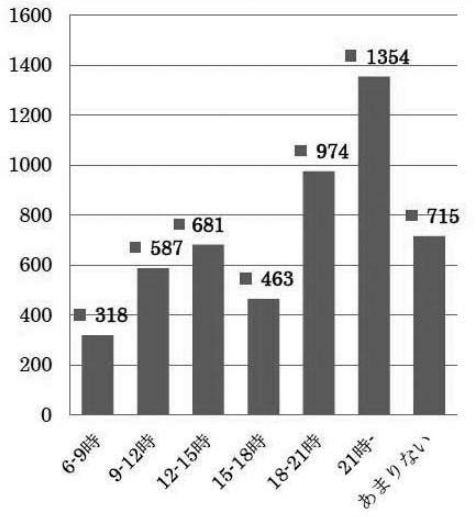


図5.　自由になる時間帯（平日）

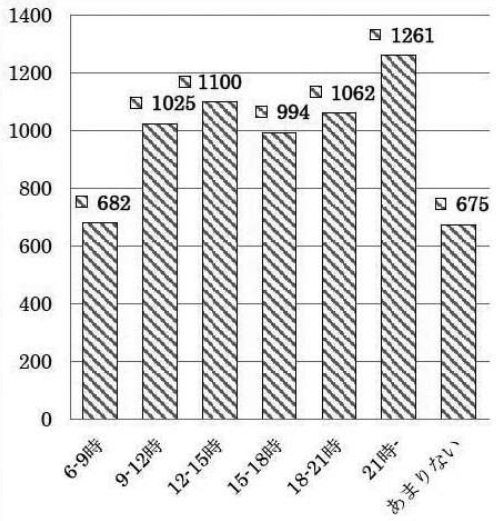


図6.　自由になる時間帯（土日）

平日に自由になる時間帯についてアンケート調査を行ったところ、図5のとおり21時以降が多かった。また、18時以降も多いが、これは図3のとおり、学生、会社員、アルバイトの比率が半数を超えているためと考えられる。10代～50代も図2のとおり半数を超えており、就労層が参加できる時間帯に事業を行うことで、参加者も見込めるのではないか。

土日の自由になる時間帯については、図6のとおりになった。平日と同様、21時以降が多いが、どの時間帯であっても自由になると回答している人が多く、こちらは、どの時間帯に事業を展開しても受講が見込める。

10代から30代の新たな世代獲得のため、Ⅲで分析を行う。世代を区切った分析から、より詳細な受講可能な時間や内容について考察していく。

3. 静岡市生涯学習センターの認知度

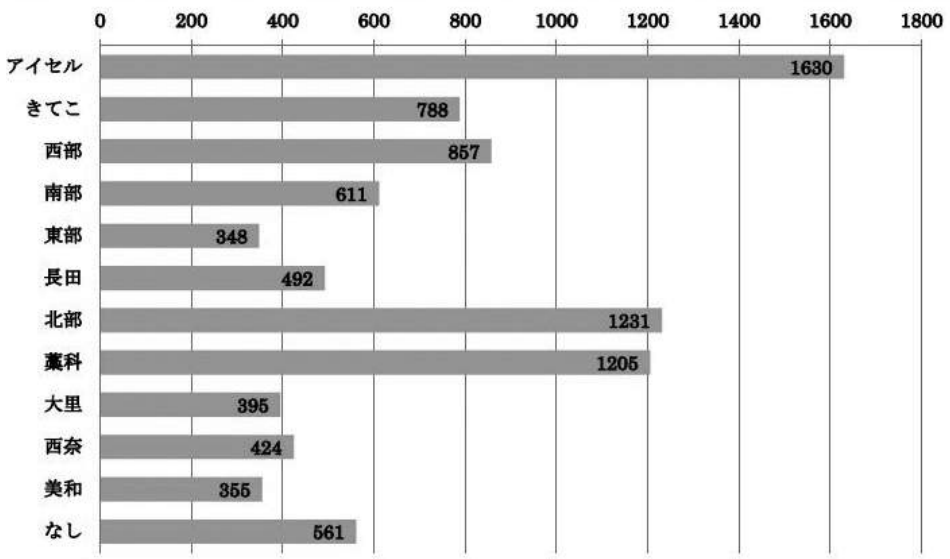


図7　静岡市の生涯学習センターの認知度

4. 静岡市生涯学習センターの利用内容の認知度

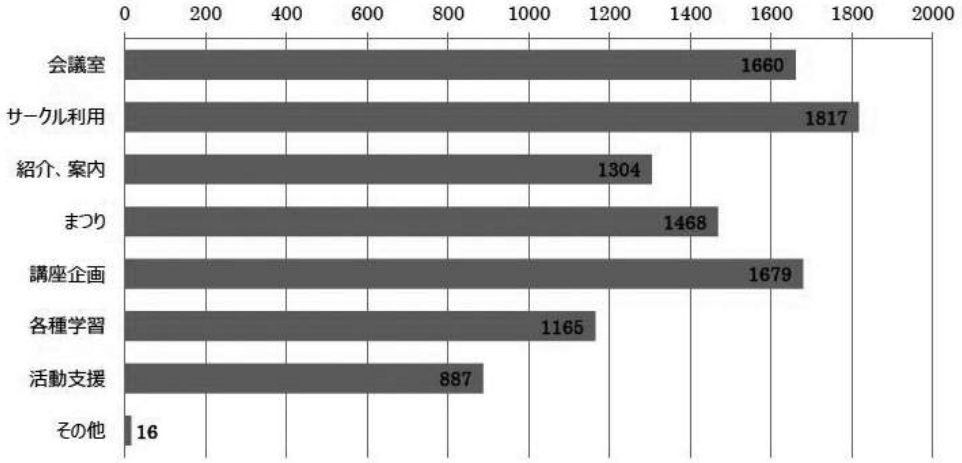


図8. 静岡市の生涯学習センターの利用内容の認知度

5. 静岡市生涯学習センターの利用経験

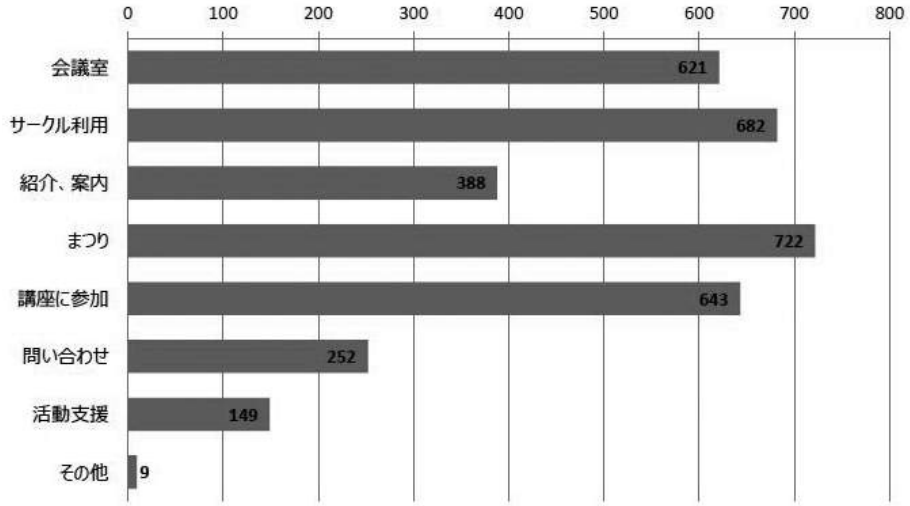


図9. 静岡市生涯学習センター利用の項目別利用頻度

6. 静岡市生涯学習センターを知らない（利用しない）理由

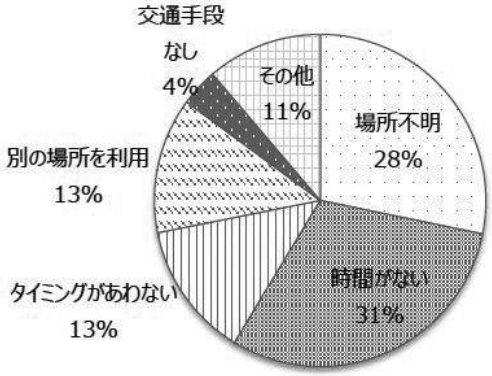


図10 静岡市の生涯学習センターを知らない（利用しない）理由

静岡市生涯学習センターの認知度について調べたところ、図7のとおりとなった。アンケートを配布した施設の認知度は高いが、その施設から離れた東部、長田、大里、西奈、美和は、低い結果となった。その反面、葵（アイセル）は、他の施設に比べて認知度が高いことが分かる。図10のとおり、場所を知らないことも、利用されない理由の1つであると考えられる。

7. 興味のある学習分野

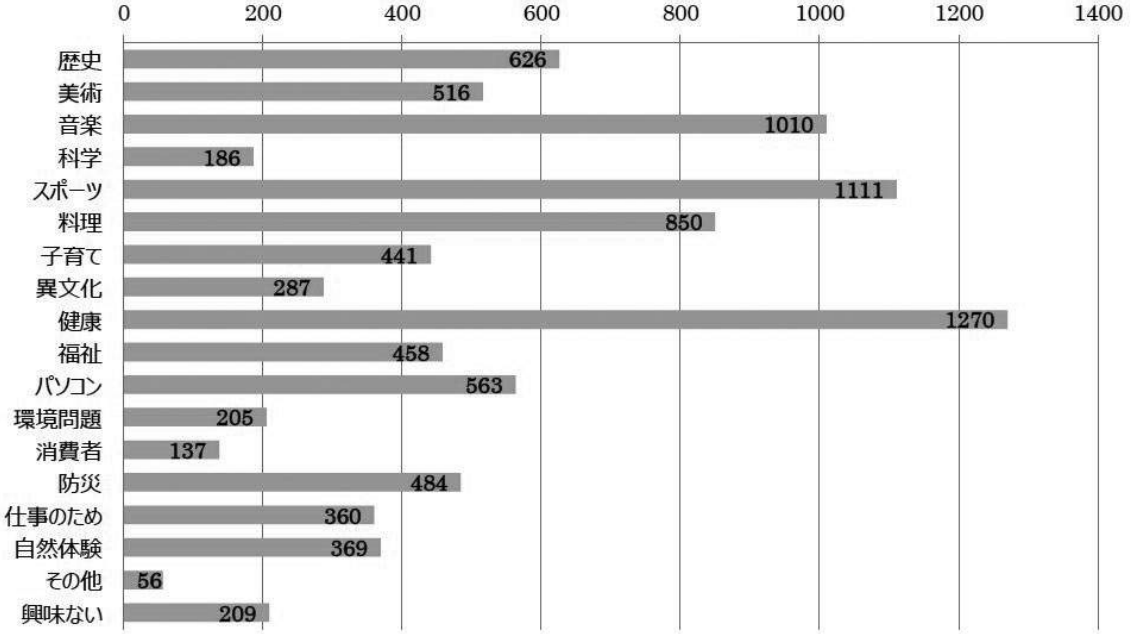


図11　興味のある学習分野

8. 1年以内に参加・学習した分野

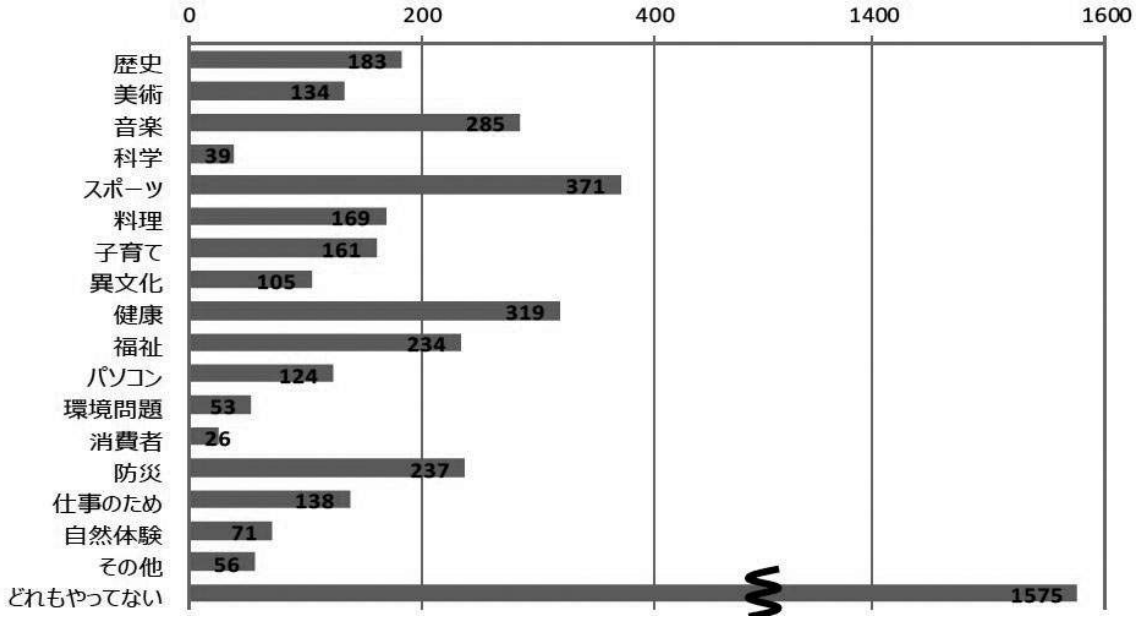


図12　1年以内に参加・学習した分野

９．どんな施設・形態で学んだか

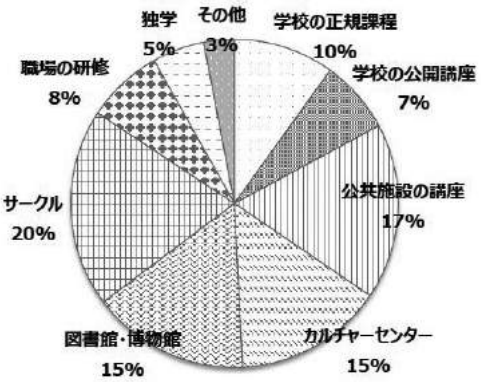


図13　どんな施設･形態で学んだか

10．情報を得る手段

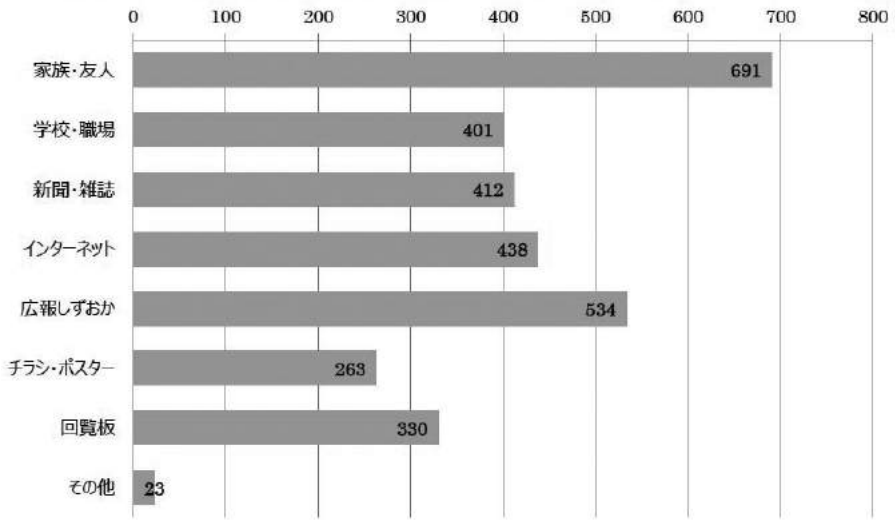


図14　情報を得る手段

Ⅲ 分析

全体の20％を占める回収率だった駿河生涯学習センターは、主に大学生を対象にアンケートを配布した。その結果、10代から30代の回答者は、25％を超えた。現在、各生涯学習センターでは、高齢者の利用が多く、学生、就労層の利用は少ない傾向にある。そのため、どのようにしたら生涯学習センターを利用してもらえるか、以下の内容について分析を行った。

1．生涯学習センターの利用の有無

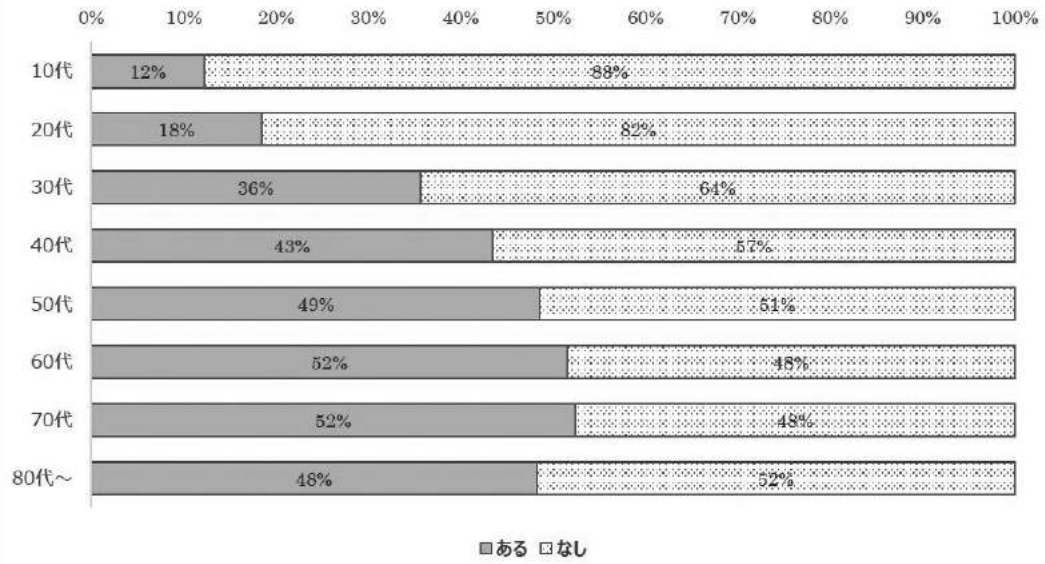


図15　年齢別利用の有無

《特徴・分析》

利用の有無を世代別に集計したところ、図15のとおりとなり、10代から30代は利用有が40％に至らなかった。他世代と比べ利用が少ないこの世代の利用を増やすことが、生涯学習センターの利用率増加に繋がると考えられるため、利用していない主な理由について検討する。

2．10代から30代が利用していない理由

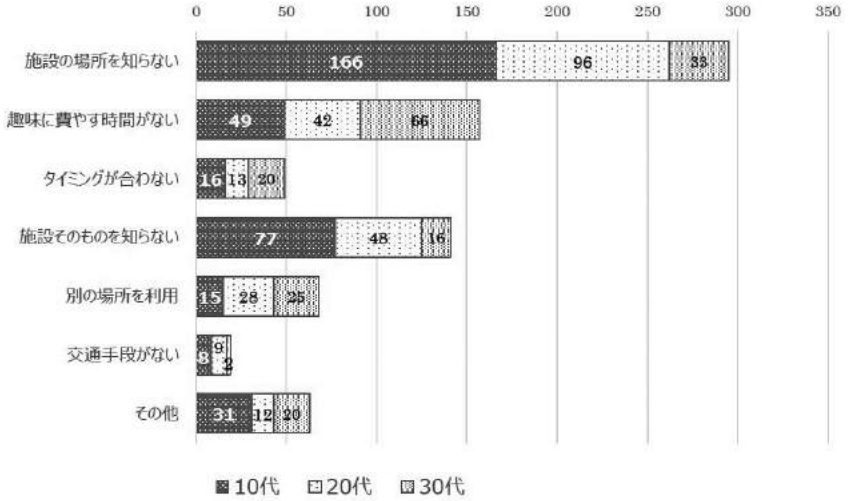


図16　10代から30代が利用していない主な理由

《特徴・分析》

10代から30代の利用していない人の主な理由については、施設そのものや場所を知らないという回答が多い。特に10代、20代に多く、その世代を対象とした講座を計画するときには、施設の場所の地図や案内を掲載することも必要になる。また、趣味に費やす時間がないとの回答も多く、時間にゆとりがないということも分かる。興味ある分野や関心が高い内容を取り上げ、講座情報をどこから得ているかの情報源を調査することで、若い世代獲得が見込まれる。

３．参加意欲があるが参加できなかった人の興味のある分野・参加できる時間帯

図17　「参加意欲があるが、タイミングが合わなかった」人の興味分野

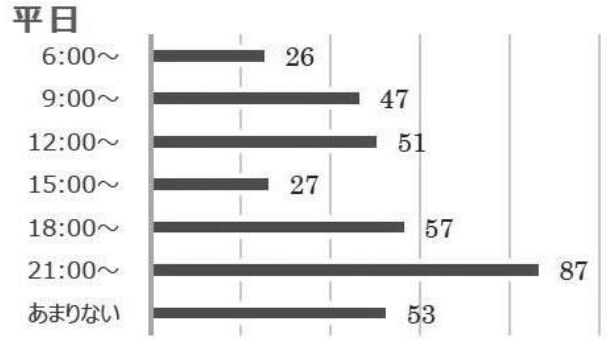


図18　「参加意欲があるが、タイミングが合わなかった」人の自由になる時間帯（平日）

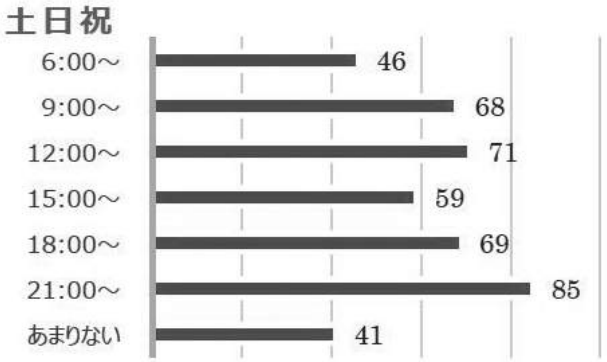


図19　「参加意欲があるが、タイミングが合わなかった」人の自由になる時間帯（土日祝）

《特徴・分析》

センター活動に参加しようとしたが、タイミングの合わなかった人の興味ある分野は、図17のとおり「健康」「食育」「スポーツ」と身体に関係するものが上位を占め、健康への関心が高いことが分かる。また、「音楽」、「パソコン」と続き、趣味や仕事等で使用するものへの関心が

高い。

参加しようと思ったがタイミングが合わなかった人の自由になる時間帯について調べたところ、図18のとおり21時以降が平日、土日共に多い。生涯学習センターでの21時以降での講座実施は条例で開館時間が定められているため困難であるが、次いで多い18時以降に健康や趣味に関する講座を実施することで、新たな受講者獲得に繋がる可能性がある。

以上のことから、興味ある分野と参加できる時間帯を考慮して講座を実施することが必要である。

４．世代別利用者の情報源

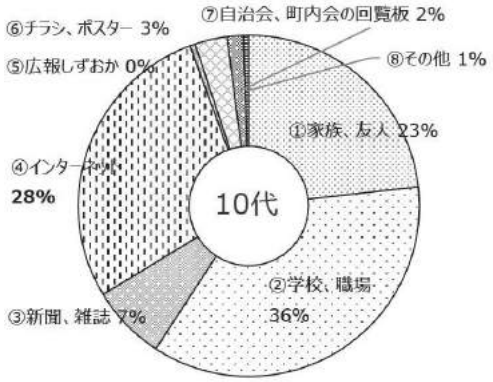


図20　10代の情報源

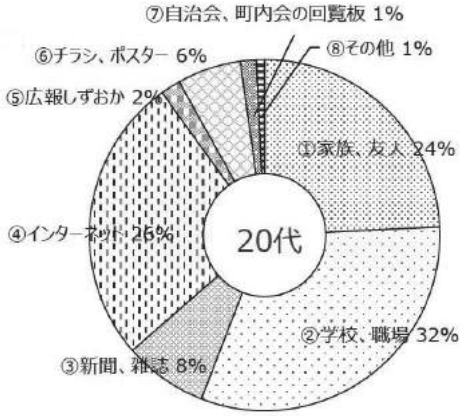


図21　20代の情報源

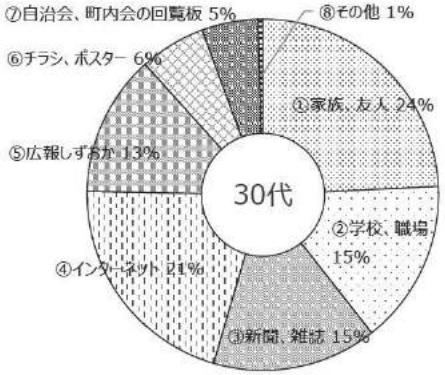


図22　30代の情報源

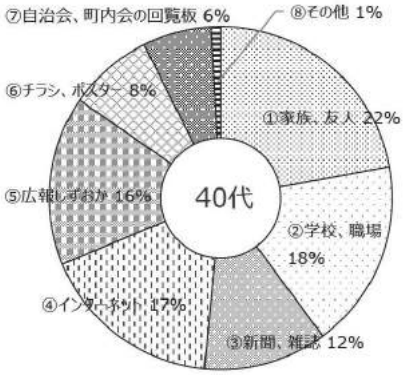


図23　40代の情報源

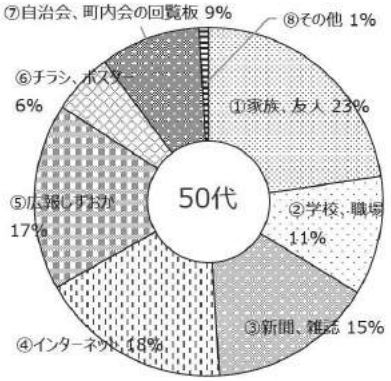


図24　50代の情報源

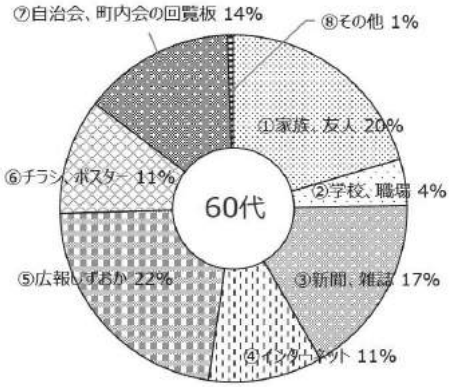


図25　60代の情報源

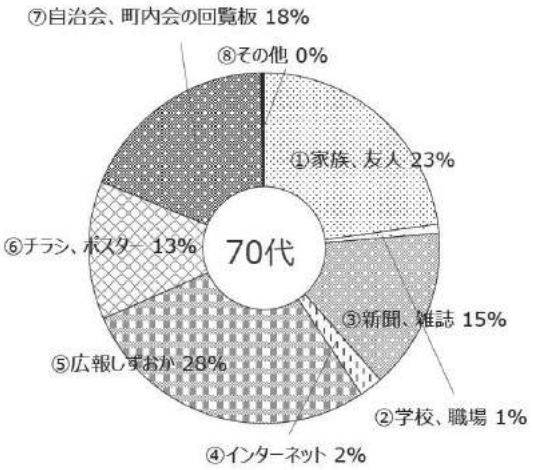


図26　70代の情報源

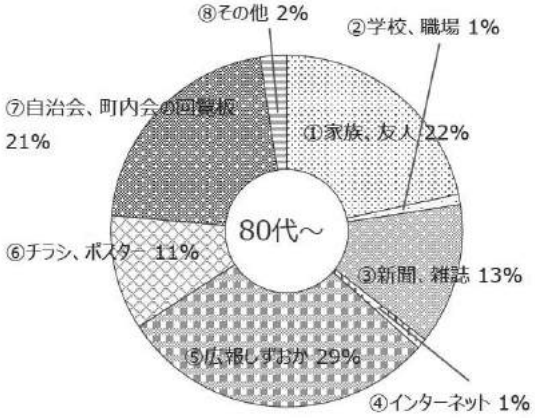


図27　80代の情報源

《特徴・分析》

10代、20代の講座情報源は、「家族、友人」「学校、職場」「インターネット」からが多い。この世代を獲得するには、口コミやインターネット等の有効活用を考える必要がある。一方、70代以上では約30％が、「広報しずおか」から得ていることが分かる。講座で受講者にアンケートを取ると下記のとおり半数以上が広報しずおかから情報を得ていると回答しており、生涯学習センターの利用者層は高齢者が多い理由がそこにあると考えられる。

また60代以上では、「自治会、町内会の回覧板」の割合も高い。この世代の獲得を目指す場合、有効な講座情報提供手段になると考えられる。世代ごとにあった情報提供をすることで、その対象となる受講者の獲得が見込まれる。

参考

表3. 受講者の講座情報源（平成27年度393講座で取った受講者アンケートより）

広報	ポスター チラシ	新聞	テレビ ラジオ	WEB メルマガ	イベント ニュース	その他	無回答	合計
4,043	1,685	67	4	717	154	1,455	139	8,264

5．年代別の興味のある分野について

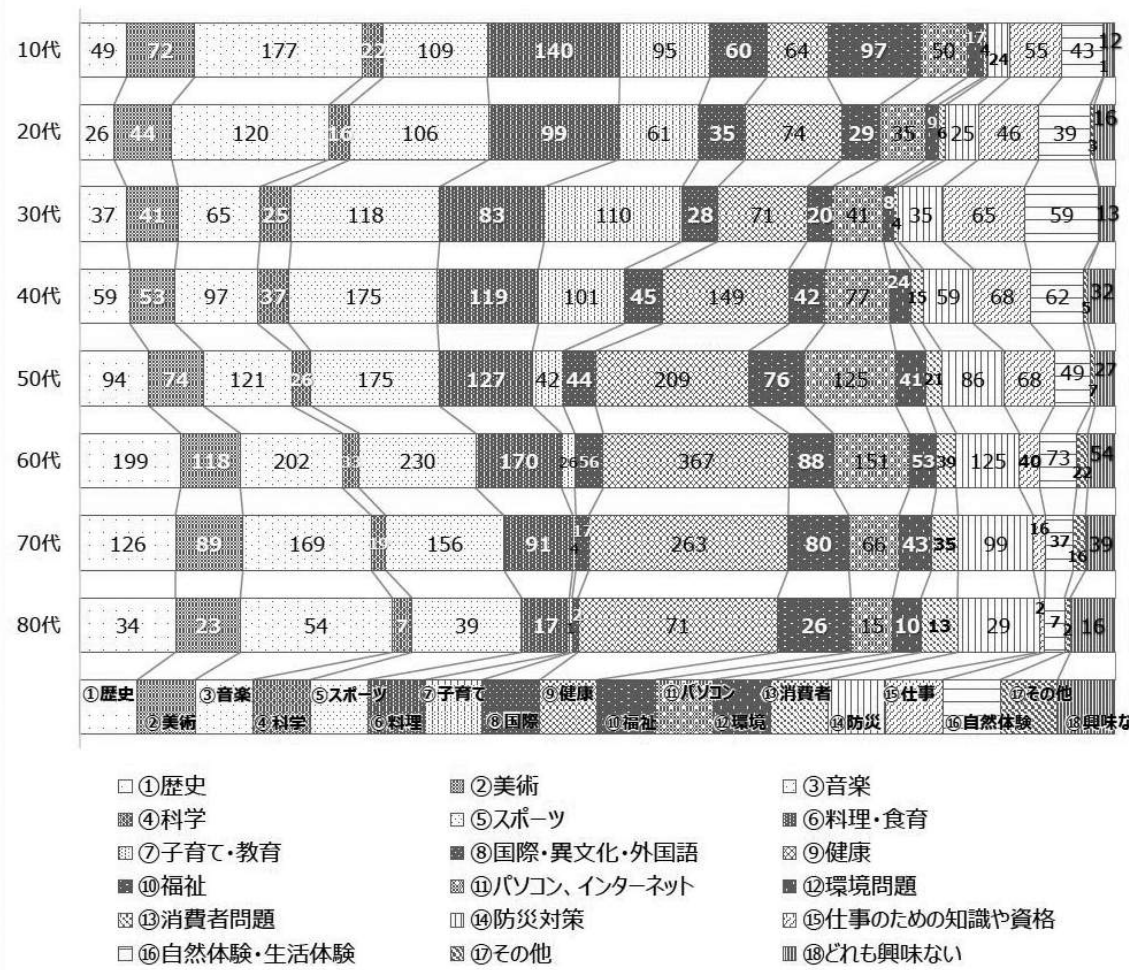


図28　興味のある分野（年代別）

《特徴・分析》

10代、20代は音楽、スポーツ、料理が全体の3割を占めるが、50代以上になると健康についての興味が高いことが読み取れる。また、少数ではあるが、仕事に関することについて、10代から50代までは興味をもっていることが分かる。スキルアップに繋がる講座を企画することが、就労層の獲得に繋がると考えられる。

音楽、スポーツ、健康がどの年代でも上位を占めており、生涯学習センターの利用の有無に関わらず、関心が高いことが分かる。これらの講座を開催することで、幅広い世代の参加が見込まれる。施設の条件にあったアプローチの方法を考えていく必要がある。

生涯学習センターを利用したことがあるのは、30代以下が少ないということが分かった。30代までの利用を増やすことが、生涯学習センター利用者増加の鍵である。彼らの利用を増やすためには、情報源として学校、職場、家族、友達から得られていることがアンケート結果より分かるので、今後、対象となる世代へどのように情報を伝えていくかの戦略が課題である。

幅広い情報提供と、関心の高い事業を実施することで、新たな利用者獲得につなげていきたい。

Ⅳ　センター別のクロス分析

冒頭でふれたように、今回の調査では、西部・北部・藁科・駿河の4生涯学習センターが、それぞれの担当地域の住民を対象として、同一の調査票による調査を行った。ここからは、センター別のクロス集計の結果を確認し、分析を試みる。

1．回答者の属性（センター別）

前節で確認したように駿河生涯学習センターは、他の3センターとは異なり、調査票を主に大学生に配布した。ここではまず、実際の回答者層をセンター別に確認しておこう。

(1) 性別

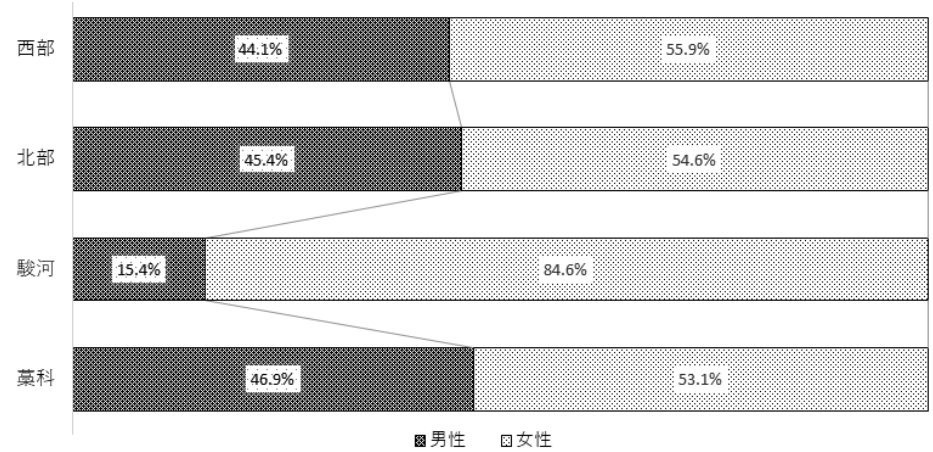


図29　回答者の性別（センター別）

(2) 年代

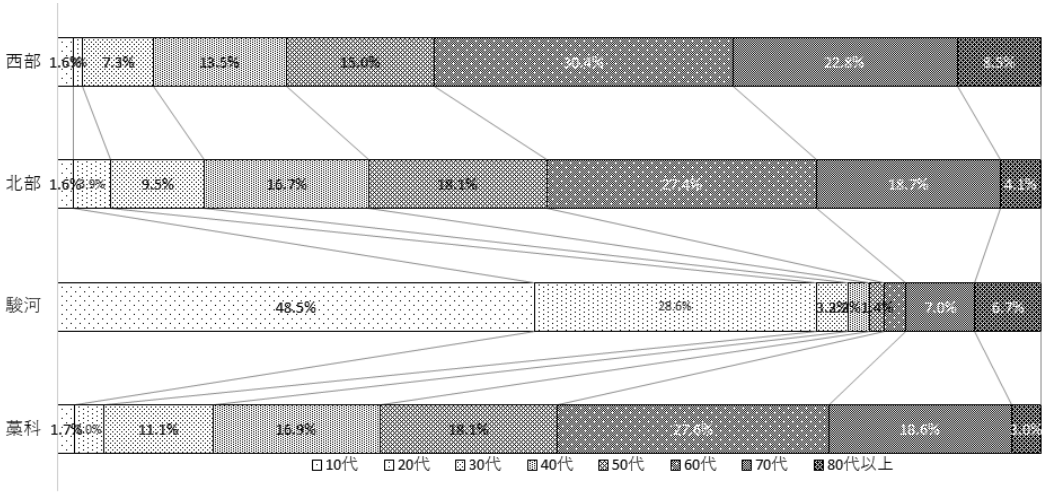


図30　回答者の年代（センター別）

(3) 職業

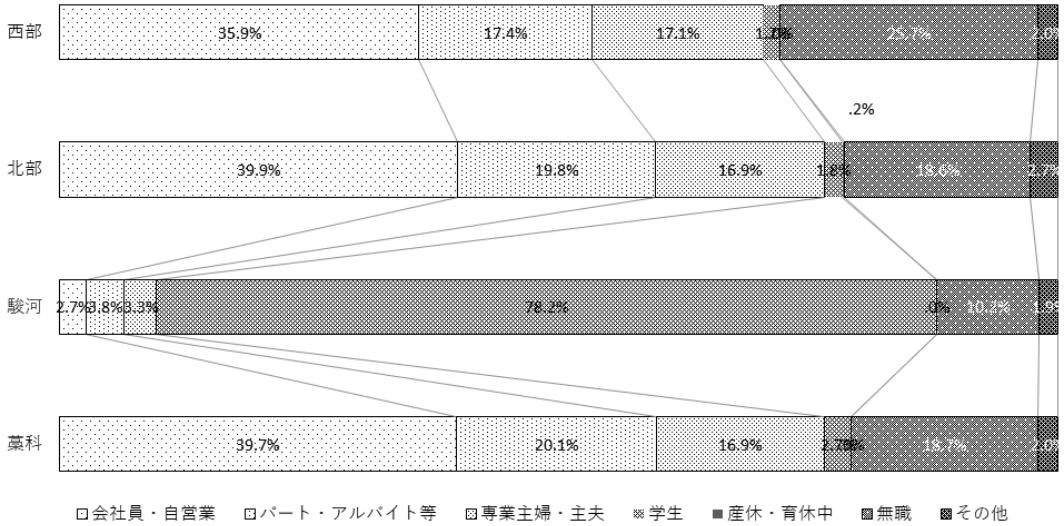


図31　回答者の職業（センター別）

図29〜図31に見るように、駿河生涯学習センターは、性別・年代・職業とも他の3センターと回答者層が異なっていることが確認できる。西部・北部・藁科の各センターとも、①女性がやや多く、②60代以上が過半数を占め、③会社員・自営業・パート等が約6割を占めているのに対し、駿河の場合は、①女性が85％で、②10代〜20代で全体のほぼ8割を占め、③学生が8割弱と高率となっている（性別・年代・職業とも0.1%水準で有意）。

この回答者層の違いが、生涯学習センターに関する意識調査の結果とどう関係するか確認していく。

2. 生涯学習センターの認知度（センター別）

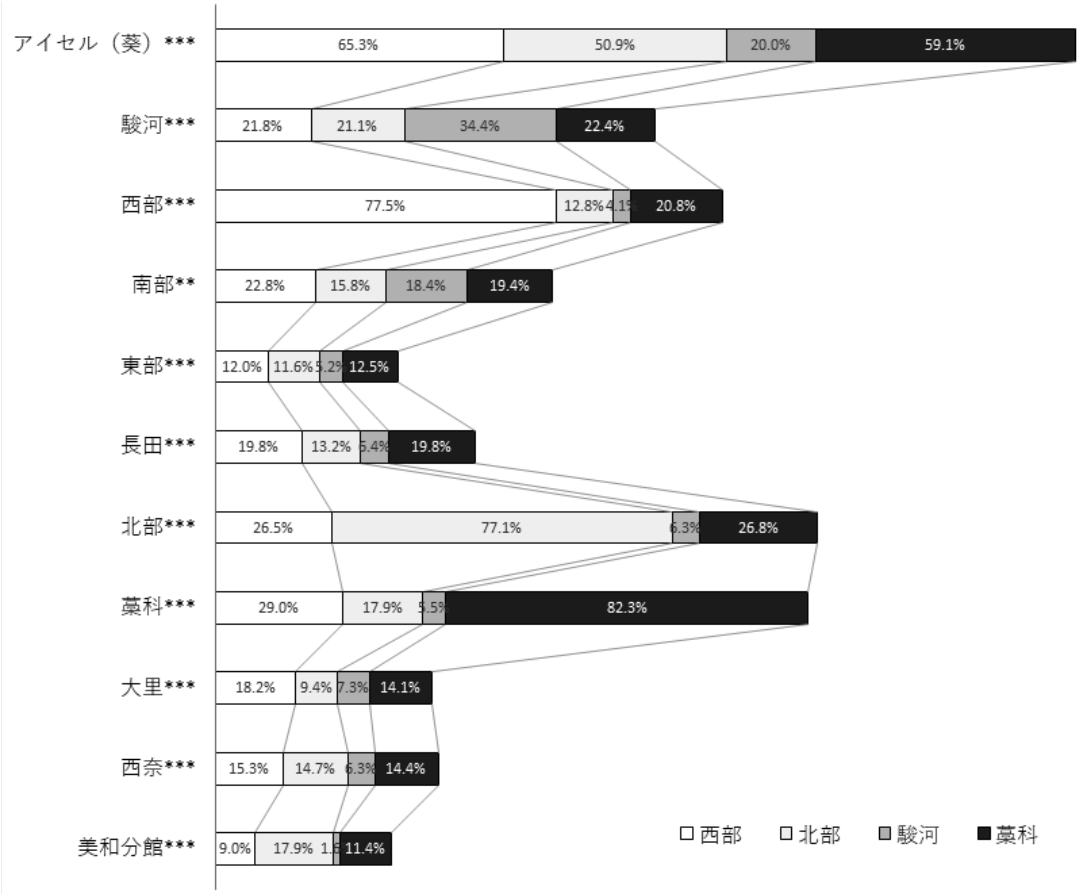


図32　各生涯学習センターの認知度（センター別）
***0.1%水準、**1%水準、*5%水準で有意差あり（以下同様）

Ⅱの調査結果にみるように、アイセル（葵生涯学習センター）の認知度は全体的に高い。西部・北部・藁科の各センターの認知度は、やはり各センターの担当地域で圧倒的に高くなっている。それに対し、駿河の場合は、やや担当地域で高いものの、大きな差ではない。このように4センターによる各センターの認知度には違いがある。

3. 生涯学習センターを利用しない理由（センター別）

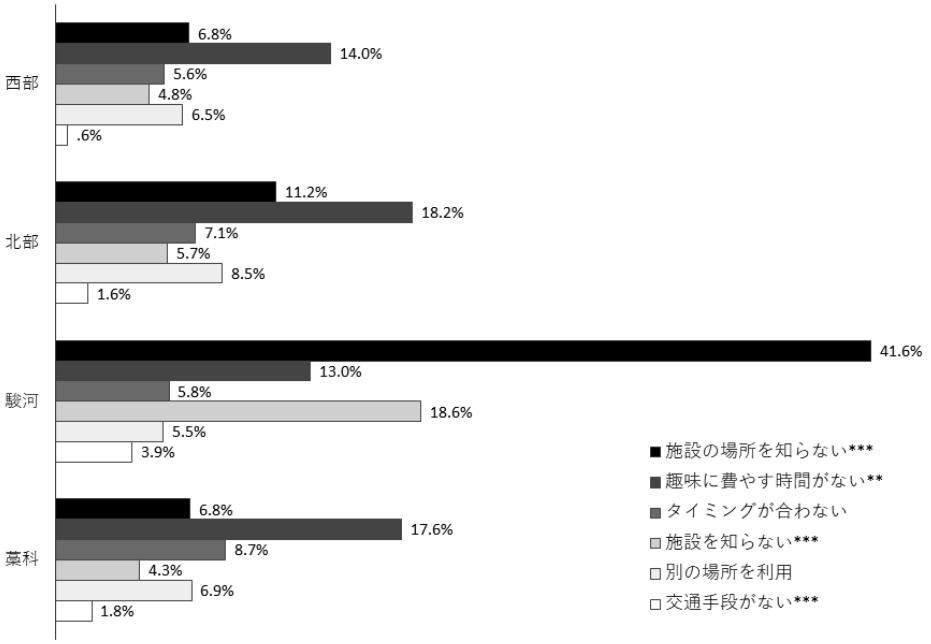


図33　センターを利用しない理由（センター別）

センターの認知度の問題は、「利用しない理由」のグラフを見るとより明確に確認することができる。西部・北部・藁科の3センターの場合、利用しない最も大きな理由は「趣味に費やす時間がない」だが（14～18％）、駿河の場合は「施設の場所を知らない」が41.6％と圧倒的に多く、またそもそも「施設を知らない」（18.6％）という回答も少なくない。

20代までの若年層は、図書館以外の社会教育・生涯学習施設を利用することが少ないと指摘されるが、とりわけ大学生の場合、通学のため生まれ育った場所ではないところに居住することが多く、施設の場所あるいは存在自体を知らないというケースが多いことが推測される。

大学生が参加できる講座やイベントを企画するだけでなく、葵生涯学習センターが取り組んでいる大学生向けの「実習生制度」のように、講座や事業の企画・運営に若者自身が参画できるような仕組みをつくることが課題となってくる。

４．興味のある分野

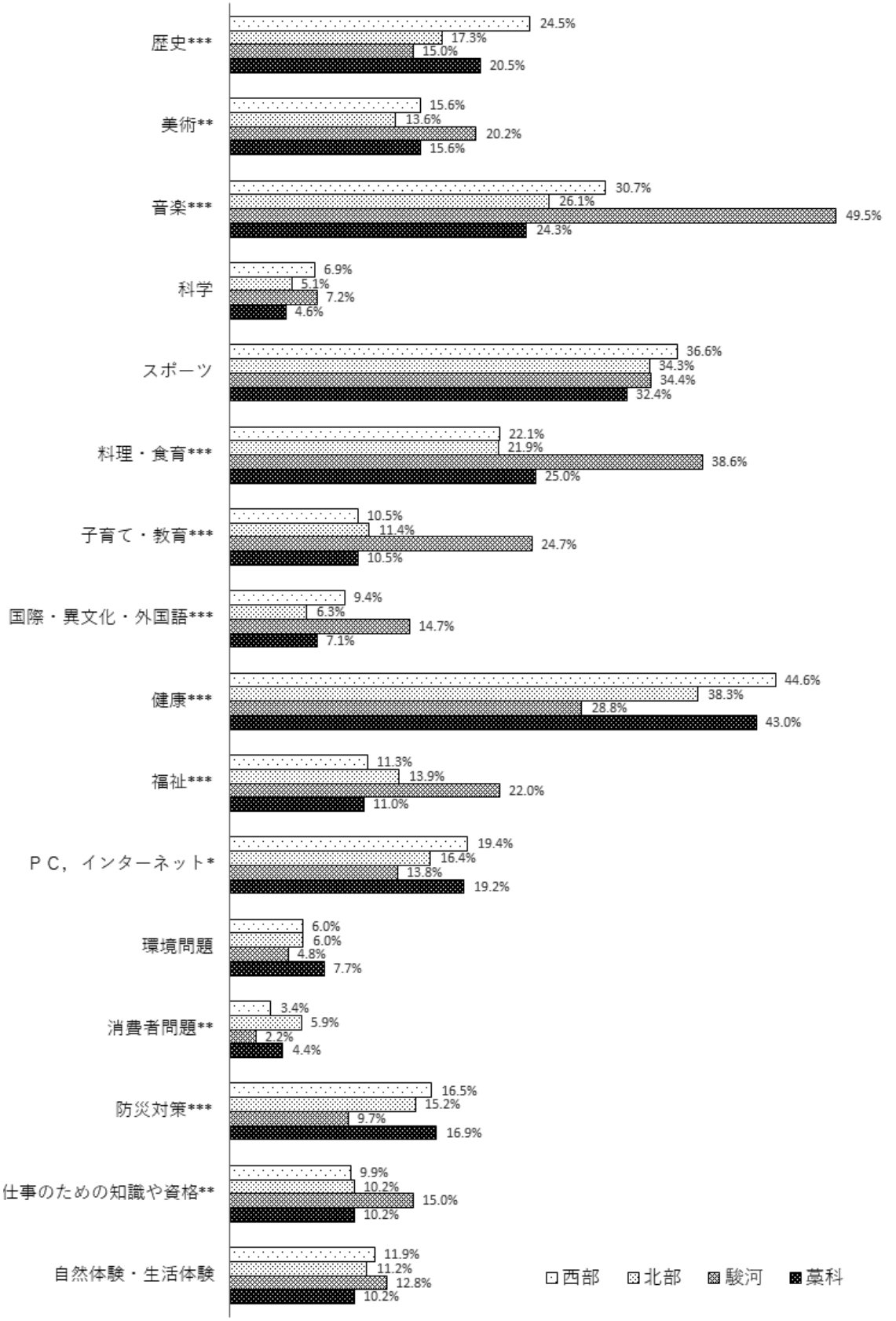


図34　興味のある分野（センター別）

図34は、興味のある分野についてセンター別にクロス集計を取ったものである。大学生が主な回答者となっている駿河は、興味のある分野においても他の3センターと異なる傾向を示している。

西部・北部・藁科の各センターでは最も興味がある「健康」に対し、駿河ではそれほど興味を示さない。一方、「音楽」には大いに興味を示し、他の3センターの倍近い高率となっている。また駿河においては、「料理・食育」、「子育て・教育」、「国際・異文化・外国語」、「福祉」あるいは「仕事のための知識や資格」といった分野に対する興味が、有意に高い[(2)]。

調査で得られたこうした情報を、大学生および若い世代の参加を促す企画や取り組みに生かしたい。

5. どんな施設・形態で学んだか（センター別）

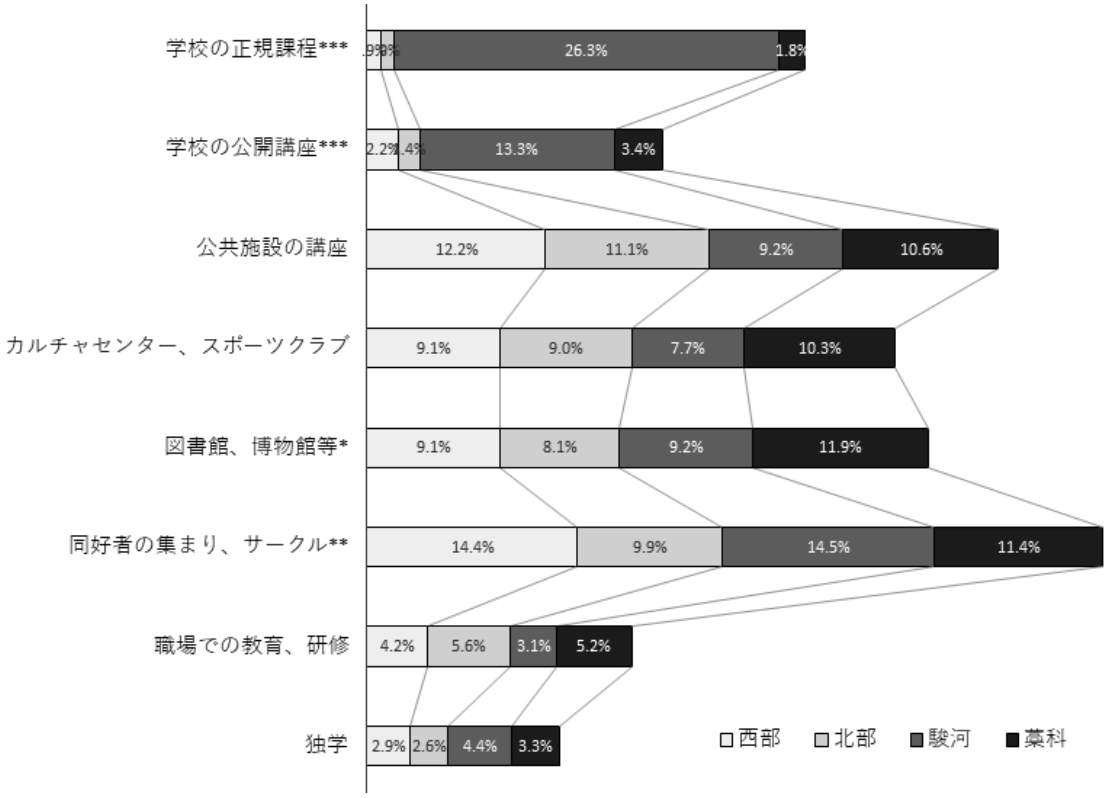


図35　どんな施設･形態で学んだか（センター別）

「どんな施設・形態で学んだか」についても、駿河センターは他の3センターと異なる傾向を示している。

「学校の正規課程」、「学校の公開講座」、「同好者の集まり、サークル」が他の3センターに比べて有意に高く、生涯学習センターに大学生を引き込むためには、大学との連携事業や相互的な広報協力といった手立てを考えたい。

６．情報を得る手段（センター別）

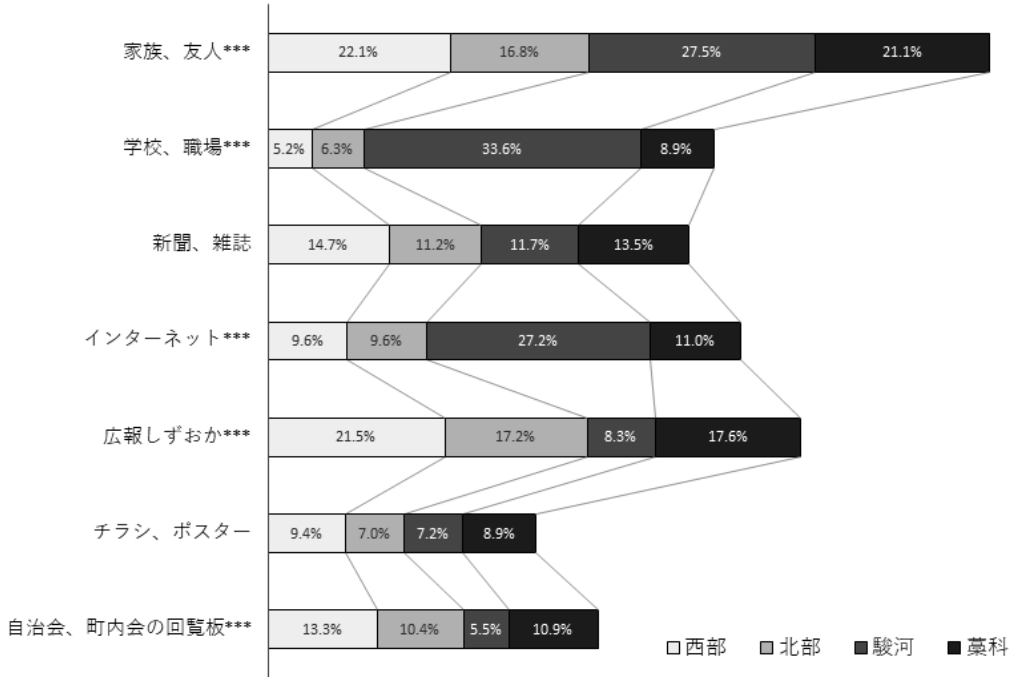


図36　情報を得る手段（センター別）

学習情報を得る手段についても、駿河センターは他の3センターと異なる傾向を示していることが確認できる。

「家族・友人」、「学校、職場」、「インターネット」といった項目では、駿河センターが他の3センターに比べて高率であるが、「広報しずおか」、「自治会、町内会の回覧板」においては、他の3センターに比べて広報媒体として弱くなっている。

「広報しずおか」は静岡市民にとって重要な情報媒体であるが、大学生・若者世代にとっては「学校」「友人」を除けば、「インターネット」が最も大きい学習情報の媒体となっている。紙面による広報だけでなく、インターネットでの広報展開が必要だと考えられる。

Ⅴ　今後の課題

Ⅲでの分析で、生涯学習センターを利用したことがあるのは、30代以下が少ないということが分かった。前節での分析では、10代〜20代の傾向を検討するために、大学生が主な配布先となった駿河生涯学習センターと西部・北部・藁科の各生涯学習センターの結果とを比較・分析することによって、若年層の利用を増やす手がかりを検討してきた。

とはいえ、クロス分析はセンター別だけで、性別・年代別・職業別等、様々な指標で行うことが必要である。また、今回調査を行った4センターだけでなく、地域ごとに特徴のある他の生涯学習センターにおいても調査を進めることが重要である。平成29年度では、新たに4生涯学習センターで調査を実施している。平成28年度のデータと照らし合わせながら、静岡市の生涯学習センターの運営方法を検討していきたい。

注

(1) 本報告のもとになった調査は、榛葉有希子（北部生涯学習センター美和分館）、加藤理（藁科生涯学習センター）を中心に、「配付･回収」を、仙石倫子（北部生涯学習センター）、白鳥美咲（駿河生涯学習センター）、小林実穂（西部生涯学習センター）、山尾博子（西部生涯学習センター）、増田景（藁科生涯学習センター）、杉井円（北部生涯学習センター）が担当、「調査・分析」を宮下路子（大里生涯学習センター）、杉山嘉奈子（東部生涯学習センター）、

岸端徹（駿河生涯学習センター）が担当した。

(2) このことに関しては、大学生が属する学部や専攻（例えば、教育・福祉系が多かった等）が影響した可能性がある。

平成 28 年度
生涯学習に関する意識調査

【調査用紙】

静岡市生涯学習センターでは、市民の皆様により良い生涯学習環境を提供するため、皆様の生涯学習に関する現状やご意見を広くお聞きするアンケートを実施しております。

つきましては、ご多忙の折大変恐縮ですが、本調査の主旨をご理解の上、アンケート調査にご協力くださいますようお願い申し上げます。

なお、この調査で得られた情報は、今後の施設・事業運営の資料として活用させていただく以外の目的で使用することはございません。無記名のアンケートとなっておりますので、皆様の率直なお考えをお聞かせいただければと存じます。

静　岡　市　生　涯　学　習　セ　ン　タ　ー

このアンケートは全部で 13 問あります。該当する項目に○をつけてください。

N=3249（回収率 74.8%　以下単位は%）

質問 1　あなたの性別を教えてください。

① 男性 39.6 ② 女性 60.4

質問 2　あなたの年齢を教えてください。

① 10～19 歳 11.0 ② 20～29 歳 7.9 ③ 30～39 歳 8.3 ④ 40～49 歳 13.3

⑤ 50～59 歳 14.2 ⑥ 60～69 歳 23.1 ⑦ 70～79 歳 17.2 ⑧ 80 歳以上 5.2

質問 3　あなたのお仕事について教えてください。（一つだけ）

① 会社員・自営業 31.6 ② パート・アルバイト等 16.2 ③ 専業主婦・主夫 39.6

④ 学生 17.3 ⑤ 産休・育休中 0.1 ⑥ 無職 18.4 ⑦ その他（　　）
2.2

質問 4　一日の中で自由になる時間帯はいつですか。（いくつでも）

【平日】

①	6：00～9：00	9.8
②	9：00～12：00	18.1
③	12：00～15：00	21.0
④	15：00～18：00	14.3
⑤	18：00～21：00	30.0
⑥	21：00～	41.7
⑦	あまりない	22.0

【土日祝】

①	6：00～9：00	21.0
②	9：00～12：00	31.5
③	12：00～15：00	33.9
④	15：00～18：00	30.6
⑤	18：00～21：00	32.7
⑥	21：00～	38.8
⑦	あまりない	20.8

質問 5　以下の静岡市の施設で、知っているものを教えてください。

① 葵生涯学習センター（アイセル２１）50.2 ② 健康文化交流館 来･て･こ 24.3 ③ 西部生涯学習センター26.4

④ 南部生涯学習センター 18.8 ⑤ 東部生涯学習センター 10.7 ⑥ 長田生涯学習センター 15.1

⑦ 北部生涯学習センター 37.9 ⑧ 藁科生涯学習センター 37.1 ⑨ 大里生涯学習センター 12.1

⑩ 西奈生涯学習センター（リンク西奈）13.8 ⑪ 北部生涯学習センター美和分館（アカデ美和）10.9

⑫ 知っているところは無い 17.3 ⇒ ⑫へ◯を付けた方は質問 8 へお進みください

1

質問 6　質問 5 であげた施設で、下記のことが行われているのを知っていますか。

① 会議室や料理実習室などを貸し出している　知っている 51.1 知らない

② 各種サークルが集会室を利用して活動している　知っている 55.6 知らない

③ 各種サークルの紹介、案内を受けられる　知っている 40.1 知らない

④ 各種サークルや地域団体によるまつりが開催されている　知っている 45.2 知らない

⑤ 教養講座、体験講座などが企画されている　知っている 51.7 知らない

⑥ 各種学習情報を発信している　知っている 35.9 知らない

⑦ 市民団体の活動を支援している　知っている 27.3 知らない

⑧ その他（　　）0.5

全て「知らない」の方は質問 8 へお進みください

質問 7　下記の項目で、利用したことがあるものを教えてください。

① 会議室や料理実習室などを借りたことが　ある 19.1　ない

② 各種サークルとして集会室を利用し活動したことが　ある 21.0　ない

③ 各種サークルの紹介、案内を問い合わせたことが　ある 11.9　ない

④ 各種サークルや地域団体によるまつりに行ったことが　ある 22.2　ない

⑤ 教養講座、体験講座などに参加したことが　ある 19.8　ない

⑥ 各種学習情報を問い合わせたことが　ある 7.8　ない

⑦ 市民団体としての活動の支援を受けたことが　ある 4.6　ない

⑧ その他（　　）0.3

一つでも「ある」の方は質問 9 へお進みください

2

質問 8　質問 5 で「⑫ 知っているところは無い」と答えた方、または
質問 6 で 全て「知らない」の方、または
質問 7 で 全て「ない」の方は、その理由をお選びください。（いくつでも）

① 生涯学習センターがどこにあるか知らない　15.0
① 趣味等の学習に費やす時間がない（学校の活動、サークル以外のもの）16.2
② 参加しようと思ったが、タイミングが合わなかった　7.0
③ 生涯学習センター施設そのものを知らなかった　7.6
④ 生涯学習センター以外で学習や運動をしている　7.0
⑤ 交通手段がない　1.9
⑥ その他（　　）　5.9

質問 9　あなたが興味のある分野を教えてください。（いくつでも）

① 歴史･文学 19.3　② 美術 15.9　③ 音楽 31.1　④ 科学 5.7
⑤ スポーツ 34.4　⑥ 料理･食育 26.2　⑦ 子育て･教育 13.6　⑧ 国際･異文化･外国語 8.8
⑨ 健康 39.1　⑩ 福祉 14.1　⑪ パソコン･インターネット 17.3　⑫ 環境問題 6.3
⑬ 消費者問題 4.2　⑭ 防災対策 14.9　⑮ 仕事のための知識や資格 11.1
⑯ 自然体験･生活体験 11.4　⑰ その他（　　）1.7
⑱ どれも興味がない 6.4

質問 10　およそ１年以内にあなたが参加したり、学んだ分野がありますか。（いくつでも）

① 歴史･文学 5.6　② 美術 4.1　③ 音楽 8.8　④ 科学 1.2
⑤ スポーツ 11.4　⑥ 料理･食育 5.2　⑦ 子育て･教育 5.0　⑧ 国際･異文化･外国語 3.2
⑨ 健康 9.8　⑩ 福祉 7.2　⑪ パソコン･インターネット 3.8　⑫ 環境問題 1.6
⑬ 消費者問題 0.8　⑭ 防災対策 7.3　⑮ 仕事のための知識や資格 4.2　⑯ 自然体験･生活体験 2.2

⑰ その他（　　）　1.7

⑱ どれもやっていない　48.5　⇒ ⑱へ◯を付けた方は質問 13 へお進みください

4

質問 11　質問 10 で「参加した・学んだ分野」が１つでもある方にお聞きします。どのようなところで参加したり、学びましたか。（いくつでも）

① 学校の正規課程（社会人入学も含む）	6.2
② 学校の公開講座	4.5
③ 市や県が公共施設で開催する講座	10.8
④ 民間のカルチャーセンターや教室、スポーツクラブなど	9.1
⑤ 図書館、博物館、美術館、体育館、音楽ホールの催し	9.7
⑥ 同好者が自主的に行っている集まり、サークル活動	12.2
⑦ 職場での教育、研修	4.7
⑧ サークルや催しに参加せず、独学で	3.2
⑨ その他（　　）	1.8

質問 12　質問 10 の「参加した・学んだ分野」について、あなたは普段、情報をどのような手段で得ていますか。（いくつでも）

① 家族や友人・知人からの情報	21.3
② 学校や職場からの情報	12.2
③ 新聞・雑誌	12.7
④ インターネット	13.5
⑤ 広報しずおか「静岡気分」	16.4
⑥ 公共施設に設置されたチラシやポスター	8.1
⑦ 自治会・町内会の回覧など地域からの情報	10.2
⑧ その他（　　）	0.7

質問 13　その他、ご意見ご要望がありましたらご記入ください。

（　　）

以上でアンケートは終了です。
ご協力ありがとうございました。

6

このアンケートについて、何かご質問がありましたら
下記 配布担当センターまで、お問い合わせください。

お問い合わせ先

健康文化交流館「来･て･こ」	**054-202-4300**
西部生涯学習センター	**054-255-3960**
北部生涯学習センター	**054-271-5111**
藁科生涯学習センター	**054-278-4141**

COC+ 地域課題解決支援プロジェクト

研究フォーラム

伊豆半島の学習・交流・協働拠点づくりを考える

日　時：2017年8月10日（木）14:00～17:30
会　場：南伊豆町湯けむりホール
プログラム：
　報告1「能登半島の先端、人材養成プロジェクト10年の歩み」
　　報告者：宇野文夫（金沢大学地域連携推進センター）
　報告2「伊豆半島の地域資源とジオパーク
　　～ジオパークは地域の未来を変えるか？～」
　　報告者：小山真人（静岡大学教育学部・地域創造学環）
　報告3「学生参画による地域連携の取り組み」
　　報告者：宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター）
　　佐藤直樹（静岡大学学生支援センター）
　　奥洞知依・増田彩香（静岡大学フューチャーセンターディレクター）
　報告4「地域創造学環フィールドワークの取り組み」
　　報告者：皆田　潔（静岡大学イノベーション社会連携推進機構）
　　遠藤有紗・本田圭美・吉澤公史・太田智輝・勝又壮平・杉山尚暉
　　（地域創造学環）
　パネルディスカッション
　　パネリスト：報告者、課題提案者（南伊豆町・山口一実、松崎町・深澤準弥、
　　東伊豆町・荒武優希）
　　平岡義和（静岡大学地域創造学環）
コーディネーター：阿部耕也（静岡大学イノベーション社会連携推進機構）

（阿部）

今回は、遠く金沢からおいでいただいた宇野先生にも加わっていただき、フォーラムを開催します。

本フォーラムを開催することになった背景を説明しますと、静岡大学は2013年から地域課題解決支援プロジェクトを始めています。静岡市と浜松市はいずれも静岡大学のキャンパスがあるので割と連携がありますが、それ以外の所との接点がなく、静岡大学は敷居が高いという話を聞いたので、それなら地域の課題を紹介いただいて、一緒に取り組もうという働き掛けをすることを考えました。

最初は、5件ぐらいは応募がないと格好がつかないし、静岡大学に誰も期待していないことがはっきりするのは嫌だなと思っていたのですが、第1期は28件の応募をいただきました。中には準備ができていないものがあったので、実際の採択は27件になりました。そのような形で進める中で、松崎町、東伊豆町など伊豆、賀茂地域から多くの課題をいただきました。

2016年からの第2期は、学生を継続的に受け入れるような地域課題を提案してほしいという条件を付けて15件を採択し、合計42件をデータベース化しました。そのうち1期、2期合わせて18件が伊豆半島、特に賀茂地区からの課題でした。商店街の魅力発掘とデザイン、中山間地

の活性化、空き家再生と利活用、生涯活躍のまちづくりへの参画、廃校の利活用など非常に多様な課題をいただきました。ありがたいと同時に、特に普段は大学とほとんど接することがない伊豆半島の南部をしっかり見なければならないと思いました。

静岡大学では、地域創造学環という教育プログラムが昨年（2016年）から立ち上がり、今回は1年生、2年生が参加しています。最初の学外でのシンポジウムは、2015年2月に松崎町で開きました。静大フューチャーセンターの面々が報告したのですが、非常に期待を持って受け入れていただきました。

東伊豆町からも課題が提示され、2016年2月には同町で第2回シンポジウムを開催しました。学生たちが伊豆半島の南部に興味と関心と愛着をだんだん持ち始めるようになったので、これをもっと進めなければならないと思いました。そういう中で南伊豆町からも幾つか課題をいただきました。2016年12月のシンポジウムでは、テレビ会議で大学と松崎町の「ふれあいとーふや。」を結びました。

私の頭の中には、県内への興味はもちろんありましたが、特に伊豆半島の南部に興味があり、そうこうしているうちに石川県から講演を依頼され、能登半島に行く機会ができました。能登半島の先端の珠洲市には金沢大学の能登学舎というものがあって、能登里山里海マイスターの取り組みをしていると聞き、ぜひ行ってみたいと思っていたのです。途中、輪島の少し先で白米千枚田の風景と出会い、素晴らしいと思ったのですが、「似た風景を見たことがあるな」とも思いました。松崎町の石部の棚田がどこか似ていると思いませんか。頭の中で地図を思い浮かべて考えていたことが、風景として、自分の経験としてつながり、もしかしたら似たような地域課題や地域資源を持っているかもしれないと思うようになりました。

実際に調べてみたところ、2010年と2015年の国勢調査の人口を比較すると、石川県内で10％以上減少した地域は珠洲市と能登町でした。実際珠洲市に行ってみたのですが、遠いなと思いました。同じように静岡県内を見てみると、南伊豆町、松崎町、西伊豆町、東伊豆町で10％以上減少していました。なので、もしかしたら同じような取り組みをして、同じような課題で悩んでいるのであれば、お互いに今までの取り組みを報告し合って、知恵を出し合うといいのではないかということで、今回のフォーラムを企画しました。

そこで、まず基調講演として、珠洲市で能登学舎を運営している金沢大学の宇野先生にお話を伺いたいと思います。

図1　能登半島と伊豆半島の棚田

図2　両半島の人口動態／日経新聞静岡版2017年5月9日「静大発 私の提言」から

報告 1

能登半島の先端、人材養成プロジェクト 10 年の歩み

宇野文夫（金沢大学地域連携推進センター）

能登の取り組みが先進的な事例であるかどうかは定かではありませんが、始めてから10年たちます。その中でできたこと、できなかったことを報告します。

能登は今、夏祭りの季節です。キリコという大きな山車のようなものを担ぎ上げて、みんなで町中を練る祭りがあります。学生たちが夏祭りの支援に行っていて、おみこしやキリコを担いでいます。農耕儀礼「あえのこと」はユネスコの無形文化遺産になっています。それから、フィリピンのイフガオにある壮大な棚田は世界文化遺産になっているのですが、田んぼづくりで悩んでいるということで能登と連携しています。

能登半島の中に一体どんな地域課題があり、われわれがどう向き合っているかについてお話ししたいと思います。

1．金沢大学能登学舎の開設

大学はこれまで教育と研究をしていればよかったのですが、2007年の学校教育法改正により、教育と研究で得た知見、技術、人材、知的財産を地域社会のために生かし、社会貢献することがミッションに加わりました。私がこの10年間ずっと取り組んできてなるほどと思ったのは、教育と研究と社会貢献が重なった部分がパワースポットだということです。私は「知と地のパワースポット」と勝手に名付けています。

金沢大学の地域連携推進センターは、「手をつなげば、きっとうまくいく。」をキャッチフレーズにしています。そんなはずないだろうと思うかもしれませんが、うまくいくかもしれないというふうに解釈してください。

2007年の学校教育法改正後、金沢大学は続々と地域連携しています。最初に手をつないだのは奥能登の輪島市、珠洲市、穴水町、能登町です。地域づくり連携協定を2007年7月に結びました。大学として最初に結んだ連携協定です。

奥能登と協定を結んだのは、過疎化、少子高齢化が進んでいるからです。1980年から2040年までに人口が3分の1になるとされ、消滅可能性都市といわれる地域も出てきています。

私が関わって以降もたとえば珠洲市だけでも、ここ10年で3000人が減っています。過疎化は人口が減っているだけでは済まなくて、1人当たりの消費が150万円だとすると、人口が1万人減少すれば地域経済が150億円縮小するわけです。キリコ祭りにしても、若い人たちは確かにいますが、昔はもっといたので、みんなで担ぎ上げていました。しかし、今は若者が少ないので車を付けて押していて、山車のようになっています。なので、私は地域文化が危ないと思っていて、地域の人たちも重々承知しています。

それから2007年3月、最大震度6強の能登半島地震があり、多くの家が全半壊して、過疎化がさらに進みました。最近では3月に、北朝鮮の弾道ミサイルが能登半島の200km沖に落ちました。これを地政学的リスクと呼んでいますが、地域課題というよりもリスクが最近は高まってきています。

私たちは2007年に協定を結ぶ前から、能登半島に入っていきました。能登半島の先端にある珠洲市三崎町は、金沢大学から150kmの距離にあり、車で行くと2時間半かかります。ここに

2006年10月、能登学舎を開設しました。われわれが行く2年前に閉校した小学校の廃校舎を再利用しました。学校に再び明かりがともったので、地域の人たちはとても喜んでくれました。開設には、三井物産環境基金という民間ファンドを活用しました。最初に行ったのは、「能登半島　里山里海自然学校」の開設でした。

「里山里海」という概念を初めて能登半島に持ち込んだのは、われわれでした。当時、里山という概念も、里海という概念もあったのですが、里山里海をくっつけて一つの言葉にしたのはわれわれが最初でした。これがその後の国際評価につながっていきます。

なぜ能登半島の先端に行ったかというと、三崎町は目の前が海で漁業が行われており、後ろは里山になっているからです。このときは生物多様性をテーマにしていたのですが、里山里海を対象とする上で良い環境だということでここに決めたのです。もう一つは、景色が非常に良かったからです。海越しに立山連峰が見えることが大きな特徴です。壮大な景色が広がります。

生物多様性も豊富で、シベリアから東南アジアに向かう渡り鳥の中継地点に当たり、野生のコウノトリやタンチョウヅル、サシバなどが飛来します。シャープゲンゴロウモドキという非常に珍しい水生昆虫も生息しています。沖縄からやってくるアサギマダラというチョウもいます。コノミタケというキノコは、能登半島にしかないキノコです。これらの生物が能登半島にいるので、生物多様性を調査するにはちょうどいい場所です。

そこで、市民の皆さんと一緒になって能登半島を調査しようということになり、金沢大学のオープンリサーチセンターが開設されました。それが里山里海自然学校です。能登半島の生物多様性を大学と一緒になって調査し、理解して守っていき、地域資源として活用していこうというのが活動の原点でした。

いろいろなことが分かってきました。例えば先ほどのコノミタケは、能登ではよく食べられていて、1kg当たり1万円もするのですが、新種であることが分かり、「能登のホウキタケ」という意味の「ラマリア・ノトエンシス」という学名が付けられました。キノコの名前に「ノト（能登）」が付いたのは初めてです。もっと調べればいろいろなキノコが出てくるので、他にも新種があるのではないかとわれわれは思っています。

2.「能登里山里海マイスター」育成プログラム

2007年には文部科学省から補助金をいただき、「『能登里山マイスター』養成プログラム」（現在の「能登里山里海マイスター」育成プログラム）を始めました。3階建ての能登学舎の1階に自然学校があり、2、3階は育成プログラムで使っているのですが、3階では黄砂研究のための大気観測も行っています。今も金沢大学の調査、学術、地域交流の拠点になっています。

人材育成プログラムは2007年にスタートしたので、今年でちょうど10年目になります。地域の人たちにとって欠かせない、大きなファクターになっていると自覚しています。なぜなら私たちは、生物多様性を生かし、地域の自然と共生する形で地域活性化を図ることを念頭に置いているからです。

環境にやさしい農業をすることによって、田んぼにゲンゴロウやホタルなどが生息して生物多様性が守られ、食の安全性を担保することにつながり、農産物の付加価値となります。能登では「げんごろう米」や「蛍米」がどんどん作られています。そして、新たな観光資源としてエコ・ツーリズム（eco-tourism）、グリーン・ツーリズム（green tourism）が生まれました。最近は、東京や大阪などいろいろな地域の小中高生が修学旅行などで能登半島を訪れます。それが全般的に能登のイメージアップにつながり、大きな循環になりつつあります。

能登半島は本州で最後の一羽のトキがいた場所ですが、今佐渡で生息しているトキが能登半

島にもう一度飛来するような里山里海の環境をつくろうというのが大きなテーマです。それが今、一つ一つ実を結んでいます。

2007年の人材育成プログラムのスタート時は、私も企画運営担当としてスタッフに入っていました。そして、博士号を持った教員・スタッフ5人が、特任ではありますが、能登に常駐する形をとりました。地域で環境にやさしい農業をしている方からアドバイスをいただき、地元の農林水産業のベテランの方を教務補佐員として招いて、地域の45歳以下の社会人がマイスターとして学ぶプログラムをスタートしました。

社会人教育ですので、勉強としてはなかなか厳しいです。座学では、「森は海の恋人」で有名な畠山重篤さんや横浜国立大学の松田裕之さん、飛騨古川でインバウンドツーリズム（inbound tourism）をやっている山田拓さんに来ていただいて、いかにして地域資源を使って地域おこしをしていくかを学んでいます。同時に、先進地視察や農林漁業の実習、GIS（geographic informatin system）・リモートセンシング（remote sensing）の技術講習などをしながら、自分がやりたいことをどんどん発見してもらっています。

2007年10月にスタートした「能登里山マイスター」養成プログラムは、5年間で62人が修了しました。その後、自己財源で「能登里山里海マイスター」育成プログラムを立ち上げました。金沢大学が2000万円、珠洲市が2000万円出資し、現在も続いています。これまでにトータルで144人が修了し、そのうち移住者が34人います。こういう人たちに、どうすれば能登に定着してもらえるかということに取り組んでいます。修了した人たちが点と点で結ばれて線になり、線と線がさらに結ばれて、面展開をいろいろな形でしています。

最初は農業や漁業の受講者が多かったのですが、最近は公務員や市会議員、医者、僧侶、デザイナーなど、多様な職種の方が入ってくるようになりました。不思議な現象なのですが、里山里海や能登半島の魅力もあっていろいろ学びたいのだと思います。そして今年、初めて弁護士が入ってきました。その弁護士は、入会地の調整がうまくいかないために里山が全国でものすごく荒れているので、法律的に解決できないかということをテーマに掲げています。

3. 事例紹介

マイスターは能登でいろいろなカタチで活躍していますので、何人か紹介します。

大野長一郎さんは、クヌギの森づくりをしています。大野さんはもともと地元の炭焼き工場の2代目なのですが、海外の安いバーベキュー炭に押されて苦戦していました。そこで彼は、能登半島のクヌギの木を使ってお茶炭を作ることを独自に考えました。大阪の池田がお茶炭の産地なのですが、高齢化でかなり生産量が減ってきています。大野さんは仲間と共にクヌギを植林し、菊炭（お茶炭の別称）を生産し始めました。すると、表千家や裏千家の茶人との直接取引が始まり、大野さんは今度、炭焼き学校を能登半島につくる予定です。受講生を全国から募集し、茶道と炭焼きを統合したような学校をつくるため、必死になってクラウドファンディング（crowdfunding）に挑んでいます。この間、目標金額を達成したとも言っていました。

櫻井浩一さんは、「能登ふぐ」のブランド化に取り組んでいます。能登ではもともとフグが獲れたのですが、鳥取県境港で揚がったフグが高く売れるので、みんな境港に持っていっていました。櫻井さんは、境港に持っていくのではなく、能登で獲れた「能登ふぐ」として売ることに取り組み、「能登ふぐ」のブランドが少しずつ定着してきました。

記州秀幸さんは、神棚などに飾る能登サカキの産地化に取り組んでいます。日本で売られているサカキの95％は中国産ですが、実は能登にはサカキはたくさん自生しています。記州さんはもともと金沢で花屋を経営していたのですが、能登産サカキを製品化して花屋に出荷しよう

と考え、市場化に向けて一生懸命取り組んでいます。

大澤知加さんは、金沢からの移住者で、里山里海でメンタルヘルス・プログラム（mental health program）を事業化しています。都会で少し心を病んだ人が、農業をすることでまた元気になってもらうプログラムを、金沢大学の医療研究者たちと共同で開発しています。

それから、萩野由紀さんは東京出身のデザイナーで、アメリカのペンシルベニアでの在住経験があるのですが、ご主人とお子さんたちと一緒に能登へ移住してきました。彼女は、能登が非常に良質な和紙の産地であることに目を付け、新しい里山の暮らしをデザインするとともに、和紙を自分で作ることに取り組んでいます。また、生物多様性の調査を地域の人たちと取り組む「まるやま組」というネットワークもつくっています。

このように、移住者を含めていろいろな方々が能登半島にやってきて、われわれはその受け皿になっています。

4. プログラムの狙い

私たちがプログラムを通して狙っているのは、能登での社会貢献です。人口減少が進む能登は、ある意味でまさに日本が抱えている課題先進地域です。大学と地域が連携して、イノベーションを起こす人材を育てることで地方創生に資するようなことが起きれば、大学の社会貢献のモデルになる可能性も出てきます。

これだけなら割とやっているところはあると思いますが、私たちがしていることはちょっと違います。「能登の里山里海」を国連の食糧農業機関（FAO）が認定している世界農業遺産（GIAHS）にエントリーしたのです。そして見事、2011年に佐渡とともに日本で初めて認定を受けることができました。認定書には「NOTO's Satoyama and Satoumi」と書いてあります。私たちが持ち込んだ里山里海の概念が、初めて国際認定の固有名詞として使われるようになったと自負しています。

田んぼを耕し、はさ掛けをして、稲が実ると一緒にお祭りをして、田んぼの神様に感謝します。同じ農業でも、文化的なアプローチがある点が非常に評価されて認定されました。その他に、海には海女漁もありますし、網に入ってきた魚の3割しか捕らない定置網漁もあります。それらを合わせて「能登の里山里海」として、世界に残すべき一つの資産であると位置付けました。

GIAHSは現在、世界17カ国、38サイトが認定されており、各地との提携が始まっています。中でも能登が提携しているのは、ユネスコの世界文化遺産であり世界農業遺産でもあるフィリピンのイフガオです。2014年にイフガオ里山マイスター養成プログラムを始めました。イフガオの棚田は壮大で、能登半島全体が棚田のような感じです。

イフガオのプログラムには能登の育成プログラムをそのまま移出しました。JICAの協力で現在2期目に入りました。イフガオでは若い人たちがマニラに働きに行ったまま帰ってこない若者の農業離れが顕著になっています。棚田は草が生え放題となり、耕作放棄地になっています。私が行って見てきただけで、4分の1ぐらいまで草が生えていて、ところどころ崖が崩れていました。このままでは遺産取り消しになってしまいます。イフガオでは、棚田の資産を守って活用したいと考えている若者がいます。同じGIAHSの仲間である金沢大学に対し、「能登の里山里海を守るのと同じように、私たちもイフガオの棚田を守りたい」という提案がイフガオ側からあり、JICAの草の根事業に申請しました。今では能登からイフガオに研修に行きます。こうしたことを続けるうちに、能登の米とイフガオの米を世界に売り込もうという話になっていくと思います。

国際評価が得られると、海外からいろいろな人が視察に訪れます。例えば里山の棚田を維持

するためにはため池が重要で、アフリカでは水1滴のために部族同士が争うこともあります。そこで、能登では水をどう確保しているのかを学ぶためのプログラムが、JICAの里山イニシアティブ（initiative）という国際プログラムのコースに2010年からずっと入っています。そして、ため池や棚田の保全、コミュニティーのことをいろいろ学んでいます。

また、金沢大学には留学生が現在580人いますが、ぜひとも能登で研修したいということで、研修プログラムをつくっています。能登の輪島塗体験や祭りへの参加、野生のイルカのウオッチングなどいろいろしています。学びの場としての能登が非常に脚光を浴びていると言っていいかもしれません。

能登には高等教育機関がないので、能登を学びの場として活用するために2011年3月、金沢大学、石川県立大学、金沢星稜大学、石川県立看護大学の4大学と輪島市、珠洲市、穴水町、能登町が一緒になって、「能登キャンパス構想推進協議会」を設立しました。学生たちを能登に連れていき、学びの場として活用しようというものです。

能登半島では冬に強い北風が吹くので、家が倒れないように間垣という竹垣で囲むのですが、間垣の補修作業を学生たちが毎年手伝っています。それから、能登の祭りにボランティア参加しています。女子は「旗持ち」という旗を持つ役を務め、男子はみこしを担ぎます。私は黒島天領祭（毎年8月17、18日）の大学側の窓口で、ことしも教職員含め48人を連れていって、祭りに参加します。学生たちは能登で祭りの体験をすることにより、祭りとは何か、伝統文化とは何か、それを継承するコミュニティーとは何かということを学びます。言うならば、それが「知と地のパワースポット」ということになります。

能登半島は有力企業の工場誘致に失敗した地域であり、人口減少が進みました。しかし、祭りの文化や昔ながらの生業（なりわい）が大切に保存されています。それらを一つ一つ点検、調査して、学ばせてもらうことになります。グローバル（global）とローカル（local）が入り混じったグローカル（glocal）の時代の中で、能登はある意味で1周遅れのトップランナーではないかと思っています。そういう目で能登半島を見つめると、非常に面白い学びの場ではないかと思います。

恐らく伊豆半島にも伝統文化がたくさんあると思うので、皆さんでもう一度調査して、それを地域資源としてどんどん活用していく方法を生み出していけば、われわれとしてもお互いに知恵の交換をできると思います。

報告２

伊豆半島の地域資源とジオパーク
～ジオパークは地域の未来を変えるか？～

小山真人（静岡大学教育学部・地域創造学環）

6年前にもこの会場で一度、同じテーマの話をしたことがあります。ジオパーク（geopark）ができる前でしたが、当時は伊豆半島内の各市町を回って、ジオパークに取り組んでみましょうという話をしていました。6年たって随分いろいろなことが進んだので、今日はその報告を兼ねてお話ししたいと思います。

1．ジオパークとは

弓ヶ浜は伊豆半島で最も美しいビーチだと私は思うのですが、不思議な形をしています。その形には意味があって、弓ヶ浜の背後を流れる青野川は昔、真っすぐに流れ出ていたのですが、青野川が運んでくる砂が海流に乗せられ、浜が育っていって、青野川河口の位置を動かし、現在の位置に注ぐようになりました。砂浜の背後はかつて入り江で、弓ヶ浜付近は天橋立のように飛び出た砂のくちばしのような形をしていたのですが、背後の入り江は港として活用されました。今は埋まって平地になってしまいましたが、湊という地名が残っています。そういう自然の歴史が分かれば、見える世界がまったく違ってきて素晴らしい感動を味わえるし、それを人々と分かち合うことができる場所がジオパークだと思っています。

今でもたびたび誤解を受けていて、ジオパークは「地質公園」や「世界地質遺産」と訳されたりしますが、まったく違うものです。ジオパークの一番のベースには大地があります。大地がつくったものを保全・活用しながら、地域を振興する場です（図1）。ですから、地域振興がジオパークの主要な目的になります。ユネスコが、大地が生んだ資産を保全・活用して地域振興している地域をジオパークとして認定することで、世界的なモデル地域として保証されるという仕組みです。

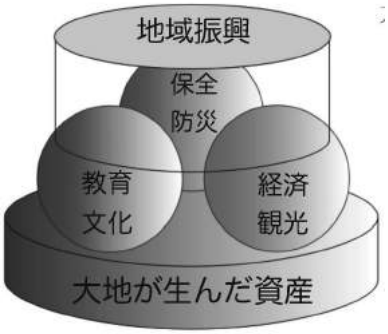


図1　ジオパークのしくみ

保全には保護だけでなく防災も入ってきますし、活用には経済活動だけでなく文化活動も入ってきます。それらが全体として機能し、地域が盛り上がっていくことが、ジオパークが成立する条件です。

ジオパークの構成資産の全体像を説明します（図2）。大地がベースにあって地形や地層や土壌が乗っかり、そこに水が流れ、温泉が湧き、川が流れ、動植物が住んでいます。それらが自然景観を形作り、そこに自然災害も起きます。そうし

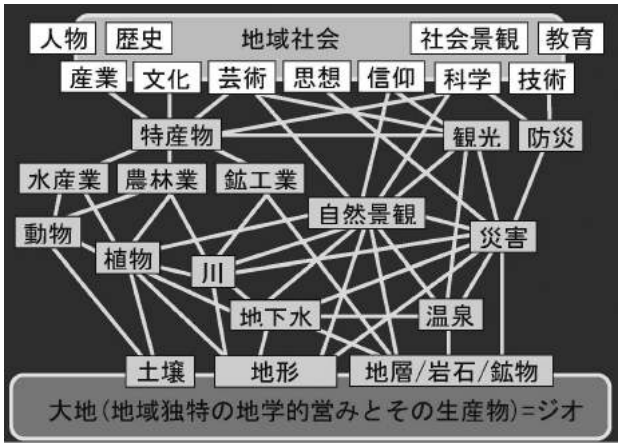


図2　ジオパークの構成資産

たすべてを人間がいろいろな形で利用し、産業を興して特産物を作り、観光にも使って、防災活動もしながら、地域社会が成立してきたわけです。つまり、大地が源となり、地域社会のすべてにつながっています。このつながりのことをジオパークの「ストーリー」と呼んでいます。地元がそういったストーリーを見つけ、学んで楽しんで、観光や教育に生かしていく場所がジオパークとも言えます。

ジオパークの観光（ジオツーリズム：geotourism）は、大地の上にあるものすべてを扱い、自然景観だけでなく、社会景観や人間の活動自体も対象とします。教育面からジオパークを見ると、学校教育では構成資産の土台の部分はすべて理科に押し付け、他はいろいろな教科に分けて教えてきましたが、ジオパークの教育は全部をまとめて扱います。

ジオパークは比較的新しい活動で、2004年から始まりました。当初はユネスコの正式なプログラムではなく、中国とヨーロッパが主体になって進めてきたものが徐々に世界に広がり、2008年になって日本もようやく3地域が世界ジオパークとして認定されました。そして、伊豆半島がジオパークに名乗りを上げたのが2011年で、国内ジオパークに認定されたのは2012年です。その間、ジオパークはどんどん増え、今では35カ国127地域が認定されています。2015年にユネスコが直轄するプログラムになりました。ユネスコが認めた日本国内の世界ジオパークは8地域です。国内ジオパークは35地域、ジオパークを目指して名乗りを上げている地域が14あります。

認定を受けるには、まずジオパークの国内委員会に申請し、審査を受けて認められれば国内ジオパークに認定されます。さらに世界ジオパークになるためには、ふたたび審査を受けた上で国内ジオパーク委員会の推薦をとりつけ、ユネスコの審査を受けることになります。ユネスコの審査の仕組みは一昨年（2015年）から複雑になり、申請してから1年半くらいかかるので、かなりハードルは高いです。

日本国内の世界ジオパークについては、最初の3地域はすんなり認定されましたが、その後は見送られたり、落とされたりして、皆さんかなり苦労しています。伊豆半島も2014年に初めて世界ジオパーク候補としての推薦を受けましたが保留となり、いま再挑戦中です。その間にも、国内からの推薦を見送られたジオパークが3地域あります。

審査基準には、自然の価値だけではなく、いかに住民を巻き込んでいるか、持続的発展性があるのか、将来計画はどうなっているのかなど、かなりいろいろなことが入っています。ユネスコの直轄になってから、さらにユネスコ独特のにおいが漂い始めて、ジオパークをきちんと防災に生かしているかという基準も正式に入りました。ただし、もともと日本のジオパークは、防災を指向しているところが多かったです。それから、気候変動のことを重視しているかとか、女性の地位を大事にしているかといった観点もユネスコ風です。あとは、地域の伝統文化や地域に根ざした知識や知恵を大事にしているかということも入っています。ユネスコはもともと、人の心の中に平和の砦を築くことを憲章に掲げていて、世界のジオパークが交流して世界平和に生かすという究極の目的があるので、こうした種々のものが入っているのです。

伊豆半島は、ほぼ全域の15市町がジオパークの領域として認められています。火山によって形成された半島で、古い火山が多いですが、新しい火山としては伊豆東部火山群があります。小さな火山の集まりですが、いまだに活動を行っている活火山で、伊東沖では今でも時々マグマが活動しています。伊東には大きな温泉街があって、昔から火山の恩恵を受けていたのですが、1978年以来たびたびマグマが上ってきて群発地震が毎年のように起きていました。それがついに1989年、伊東港の3km沖の海底で噴火し、大騒ぎになりました。

これは防災上かなり大変な話ですが、地元は何も準備できていませんでした。私は当時、ま

ずはハザードマップ（hazard map）をきちんと描かないと駄目だと思い、自分で描きました。これを生かしてきちんとした防災計画を立てた方がいいと主張しましたが、完全に無視されました。当時の伊東の人たちは、「火山のことを言うと観光客が来なくなる。防災はしなくていい」という考え方でした。

私は、火山防災についての地元の理解がきちんと得られていないという思いに至り、個人的にいろいろな活動をしました。伊豆半島は火山が作った半島であって、人々は火山とうまくつきあって共に生きていかなければならないということをいろいろな機会に述べ、地元の伊豆新聞の日曜版にも2年半にわたって連載記事を書きました。

そうしているうちに、NPOの方々など地元に味方がたくさん現れて、今ではジオパーク活動の一部といってもいいような普及啓発活動を20年以上前から続けることができました。学校の先生にも賛同者が現れました。伊豆総合高校の若い先生は、校長や他の先生方を説き伏せてジオパーク教育を正式に始めました。そういった熱心な活動家が次々と現れたのです。

ついには、伊東市の佃弘巳前市長や川勝平太知事が「ジオパークの活動をきちんとやったらいい」と言ってくれて、推進協議会が2011年に発足し、2012年に国内ジオパークに認定され、現在の活動が続いてきたわけです。

2. 伊豆半島の火山

日本付近はプレートと呼ばれる4枚の岩板で地表を覆われていて、それぞれが動いています。プレートの動きを戻していくと、伊豆半島は今より南にあったはずであることがわかります。実際に大陸は移動していて、インドはかつて南にあったものが分かれて、ユーラシアとぶつかってヒマラヤ山脈を作ったのですが、伊豆半島でもそれと似た事が起き、南から来た伊豆が本州にぶつかって丹沢山地を作りました。

地球の歴史上、そうしたダイナミックな歴史が地形や地層からはっきりと証明された場所はそれほどありません。活動的な火山列島同士の衝突が今も起きている場所は、地球上で伊豆半島だけです。昔は海底火山だったものが陸になったので、下にある地層は海底火山が作ったものです。上に乗っている地層は、衝突して陸になってからの陸上火山の地層です。南から移動してきた証拠は幾つかあって、例えば南洋にしか住んでいない化石が地層から見つかります。

そして、海底火山は通常、潜水艇でようやく断片だけ見られるだけなので、海底火山の地層が陸上ではっきり見られる場所は貴重です。海底噴火の場合、溶岩が連続した液体のように流れないので、当初は地層を見てもよくわかりませんでした。伊豆半島では海底火山の地層がよく見られるということで、世界中の火山学者が注目し、一生懸命研究して論文を書いています。海底火山研究のメッカといってもいいと思いますが、それらの研究成果は地元の住民には知らされませんでした。私はそれを残念なことと思い、分かりやすい資料を作って地元の皆さんに提供してきました。

例えば、海底を流れる溶岩は平べったく広がらず、表面張力によってチューブ状になって流れます。これを枕状溶岩といいます。実際に、海底火山で枕状溶岩が積み重なっている様子を潜水艇では観察できますが、陸上で見事に観察できる場所が伊豆半島です。

さらに、堂ヶ島海岸のように、海底に降り積もった火山灰が海流で洗われて、きれいな模様を作っている場所が観光地になっています。それから、海底火山が隆起して浸食され、根の部分だけ固いので突き出しているものもあります。下田の下田富士や松崎の烏帽子山などはすべて海底火山の根が突き出したものです。陸上になってからは、伊豆東部火山群には最近噴火したものが多いので、きれいな火山地形が残っています。

例えば大室山や一碧湖などはすべて火山が作った地形です。特に大室山は伊豆半島を代表するといっていい火山で、国の天然記念物にも指定されています（図3）。ストロンボリ式噴火と呼ばれ、要するに粘り気の少ないマグマが噴き上がり、火口の横に積み上がって美しい形を作っています。そういう小さな火山からは溶岩が流れ出すこともあり、周りのでこぼこした地形を埋め、平らな大地を作り、海岸に流れ込んで美しい城ヶ崎海岸を作り出しました（図4）。さらに、大室山から流れた溶岩は、谷を埋めて湖も作りました。この湖は、明治の初めのトンネル工事で水を抜いて、水田に生まれ変わりました。

図3　北西側から見た大室山

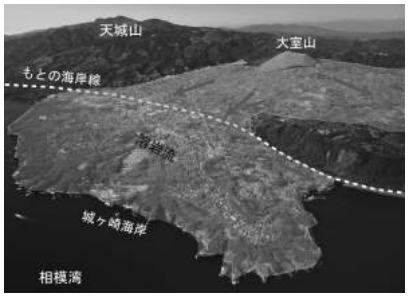


図4　大室山の溶岩流がつくった伊豆高原と城ヶ崎海岸

伊豆半島のワサビ田や松崎の棚田が成立する上で、海底火山と陸上火山の2層構造は重要でした。海底火山は変質が進んで隙間が埋まってしまい、水を通しにくい地層になっています。ところが、陸上火山は比較的新しいので、割れ目や隙間が多く、雨水が染み込みます。すると、海底火山が作る不透水層と陸上火山の透水層の境目に水が集まり、麓に湧き出して、そこにワサビ田や棚田がつくられました。雨水の一部は地下深くの温度が高い場所まで染み込んで温められ、温泉になるわけです。温泉からはいろいろな鉱物が沈殿して、金鉱床や、ガラスの材料となる珪石鉱床をつくりました。

火山がつくった石材も貴重で、黒曜石は縄文時代からやじりに使われていましたし、石材を切り出した石丁場の跡は半島中に残っています。切り出された石材は、海底にたまった火山灰の美しい模様をそのまま残しており、下田などの町並みを作っています。伊豆半島の石材は、世界遺産の韮山反射炉や、東京のお台場の石垣などにも使われています。こうした伊豆石と呼ばれる石材が、日本中のいろいろな建築物に使われ、伊豆石の文化圏をつくった時代がありました。

さらに、火山は信仰の面にも影響を与え、伊豆半島には火山の神様がいます。下田の白浜神社にまつられる女神様は、以前は夫婦で神津島におられたのですが、噴火とともに白浜神社に移ってきて、のちに夫の神様だけが三島に移り、三嶋大社にまつられています。このように火山の神様が引っ越したという言い伝えがあります。

伊豆半島の大地の特徴を生かして、いろいろな特産物も作られました。例えば、「みしまコロッケ」のジャガイモは、火山特有の肥えた土と平坦な地形を利用して作られたものです。タカアシガニは、プレートが沈み込んでできた駿河トラフの深海に住んでいます。

良い面がたくさんありますが、もちろん悪い面もあります。伊豆半島は本州に衝突していますが、半島の両側にはプレートが沈み込む駿河トラフと相模トラフがあり、巨大な地震を起こす場所となっています（図5）。これらの

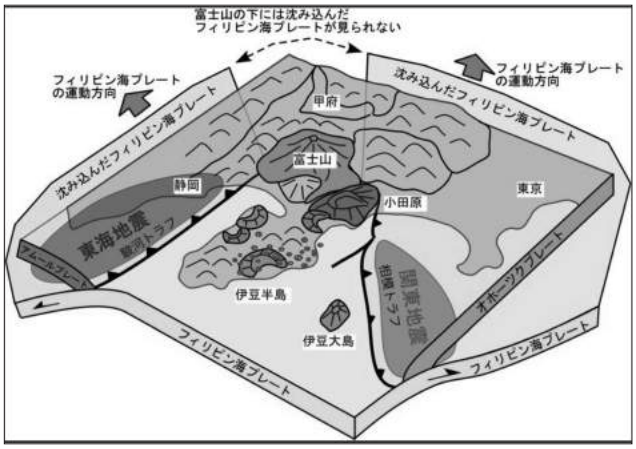


図5　現在の伊豆付近の状況

地震によって、伊豆半島はたびたび津波に襲われました。下田市の「つなみ塚」のように、あちこちに津波の石碑が立っています（図6）。お寺の建物にも津波の傷跡が残っています。特に下田は両側から津波が入り込んできやすい入り江の奥に位置するので、たびたび大きな被害が出ました。

図6　下田市稲田寺の「つなみ塚」

世界史的に有名なのは、ロシアのプチャーチン提督が開国交渉のためにディアナ号で下田を訪れていたとき、運悪く1854年安政東海地震が起きて、津波でディアナ号が大破して航行不能となった事件です。修理のために伊豆の戸田港に曳航される途中、富士市の沖合で沈没するのですが、これに代わる船としてヘダ号が造られ、ディアナ号の乗組員が無事にロシアに帰ったという注目すべき出来事が起きています。

沼津も津波にたびたび襲われた場所で、大朝神社で日蓮が津波よけの祈祷をしたという伝説や、安政東海地震の際に入り込んだ津波が下香貫に津波池を造ったことを示す絵図が残されています。それから、沼津港の入り口には「びゅうお」という津波対策のための大型水門が造られています（図7）。これら古いものも新しいものも、すべてがジオパークの資産になります。

図7　沼津港の大型水門「びゅうお」

また、伊豆半島には、衝突に伴ってたくさんの活断層が生まれ、歴史上何度も動いたものもあります。特に熱海と三島の間にある丹那断層が歴史時代に3度動き、1930年北伊豆地震を始めとする大きな地震を起こしました。丹那断層は地形的にはっきりと残っていて、川が1kmぐらい水平にずれています。最初に注目した東大の久野久先生は、1936年に論文を日本語と英語で書いています。断層が水平に1kmもずれるということを史上初めて指摘した論文です。つまり、伊豆半島は活断層研究のメッカといってもいい場所なのです。

また、東海道線の旧丹那トンネルを掘っていたとき、先端が活断層にかかり、工事中に水がたくさん湧いて難工事になっていたところ、1930年北伊豆地震で断層が2mあまり動いてトンネルがずれたという大事件が起きました。吉村昭の小説にも書かれている有名な話です。また、このトンネル工事で地下水が涸れてしまったため、丹那盆地では稲やワサビが栽培できなくなり、補償金によって酪農に転換して現在の丹那牛乳ができたという歴史もあります。地域の人々は丹那断層の当時のずれを貴重と思い、すでに戦前に国の天然記念物に指定して、今でも大事に保全しています。丹那断層はその後何度も発掘調査されて過去9度ほどの活動履歴が分かり、次に起きる地震は数百年先であることも分かっています。世界の活断層の研究史をリードした研究成果を残した場所でもあります。

伊東沖の火山活動については、私が1998年に作った暫定版ハザードマップが10年以上を経て2011年にようやく正式なものに改良され、現在も使われています。それをベースとして気象庁が火山活動を監視し、どこに、どんな異常が起きたら、どのようなシナリオにもとづいて警報を出し、どのように避難するのかということが取り決められています。

これらの取り決めや運用のために、地元自治体や他の防災関連組織が参加して伊豆東部火山群防災協議会という組織ができました。そこに私や専門家が関わり、伊豆半島ジオパーク推進協議会も正式なメンバーに入っています。ジオパークには、防災に必要な知識を住民に普及させる役割が期待されているからです。今や火山だけでなく、津波や地震に関してもジオパークの役割は重要になっており、国の防災基本計画や、県の地域防災計画（2015年改定以後）に、

ジオパークと連携して防災知識の普及をはかることが明記されています。

3. ジオパークを支える組織と人々

ジオパークには、誰もが関係します。組織の上層の人たちだけがやっているのではなく、ジオパークを支えたい誰もがジオパークに参加できます。いろいろな人たちや団体が集まって運営組織（推進協議会）をつくり、推進協議会が年次計画を立てて運営しています。主体になっているのはもちろん15市町と県ですが、住民がいろいろな形でジオパークを支えられるようになっていますし、学者も支えています。

昨年（2016年）春、修善寺にジオリア（GEORIA）という拠点施設ができました。ちょっとした博物館と事務局が入っています。ジオリアを中心としてビジターセンターが15市町に一つずつ整備されようとしています。

ジオパークには、大事な資産が各地にあるので、それらを説明する場所としてジオサイト（geosite）を設けています。重要なジオサイトには説明看板が立てられています。易しく書かれていて、その場所の価値の概要が分かるようになっています。ジオサイトは地域の方々が大事にしてくれていて、西伊豆町一色の枕状溶岩の崖は、地元の人たちが掃除をしています（図8）。町内会の方々にも大事にされていて、「枕状溶岩祭り」という行事もおこなわれています。

図8　町内会と地元高校によるジオサイトの清掃活動（西伊豆町）

推進協議会では、ジオパークをガイドできる案内人（ジオガイド）を計画的に養成しています。現在約150人が認定ジオガイドとして活躍しています。彼らは、いろいろな得意技をそれぞれ持っているので、多種多様なツアーが実施されています。ジオパークならではの分野横断的な知識を盛りこんだツアーが、ほとんど毎月のようにあちこちで開催されているので、ぜひ参加してみてください。

ジオガイドは防災リーダーとしても活躍しています。たとえば、地域の子どもたちに火山のいろいろな基礎知識を教えたりして、防災活動を支えています。彼らはガイド以外にも様々な才能を持っていて、例えば南伊豆ではお菓子作りが好きなガイドが地層や岩石を模した「ジオ菓子」を作り、今や世界中で有名になっています。ジオパーク同士は世界的に交流していますから、ジオ菓子もそういう場に持っていくと飛ぶように無くなります。

お菓子以外にも、地元の食材を使って「ジオ丼」や「ジオ定食」を作る人も出てきました。南伊豆のガイドは、自分でジオパークの絵本を出版しました。三島のガイドは、生け花の師匠なので、ジオサイトを模した「ジオ生け花」を作る活動を始めています。三島の現代アーティストは、丹那断層を題材に、一昨年（2015年）、丹那断層の左横ずれの動きを表すために、地元のお寺の位牌堂とアトリエに赤と青の巨大な矢印を建設しました。

子どもたちも一生懸命勉強しています。伊豆総合高校の生徒たちは、地元の小学生にジオパークを教えています。松崎高校も下田高校も活動するようになりました。天城中学はユネスコスクールなのですが、火山の実験などジオパークの出前講座が実施されています。伊豆半島はたびたび外部からの審査を受ける立場になっているので、国内外から来る審査員に対して高校生が説明してくれたりします。ジオパークは学校教育と様々な親和性があるので、学校関係者も注目すべき活動だと思います。

つまり、伊豆半島は世界に誇る素晴らしい大地と地域社会のストーリーを持っていて、そこでしか見られないものがたくさんあり、素晴らしい人々の活動と文化を見せることができます。

ジオパークは、狩野川の洪水災害を伝承する祭りである「かわかんじょう」のような無形遺産も、重要な資産として認めています。

4. 現地審査の様子

今年（2017年）の7月に行われた世界ジオパークへの再挑戦の現地審査の様子を紹介します。ジオリアで全体説明を行った後、まずワサビ沢に行き、伊豆市湯ケ島地区のワサビ農家の方が火山特有の湧水の話やワサビ栽培の話を自らの言葉で語ってくれました。2人の審査員（マレーシアとルーマニア）がワサビを実際に収穫し、味わいました。

堂ヶ島では、その場所の学術的価値を説明した後、実際にガイドがどう案内しているかを体験してもらいました。一色では、松崎高校の生徒たちが枕状溶岩の形成メカニズムを劇にして発表しました。そして町内会長が、いかに枕状溶岩を町内会として大事にしているかを語りました。その夜の歓迎会には、県知事と松崎町長がいらっしゃいました。

翌朝、歴史建築を生かした松崎ビジターセンターを訪れ、入江長八の鏝絵を見た後、津波の避難タワーに行き、地元ジオガイドが防災リーダーとして活躍している様子などを解説しました。その後、南伊豆に移動してジオカヤックツアーを体験し、マグマが海底から上ってきた跡を実際に見ていただきました。

次に下田に移動して、津波で転がった巨石があるのですが、付着している化石の年代測定で1854年安政東海地震のものだと分かったので、その説明をしました。ペリーロードに移動して、小学生たちがジオパークの説明をしてくれました。下田駅から伊豆急行線に乗って伊豆高原まで移動したのですが、伊豆急はジオパークの写真を車両に展示した「ジオトレイン」を走らせているので、その趣旨を説明しました。伊豆高原駅では伊豆急の社長と全社員が歓迎してくれました。

翌朝、大室山や城ヶ崎海岸を回り、県が整備したジオトレイルという遊歩道の説明をしました。伊東のビジターセンターでは、韮山高校新聞部の女子生徒が審査員に突撃取材をしました。審査員たちはとてもフレンドリーで、地元の人たちと記念写真を撮っていました。

その後、丹那断層に移動して地形を展望した後、オラッチェという地産地消のレストランで食事をしました。マックスバリュというスーパーマーケットがジオパークの特産物を利用して「ジオ弁当」などの商品を作っているので、その説明をしました。それらはパートの女性の発案で作られていることも説明しました。それから、三島のアーティストが丹那断層のアートについて説明しました。丹那断層公園に移動して、実際に北伊豆地震でずれた跡を観察しました。地元の方が大事に保存してきた火雷神社の石段とその前にある鳥居の間にある断層のずれも視察しました。最後に熱海に移動して記者会見を開きました。

ということで、現地審査の手応えは、私の目から見て上々だったと思います。この審査結果を判断材料の一つとして今年（2017年）9月に議論され、その結果がユネスコ執行委員会に上げられて、来年（2018年）春に総合的に議論されます。そこでどういう判断が下されるかは分かりませんが、やるべきことはやったので良い結果を待ちたいと思っています。

報告３

学生参画による地域連携の取り組み

宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター）
佐藤直樹（静岡大学学生支援センター）
奥洞知依（静岡大学農学部4年）
増田彩香（静岡大学地域創造学環1年）

（宇賀田）

静大フューチャーセンターの取り組みについて説明いたします。私は宇賀田と申します。普段は1年生のキャリア教育から2〜3年生のインターンシップ、4年生・大学院生の就職支援を担当しています。

（佐藤）

私は、宇賀田先生と同じく静岡大学の学生支援センターの佐藤です。私もインターンシップとキャリア教育を担当し、静大フューチャーセンターにも関わっています。

1．問題提起

（宇賀田）

私たち2人が、学生と一緒にフューチャーセンターを運営しています。

まず、私から問題提起をしたいと思います。普段、インターンシップやフューチャーセンターを通じて、地域の方々と学生が関わる機会がありますが、それは本当に地域の方々や学生にとって有意義なものなのかということです。学生が地域と関わることに関して、総論では反対する方はほとんどいませんし、地域に学生が入ることは非常に良いことなのですが、もしかしたらそれぞれの期待と思惑がずれていたり、ややもすると大人の論理で運営が進んでしまうことがあります。

今日の報告は、ぜひ学生の視点から地域との関わり方を捉え、フューチャーセンターを通してどういう成果、価値、課題を感じているのかを説明していこうと思います。その中で、フューチャーセンターとは何かということも学生の言葉で説明したいと思います。

2．静大フューチャーセンターという場

（増田）

ここから学生による説明に移ります。私からは、フューチャーセンターという場について説明します。静大フューチャーセンターという場所をあえて一言で表すとしたら、課題を持った人の周りに「多様な人」が集まって、「ありたい未来」を「対話」によって考える場であるといえます。私たちが特に大切だと思っているのは「多様な人」「ありたい未来」「対話」です。

多様性については、フューチャーセンターでは年齢や性別、職業などの違いを歓迎しています。集まる人たちの中にはIT関連企業の社長や、自営業で卵を販売している方や、もちろん学生も何人もいます。いろいろな背景を持った人がフューチャーセンターに集まると思ってください。

次に、私たちは「こうありたい未来」から考えることを大切にしています。未来と現在があるとしたら、未来にこうなりたいと考えてから、実現のために私たちができることは何か、テーマオーナーである当事者の方ができることは何かを考えるようにしています。

そして、議論ではなく対話を大切にしています。私自身が対話する中で大切にしているのは、自分が話すことはもちろんですが、人の話を一生懸命聞くことです。その方が持っている背景や思いに注目して話をたくさん聞きたいと思っています。

フューチャーセンター開催までの流れとしては、私たち学生ディレクターと、フューチャーセンターで話し合う内容を持ってきてくれるテーマオーナーとが連絡を取ります。テーマオーナーがどんな背景を持っているか、フューチャーセンターを通してどんな思いを伝えたいのかに着目しながら、連絡を取り合っています。次に、宇賀田先生や佐藤先生と連絡を取り合って、部屋を貸していただく約束や日取りを決めるハードの部分を決めます。そこまで決まったら、Facebookや口コミで告知して、参加者を集めます。その状態になって初めてフューチャーセンターと呼べると考えてください。

3. きくがわフューチャーセンターの実践

（奥洞）

私からは、静大フューチャーセンターが実際に行ってきた事例報告と、静大フューチャーセンターの特徴や価値について紹介します。通常の活動は、宇賀田先生の研究室で行いますが、他の場所で活動することもあります。今回はその一例である菊川でのフューチャーセンターについてお話ししたいと思います。

昨年（2016年）9月に、菊川市市民協働センターとの連携により、菊川市内では初めてとなる、市民と静岡大学生とのフューチャーセッションを行いました。参加者は社会人28名、学生4名の計32名です。「きくがわの未来を考える」というテーマの下、市内でお茶の振興に取り組む農家グループ「茶夢来（さむらい）」のメンバーの皆さんがテーマオーナー（theme owner）となり、お茶を中心とした菊川市の未来を対話で話し合いました。実際には、茶園風景が残り、楽しく永続的な茶業を行いたいという茶夢来の皆さんの未来像を実現するため、次回行うお茶イベントで何ができるかを話し合いました。

話し合いでは、お茶を売るのではなく、体験として感じてもらうのはどうかというアイデアや、企画段階から周りの人を巻き込むのはどうかといったアイデアが出ました。参加した茶夢来のメンバーの皆さんからは、「いつも同じ人と話していたが、多様な人から肯定的な話を聞くことができて、自分の活動に対して自信が生まれた」、「みんながお茶について熱心に語ってくれている様子を見て感動した」という感想をいただきました。

きくがわフューチャーセンターの事例から、静大フューチャーセンターが何をもたらしたのかを考えていきたいと思います。話し合いの内容からも分かるように、話し合いで問題が劇的に解決することはめったにありません。私たち学生ディレクターが一つ一つのプロジェクトに参加していくことも、現実的には難しくて行えていません。ただ、茶夢来の人たちが考えていることや行動に共感するというコメント、自分たちの活動に自信がついたというコメントにあるように、静大フューチャーセンターの強みは、テーマオーナーが実現したい未来像のために何ができるかを多様な参加者が自分事として考えることにより、仲間やファンを増やせることではないでしょうか。

静大フューチャーセンターの特徴としては、解決したい問題そのものよりも、なぜその問題を解決したいのか、どのような未来を思い描いているからその問題を解決したいのかということを、事前の打ち合わせによってじっくり聞き出すことを大切にしています。なぜなら、話し合いや場が質の高いものになるには、テーマオーナーが抱える未来像を参加者が共有することが最も大切だと考えるからです。

テーマを持ち込みたいという話をいただいた時点では、テーマオーナー自身が未来像を人に説明できる状態でなかったり、静大フューチャーセンターに期待していることと私たちが強みとしていることがずれていたりする場合があります。参加者にとっても、テーマオーナーにとっても、当日が良い時間になってほしいので、事前打ち合わせによって擦り合わせを行います。当日のフューチャーセッションでは、ファシリテーター（facilitator）として関わる私は、テーマオーナーにとって一番のファンという視点で関わりたいと思っています。

これまで話してきたことを踏まえて、私が感じる静大フューチャーセンターの価値を、テーマオーナー、参加者、そして場づくりに関わっている私という三つの立場から紹介したいと思います。

テーマオーナーとしては、異なる視点から意見を集めることができたり、仲間やファンができるという強みを持ち帰ることができたりすることだと考えます。このときに大事になるのが、テーマオーナーの熱量の高さによってフューチャーセンターの質が左右されるということです。過去の経験から、テーマオーナー自身がその問題に対する当事者でない場合や、テーマオーナー自身の熱量があまり高くない場合は、進展がなかったり真に迫る話し合いにならなかったりすることが多いと感じました。

次に、参加者の視点としては、自分が目を向けてこなかった物事を発見できます。そして、テーマオーナーが抱える未来像に共感できる場合は、その未来実現に対して自分の意見を述べることができたり、自分の関わり方を探れたりする点から、未来実現を担う一員となる良さがあると考えます。最後に、参加者であり運営として関わっている私の立場です。私はフューチャーセンターに関わって4年目になりますが、打ち合わせやフューチャーセッションを通して、テーマオーナーが大切にしている潜在的な思いの部分に触れられ時に嬉しさを覚えるので、楽しみながら継続して関わることができました。

さまざまな視点を用いて話してきましたが、これまでの総括として今の私が思う静大フューチャーセンターの根源的な価値を紹介したいと思います。それは、テーマオーナーの潜在的な思いにまで目を向けるという、課題解決からは一見遠回りに思えることを大切にできていることだと思います。「一見遠回りに思える」とは言いましたが、先ほども紹介したようにテーマオーナーの熱量の高さは話し合いの質に直接影響するため、テーマオーナーの潜在的な思いを引き出すことが課題解決の近道であると私は考えています。

（増田）

私にとってフューチャーセンターとは何かを考えたときにつながる場所だという結論にたどり着きました。私自身、フューチャーセンターに出会ったのは高校生のときでした。当時は、三保のフューチャーセンターに参加していました。当時、一参加者であったり、もちろん自分がテーマオーナーとして参加する経験をしていく中で、自分の研究活動についてテーマを出していたのですが、応援してくれる人ができたり、もちろんファンになってくれたりする人ができて、フューチャーセンターを通したつながりによって自分の活動に対する誇りをさらに持てるようになったのです。こうしたつながりに感謝したことを覚えています。

現在、大学1年生になって、フューチャーセンターに再び関わることになったのですが、今は静大フューチャーセンターの中で、学生ディレクターであり、一参加者であると私は思っています。高校生だった私が感じた喜びを、テーマオーナーに感じてもらえたらいいと思っていますし、正直なところ、私自身もまだまだいろいろな方とつながる機会をいただいているので、やはり私は、つながる場所としてのフューチャーセンターに感謝していると感じています。

4. 学生参画による地域連携の仮設と課題

（宇賀田）

最後のまとめです。2年半前（2015年）に、松崎町で初めてフューチャーセンターを2日間にわたって行いました。地域の方と行ったセッションと、地元の中高生と行ったセッションがありました。当時はフューチャーセンターを始めて1年半ほどでしたが、フューチャーセンターを松崎で行ったことで、われわれとして大きな気付きがありました。

学生は地域に入って地域の方々と一緒にやるのですが、学生は松崎町のことをまったく知りません。松崎町のことを知らない学生が、松崎町の方と話をすることで何が起こったかというと、私が見ていて思ったのは、学生が「かすがい機能」を果たしたのではないかということです。つまり、松崎町では猟友会の方、観光協会の方、婦人会の方、農業委員の方、それぞれの立場でそれぞれの地域の課題を感じていらっしゃいました。しかし、残念なことに、その方々が一堂に会して松崎町の未来を語る場がなかったと言われました。そこに学生が入って、学生がそれぞれの大人と話すことで、大人の方々は本音を話してくださいました。つまり、学生を介して大人同士が新たにつながり、一つの未来を見ることができたと考えています。

もう一つは、課題解決の方法は議論ではなく対話であるということです。議論とは原因や解決策の選択肢を追求していくこと、つまり一つに絞っていく作業です。それに対し対話はまったく逆で、問題点や考え方をどんどん広げていくことです。対話によってまず問題点にみんなが気付き、共有することで当事者意識を生むと感じました。つまり、課題があるといっても、その課題を持っている人たちによってイメージが異なる場合もあります。まず、何が問題なのかを共有することで自分事になり、当事者意識を持つことが、問題解決の一番の出発点なのではないかと思います。もしかしたら遠回りなのかもしれませんが、そこにいる人たち、あるいは外にいる人たちが問題に気付く作業を丁寧に行うことが未来への価値になるのではないかと感じています。

学生が地域に入ることは非常に良いという話もありますが、実は私もインターンシップやフューチャーセンターを行う中で多くの失敗も経験してきました。地域や企業の話の中でよく、「ぜひ学生の柔軟な発想で」、「学生さんが来ると非常に活気が出る」と言っていただくのはありがたいのですが、学生自身が課題を解決する主体ではないということを理解していただかなければなりません。そのために、学生が果たす意味は何かということを、むしろ地域や大学がきちんとドライブ（drive）しながら学生の力を引き出し、最終的に地域の課題解決に持っていくことを、場合によってはその都度丁寧にチューニング（tuning）しながらやっていくことが非常に大切ではないかと感じています。

ですので、今回のテーマは拠点づくりでしたが、もちろんハードを作って解決するわけではないですし、拠点をつくっていくことは非常に大事だということは皆さん賛成するでしょう。では、実際にやっていく中でどうかということで、お互いの期待と思惑のずれをチューニングしながら進めていくことが大事なのだろうと思います。

ぜひフューチャーセンターを経験してみたい、見てみたいと思われた方は、明日（11日）午前中にこの場所で、実際に彼女たちのファシリテーションの下で進めますので、ご参加いただけるとうれしいです。

報告４

地域創造学環フィールドワークの取り組み

皆田 潔（静岡大学イノベーション社会連携推進機構）
遠藤有紗・本田圭美・吉澤公史・太田智輝・
勝又壮平・杉山尚暉（地域創造学環２年）

（皆田）

私は、フィールドワークコーディネーター（fieldwork coordinator）という仕事を担当しています。地域の皆さんと大学を結び、円滑にフィールドワークを行うことが大きな役割です。この報告は3部に分かれていて、まず私が地域創造学環のフィールドワークの全体像をお話しした後、松崎で活動している学生の二つのグループから報告したいと思います。

1．フィールドワークについて

地域創造学環は、地域の問題や課題に対処できる知識やスキルを学ぶところであり、未来の地域社会をけん引する人材育成を図るという大きな目標を持っています。手法としては、大学を飛び出して、学びの場として地域をお借りし、地域住民の皆さんの力を借りて、学ばせてもらおうと考えています。

学生たちには、地域が抱える課題を地域の皆さんと一緒に考えてほしいと考えています。そして、住民のみなさんが地域の足元にあるものを再認識して、あるものを生かした地域づくりに積極的に参画してほしいと考えています。

一般的にフィールドワークとは、研究者や学ぼうとする者自身が赴いて行う調査法を指します。フィールドワークによって身につくもの、身を投じることでしか得られないものとしては、風土や気質を感じ取ること、人々の思いを分かち合うこと、生きた課題に触れて探究することができます。

地域創造学環は図1の五つのコースに分かれていて、今日は五つのコースのうち3コースの学生が来ています。学環のフィールドワークの特徴としては、5コースを1年生から3年生まで縦横につないで3年生までを必修科目とし、各学年がそれぞれ目標を設定して取り組んでいます（図2）。ですから、各コースの専門分野の学生が入り混じり、さまざまな課題に対応する形で展開しています。

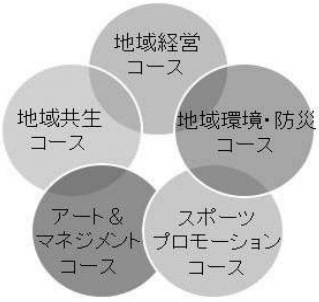


図1　コース融合のチーム編成

フィールドワークはよく単年度で区切られて終わってしまうことがありますが、私たちは地域と中長期的な関わりを持たせてもらい、地域との信頼関係を少しづつ築いていけたらいいと考えています。そして、地域の協力者と提携して、われわれ大学側の立場だけで勉強するのではなく、地域の方々に直接教えてもらい、情報を提供してもらうというコンセプトで進めています。今年度は静岡県内の都会・地方、海・山のさまざまな地域、15箇所で、活動を展開しています。

図2　フィールドワークの年次別到達点設定

一部のフィールドについてご紹介します。まず、浜松の市街地にある公益財団法人浜松市文化振興財団が運営する浜松文芸館です。若者の文芸離れをどうやって解消できるか、来館者減少という施設の課題をどれだけ抱えているかということを時間をかけて、文芸館の職員さんと話し合ったり、来場者の声に耳を傾けて理解を深めていきました。そして、学生たちは浜松文芸館の知名度向上に取組むことを決め、ポスターを作りました（図3）。画像のビジュアルも内容も、学生が考えました。キャッチフレーズも学生のアイディアです。ポスターに写っているモデルは、大学の関係者です。着物も自前で、印刷までの段階でお金がかかっていません。学生ができることは限られていますが、大学の資源を可能な範囲で提供することも、私たちができる地域貢献だと思います。

図3　浜松文芸館ポスター

もう一つは、静岡市中心部にある浅間通り商店街の活性化をテーマにしたフィールドワークからです。1カ月ほど前に、頑張っている学生たちのことが毎日新聞に載りました。「もっと簡単に課題を解決できると思っていた」、「商店街へのヒアリングでは、熱意や反応も店舗ごとに異なっていた」、「一口で活性化と言っても、昔から商店街にいる人と、最近お店を構えた人では考え方もまったく違う」という学生のコメントもありました。大学内の授業では伝えきれないことですが、地域へ出ることによって気付いたのです。活性化は難しいということに気付いてくれたことは、われわれ地域を結ぶクッションの仕事をする者にとって、とてもうれしいことでした。

2. 松崎商店街の賑わい創出

（遠藤）

地域創造学環は、松崎町をフィールドワーク先のひとつとして選んでいます。ここではテーマが二つあって、私たちは松崎町商店街について主に活動しています。本当は5人いるのですが、今日は3人で発表します。地域経営コースの遠藤と本田、スポーツプロモーションコースの吉澤です。

2-1. 発見した課題

私たちは昨年（2016年）から、松崎町でフィールドワークを行ってきました。現在2年生で、1年後学期からはじまり、昨年半年間の活動としては、3人ずつグループに分かれて聞き取り調査をしました。昨年は15人いたので、グループがたくさんでき、たくさん聞き取りをしました。聞き取ったことを模造紙にまとめ、地域の方々の前で発表し、自分たちで意見交換や共有をしたり、商店街の方々に向けて発表したりしました。昨年度の終わりには、私たちが松崎町に入って気付いたことを模造紙にまとめ、商店街の一角に掲示しました。

私たちが発見した地域の課題は、利用客と商店街経営者側の意識の違いでした。聞き取り調査をして思ったことですが、利用客に商店街をどうしていきたいかと聞くと、現状維持を求める声が多く、商店街経営者に聞くと、商店街をどうにかしたいという声が多かったのです。現状を維持したい利用客と、どうにかしたい商店街経営者の意識の違いが、松崎町の中で生まれていることに気付きました。そこで私たちは、今後の松崎町の方向性の足並みをそろえて地域の一体感を出すこと、松崎町の企業と連携することで積極的に住民と商店街が協力し合うことが大切だと感じました。

2-2. 今年度前期に取り組んだこと

（吉澤）

今年度（2017年度）実際にフィールドワークを行うに当たって、自分たちが求められていることは何か、について考えました。まず一つ目に、地元の人たち主体の取り組みに参加することです。実際、フィールドワークを通して地域が抱えるさまざまな問題を発見することができますが、課題は学生や大学側だけで解決することがほとんど不可能なものが多いです。私たちは地域の方々と一緒に協力することと、地域に元々あるものを生かして諸課題を解決することが大切だと考えています。地元の方々の取り組みに参加し、しっかり話し合った上で今後の方向性を決めたいと考えました。

二つ目に、商店街の活性化をサポートすることです。フィールドワークを行う静大生の大半が、入学してから松崎町を知りました。授業の一環で松崎町役場の深澤さんから話を聞いたことが、松崎町のことを知る一つの要因になりました。しかし、松崎町のことをよく知らない学生はまだ多いので、商店街の活性化、知名度の向上が求められているのではないかと考えました。

三つ目に、商店街の店舗の維持です。理由が二つあって、まず主要な道路から離れていたり、大規模商業施設に利用者が流れるなど、商店街の利便性は決してよいとはいえませんが、ご近所付き合い的な利用がなされているため、維持していくことは大切です。もう一つは、地元の声を踏まえると、商店街は地元の人たちのよりどころであり、なくてはならない場所なので、どのようにして維持することができるか考えました。

今年度（2017年度）前期は、松崎をもっと深く知るために体験や施設巡りを行いました。具体的には、松崎名産の桜葉の収穫体験や旧依田邸、石部棚田、牛原山の見学をしました。

2-3. 今後の課題

（本田）

昨年度（2016年度）は、商店街内の活動が多くあり、商店街の活動について住民の方や学生同士で考えることができました。その中で、松崎をもっと多くの人に知ってもらいたいという意見が出たことから、私たちは松崎をより深く知る必要があると思い、今年度（2017年度）前期は、体験や施設巡りを自分たちが経験しました。そこで分かったのは、松崎には人を魅了する資源がたくさんあるということです。山海の資源もそうですが、歴史や文化などさまざまな資源が私たちを魅了しました。

そして、活動を通じて気付いたのは、観光客は商店街にあまり立ち寄っていないということです。商店街も松崎町にとって大切な資源です。ここに住む住民の方もとても素敵で、私たちを魅了します。このような商店街に観光客やよそ者を導いて交流する場に変え、住民に刺激を、商店主にモチベーション（motivation）を与えたいという思いから、今年度の課題として国道と商店街・港に続く経路の導線づくりを挙げました。

手段として、後期は松崎町の白地図作りを行っています。昨年度と今年度に訪れた松崎の魅力を私たちがまず書き込み、住民の方や観光客にも一緒に書き込んでもらって、住民と学生と観光客が一体となった地図を完成させ、全体の活気を上げたいと考えています。

後期からは、私たちを含め新たに地域創造学環の1年生が入ってきます。1年生の力を借りながら、私たちはあくまでも火付け役として松崎町に入り、商店街のにぎわいを創出したいと思います。

3. 松崎町観光と防災

（太田）

環境防災コースの太田と勝又と杉山です。私たちも同じく松崎町をフィールドワーク先に選んで、昨年度（2016年度）後期から今まで、1年間取り組みました。

3-1. 発見した課題

まず、発見した地域の課題は大きく三つに分かれると考えました。まず地勢的な部分です。これは松崎町が抱えているというよりも素因として挙げられる部分が大きいのですが、松崎町には鉄道がなく、国道136号線が縦貫しています。大きな災害があって、国道がふさがれてしまうと町自体が孤立してしまう恐れがあります。松崎港は非常に地盤が低く、高潮や津波で浸水してしまうリスクが高いです。

続いてソフト面の課題としては、松崎町も過疎化が進んでおり、高齢者が非常に増えています。独居の高齢者が非常に増えている中、高齢化による避難困難者の増加も大きな問題として挙げられます。

ハード面としては、非常に道路が狭い上に、亀裂が入ったブロック塀が多いということです。避難路に指定されている道もあり、実際に地震が起きてブロック塀が倒壊すると、下敷きになってしまうリスクも考えられます。

私たちのフィールドワークのテーマである観光と防災について説明すると、松崎町は駿河湾に面しており、駿河湾を震源とする南海トラフ巨大地震が発生すると、14mの津波が来ることが予想されています。これを防ぐために防潮堤の建設が議論されています。しかし防潮堤を建ててしまうと、松崎町の魅力である非常にきれいな海を望む景色が見えなくなってしまうという問題があります。しかし、防潮堤を建てないと人命が失われてしまうリスクも上がります。そうした観光と防災のバランスをどうやって取っていくのかを考えることが私たちのテーマです。

松崎町では、津波対策地区協議会という住民が議論に参加できる機会があります。防潮堤をどのぐらいの高さにするのか、デザインをどうするかを考える場です。松崎町内の企業、商工会、観光関係といった方々や、県、町などさまざまな立場の人が入って話し合っています。説明会で使われた資料によると、現状は海水浴もできるようなきれいな海岸が広がっていますが、高さ14mの防潮堤を建てると、商店街からまったく海が見えなくなってしまい、圧迫感を与えてしまいます。

3-2. 今年度前期に取り組んだこと

私たちが求められていると思うこととしては、まず一つ目に外部からの客観的な視点の提供です。先ほどの地区協議会では、地区住民の方が中心になって話をしていますが、私たちはあくまでよそ者なので、こういう方向性もあるという外部からの客観的な視点が求められていると感じました。

二つ目に、防潮堤を観光面でも生かしていく方策を探ることです。防潮堤はあくまで防潮堤ですが、あまりに無骨なデザインにし過ぎると観光面で悪影響があると考え、持続的で夢のあるようなデザインにする方策も探っていくことが求められていると感じました。

三つ目に、避難困難者を迅速に避難させるための方策を、過去の事例や先行研究等を基に検討することです。これら三つは、あくまで私たちが学生として学べる立場にあるから挙げました。

（勝又）

今年度（2017年度）前期に取り組んだこととしては、商店街の方に津波対策やハザードマップについてヒアリングを行い、松崎町のみなさんがどういった考えを持っているかを聞き取りました。他には、伊豆半島ジオパーク認定のジオガイドの案内で、地域の成り立ちや災害に関することを現地見学しました。また、地区長から防災対策や津波対策地区協議会の現状についてヒアリングしました。

ヒアリングを行う上で、異なる立場の人たちからいろいろな意見を調整することが大事だと考え、行政の人たちや観光業に携わっている人たち、実際には津波被害に遭わないけれども松崎の中心市街地ではない他の地区長からも意見を集めました。

松崎の防潮堤や水門に対する地域の方々の肯定的な意見としては、「人命が最優先だから早急に進めるべき」、「反対意見は決してなくなるものではないから、ある程度強硬に進めた方がいい」という意見がありました。否定的な意見としては、「観光に対する悪影響があるのではないか」、「景観を阻害しない別の方法を考えてみてはどうか」、「水門は湾の環境悪化を招くのでやめた方がいい」といった意見が出ました。中立意見としては、「津波被害が想定されていない地区は対策の蚊帳の外であり、高い関心はない」という意見もありました。

3-3. 今後取り組むこと

それらを踏まえて、私たちが今後取り組むべきことを考えたときに、松崎は観光が大きな産業なので、やはり地域だけでなく、特に観光客がどう思っているのかを調査すべきではないかと考えました。例えば水門や防潮堤を建設したら、観光客は津波が来ても大丈夫だという安心感が勝るかもしれないし、景観が悪化して松崎町の魅力が下がってしまうと考えることも想定されます。そのため、私たちが今やるべきことは、観光客の視点を防災対策に取り入れることではないかと考えました。

もう一つは、防潮堤のデザインです。防潮堤を建てるとしても、無骨なデザインだったら敬遠されるかもしれないので、魅力につながるような防潮堤を私たちで考案できないかということを考えています。

（皆田）

松崎町ではこの二つのグループが今後も活動を進めていき、この秋からは東伊豆町でもフィールドワークを始める予定です。最後に、松崎町でのフィールドワークをずっと支えてくださっている深澤さんが今日いらっしゃっているので、ご紹介と感謝の気持ちを込めて報告を終わりたいと思います。

パネルディスカッション

阿部――フロアから質問をいただく前に、パネルディスカッションから新たに登壇された方に自己紹介をしていただきます。

深澤――私は、松崎町企画観光課の「美しい村推進係」でまちづくり全般を担当しています。まちづくりというと何でも屋になってしまうのですが、大学も鉄道もない南伊豆地域にいろいろな方を呼び込むためには、人の縁や人をつなぐ場所が重要だと思っています。いろいろな縁があって、松崎町をフィールドに選んでくださっていることはとてもありがたいことです。自分たちも一緒に課題を解決していくことで、学生の学びになっていると同時に、地域に住んでいる人たちの学びにもなっていると、今日の発表を聞いて感じました。

荒武――私は現在、東伊豆町に住んでいます。以前は、東京の芝浦工業大学に通いながら東伊豆町で建築を勉強していた関係で、東伊豆町の空き家を改修する学生団体に所属していました。改修した物件を自分たちで活用するため、私だけが東伊豆町に移住して、地域おこし協力隊の立場で町のいろいろな活動に参加しています。

そんな中で、自分たちにも何かできないかということでNPO法人を立ち上げたほか、ひょんな出会いから静大と交流を持つようになり、地域に入った自分だからこそ大学生に伝えられることがあるのではないかということで、学生たちと一緒に地域の課題や将来の地域との関わりを考えていくために、地域課題解決支援プロジェクトに応募しました。

学生さんたちのお話を伺った率直な感想としては、伊豆に住んでいながらジオのことや隣の町のことなど、知らないことがまだまだ多いと思いました。深澤さんとはよくお話ししますが、うまく広域連携していけると、この地域がもっと良くなるのではないかと考えつつ、まずはポイントごとに見ていかなければならないと思うので、私としては東伊豆町で自分が見えている景色をしっかり伝えることで、学生たちの糧にしてもらえたらと思っています。

阿部――南伊豆町の山口さんは、パネリストというよりも、このフォーラムのきっかけとして本プロジェクトに提案をいただいた立場で参加していただいています。これからどんどん質問していきたいと思いますが、その取っ掛かりのお話を少ししていただければと思います。

山口――南伊豆町企画課地方創生室の山口です。われわれ南伊豆町も地方版の総合戦略を立てていろいろ取り組んできているのですが、まず大きな課題として人口減少があります。しかし、当然生活圏の問題もあるので、南伊豆町が独自で人口減少を食い止めようとしてもあまり意味がなく、賀茂地域全体の問題として捉えていかなければなりません。南伊豆町の人口は8000人強で推移していますが、10年後に同じレベルを保ったとしても、他の地域が6割になってしまうと、生活を支えるインフラの面でレベルが非常に下がってしまいます。なので、広域連携で施策を打っていかなければならないと常々考えていました。

人口流出は、地方にとって避けられない問題だと思います。特に若者については、この地域に大学などの高等教育機関がないため、都市部に出ていくことは避けられないことでもあるし、望ましいことでもあると考えています。ただ、町から出ていった若者が帰ってくる場、都市部から新たに若者が入ってくる場が、今のところ町内になかなか見つけられていません。最近、地方で暮らしたい若者が増えてきたこともあって、本町でも社会増が少しずつ進んではいますが、やはりこの辺を課題として捉えて検討していかなければならないと思います。若者や子育て世代がどうやってこの地域で暮らしていくのかを、もう少し根本部分から考えていく必要があるということで、今回広域的な課題として、特に伊豆半島南部地域における拠点づくりを挙げました。

最後の発表にも、課題提案者の熱量によってその会議が決まってくるという話がありましたが、そういう意味ではまだまだ熱量が足りないと思っています。明日(11日)のフューチャーセッションが不安なのですが、ぜひ本町の職員にももっと参加していただいて、町の課題、地域の課題として捉えていただくことが重要だったと思ったりしています。今日は皆さんに、人の動きの仕掛け方についても聞いていきたいと思っています。

もう一つ個人的に思っているのは、移住施策が果たして地方の幸せに結びつくのかということです。ここが非常に悩みどころで、今回の報告の中でも、地域の文化を守っていくことがその地域を守っていくことになるという話がありました。移住して、その地域の文化をどれだけ守れるのかと考えたときに、その地域の人たちは人口が増えることで果たして幸せになるのかどうかということも、行政として考えていく必要があると思っています。今日はその辺について皆さんからご意見をいただければと思っています。

阿部――それでは、実際にフィールドワークを開催してもらった地域創造学環の学環長である平岡先生からも、自己紹介と今回の報告、感想等をいただければと思います。

平岡――昨年（2016年）4月から、静岡大学地域創造学環で教育プログラムを新たに立ち上げていますが、最初に学んだ1学年50人の学生が2年生になり、この秋から1年生も加わりました。伊豆半島では松崎町と東伊豆町にフィールドワークでお世話になると思います。

先ほどの皆田先生の報告で紹介された新聞記事は、この4月から新聞記者になった毎日新聞静岡支局の大谷さんという方が書いてくれたものです。大きな記事なのですが、彼女は清水文化会館マリナートで5月末に開いたフィールドワーク報告会に来てくれた後、「実際にフィールドに行かせてください」と言って、浅間通りのフィールドに2回来ています。そして、学生たちや私からいろいろな話を聞いたりしながら記事を書いていて、内容的に非常にしっかりと地域創造学環のことを捉えてくれたと思います。つまり、その記事を書くだけでも3回訪れているのです。地域創造学環のことを知るだけでもそれだけの労力がかかるのですから、地域のことを知るのはさらに簡単なものではありません。教育者の立場からすれば、そこが学生たちに言いたいことです。だから、学環のフィールドワークは1年後期から3年後期まで少しずつ取り組んでいるのです。

その中で、フィールドで学ぶと同時に、フィールドで学んでいることの基礎知識的なものもきちんと学んでいかなければなりません。例えば、小山先生から話があったジオパークについての知識を深めなければ、その資源をどう生かすのか、そう簡単には考えられません。そういう大学と地域との往復をできるだけ積み重ねていくことが大切です。

同時に、地域の方々の支援がなければわれわれは教育ができないし、逆に私たちが地域に対して支援などというのはおこがましいと思っていて、ちょっとお手伝いというぐらいのことしかできないだろうと思います。でも、両方がそういうやりとりをしながら、地域の方では地域をつくっていくし、大学では地域づくりを担える人間を少しずつ育てていく活動を、時間をかけて取り組まなければしょうがないのだろうと思います。

その点で、能登学舎が10年を迎えたのはすごいことだと思います。着実に地域づくりに関わる人たちを育てておられることは、非常にうらやましいことだと思っています。そういう意味で、地域に根差している方々とわれわれが連携して取り組んでいきたいと考えています。ですから、秋からはフィールドワーク先として東伊豆の荒武さんにお願いして、一緒にやらせていただく形になっています。

また、能登学舎のように地域のサポーターを育てていくことも、学環として狙っています。学生たちは聞くのも初めてだと思うのですが、静岡大学では10月1日から、地域創造教育セン

ターを立ち上げます。学環を運営する組織をつくるセンターが学環という教育プログラムを担うので、センターができることで学生たちの何かが変わることは一切ありません。センターでは、イノベーション社会連携推進機構の地域連携生涯学習部門と一体化して、地域コーディネーターの育成を担ったり、この地域課題解決支援プロジェクトを引き継いだりしていこうと思っています。

それらをより連携させながら動いていく中で、地域の方にも加わっていただいて、地域の方を育てるとともに、能登学舎の活動なども参考にしながら、学生たちが地域づくりの人材になれるように育てるプログラムを一緒に進めていきたいと思っています。そういう形で、地域と静岡大学の関わりを強めていくことができればと思っています。

阿部――今日は大きく分けて四つの報告をしましたが、フロアからご質問、ご意見等がありましたらお願いします。

南伊豆町議――静大フューチャーセンターの話に非常に興味があるので、ぜひ聞いてみたいと思います。地元でNPO法人が県から依頼を受けて、フューチャーセッションという形で、1市5町で会議をしたことがありました。その会議は、人の話を否定しないというルールがあり、未来がこうなっていたらいいなというあくまで前向きな話だけをするというものでした。

その形が非常に似ていると思うのですが、今回の静大フューチャーセンターは、学生さんたちが関わりますよね。われわれは社会人だけで話し合ったので、職種の違いはあっても年齢層はありませんでしたが、学生さんたちが参加すると年齢層が親子ほど離れると思うので、難しい問題が生じるのではないかと思いました。宇賀田先生が言われていたチューニングという調整方法で、難しいところはなかったのでしょうか。それから、松崎町でも開催したということで、深澤さんの方から、地域にどのような変化があったのかお答え願えればと思います。

宇賀田――私自身、正直難しい点はなかったです。あえて言えば、大人が書いたストーリーどおりにいかない点でしょうか。ただ、そのとおりにいかないことによって、一見すると回り道したように見えて、周りとの関係づくりが非常に深化していったという感じはします。大人同士ではなかなかつながらないものが、学生が入ることによって接着剤のようにくっついていくということは非常に感じています。

実際、フューチャーセンターを松崎で行ったことをきっかけに、特にセンターを運営している学生を中心にして、何度もプライベートで松崎に行くようになったという変化がありましたし、私自身も松崎町を身近に感じるようになりました。課題解決の一翼は担っていないとは思いますが、私自身の中でも、学生の中でも、松崎に対して、あるいは地域のテーマに対して、どこか自分事と思える瞬間が増えたのではないかと思うので、難しい点はまったくなかったと感じています。

深澤――松崎町とすれば、フューチャーセッションを開いていただいたことは大変意味があって、一番大変だったのがメンバーを集めることでした。いろいろな団体の人たちをどうやって呼ぶかというときに、フューチャーセッションという言葉を使って呼んでもきっと来ないだろうと思い、「大学生といろいろ話をしてほしいので、取りあえず来てくれ」という形で各団体に働き掛けて、その中で一本釣りをして来てもらいました。なので、会場に来て最初に大学生と話したときに、「俺はなぜ呼ばれたのか分からない」と言うおじさんがほとんどで、「まあまあ」といなしながら始めた経緯がありました。

ただ、始まったら学生が本当につなぎ役になって、今まで自分たちの既得権益だけを見ていろいろ活動していた人たちが、もう少し町全体を見るようになりました。また、学生に「そうなのですか」などと言われると、おじいちゃんたちが喜んで上を向くようになったことも良い

効果だったと思います。

その後、例えば商工会や観光協会など民間の関わりのあるところがもう少しつないでいっていただけたら、もっといいと思いました。宇賀田先生には無理を言って、またぜひ開催していただきたいという思いもあります。今度こそ地元に根付かせるというか、地域の方も気が付いてはいるけれども、方法が分からないという人がとても多いので、当然行政も関わりながら、関わる人がみんなで少しずつ負担しながら、そういうチャンスを持って同じ方向に向いていくことが一番大事だと思います。

先ほどの発表にもあったように、私が大学で話す機会をもらったおかげで松崎町を知ってもらうことができました。そして、松崎に来てくれたおかげで、縁やゆかりができて、また足を運んでいただいていることはとてもありがたいことです。先ほどもありましたが、伊豆半島の一つの町だけでは何もできないので、やはり地域の連携をもう少し考えた方がいいと思いました。

学生は子や孫の世代に当たりますが、学生との接点があることや、学生たちがまちなかで動くことはとてもありがたいです。それから、当町の中高生も一緒に話をさせてもらったのですが、私たちが言っても全然刺さらないことでも、年が近くて都会から来た大学生が同じことを言うと中高生によく刺さるのです。大学生も本気で話してくれるので、こちらも感動したというか、ありがたいと思いました。大変な思いをした子もいたのですが、そういうことで関わる人全体が良くなると思うので、多少の苦労は何とも思わないぐらいの成果があったと思います。

阿部――静大フューチャーセンターがまた別の所にも波及し、島田ではさらに若い高校生のフューチャーセンターをつくって成果を着々と上げているので、年齢が離れているから難しいというよりも、そこに面白さがあるのではないかという気がしました。今日は高校生もいらっしゃっていますが、頭の片隅に置いておいてほしいと思います。

ここで私から質問してもいいですか。私が金沢大学の能登学舎に行ったのは2年ほど前になりますが、自分たちが同じことはできないとしても、伊豆に拠点をつくろうと考えたときに、場所は伊東のように観光客の出入りが多く、アクセスしやすい所にすると思います。しかし、能登学舎は珠洲市という能登半島の先端です。そこに拠点をつくったのは不思議な感じがしますが、結果を見ると、全体の活性化につながっていると思います。珠洲につくったのは大変な英断だと思うのですが、その背景についてお聞かせいただければと思います。

宇野――本学が2006年に能登に進出した目的は、里山里海自然学校をつくることだったので、里山里海自然学校に合う場所につくりたかったのです。ですから、中心街や学生たちが集まりやすい場所につくることは考えませんでした。まさに私たちがしようとしていることの本丸へ突っ込んでいくような形です。ですから、その地域で何をやりたいかというコンセプトが決まれば、そのコンセプトに一番ふさわしい所へ行けばいいと思います。その意味では、能登学舎は先端が最もふさわしかったのです。

阿部――能登学舎は、東京から飛行機に乗って能登空港からタクシーに乗ったり、金沢駅まで新幹線で来て乗り合いタクシーに乗ったりして、遠くから来ている人がいると伺っています。タクシーで珠洲市に向かう間、輪島などいろいろな所を見たり、ご飯を食べたりしますよね。ですから、先端にあるのはいいなと思うのですが、どうしてそこまで思い切ったのかと考えると、そこでしかできないことがあって、ベストな位置を選んだら、たまたま遠かったということなのでしょうか。

宇野――金沢から150kmです。ですから、マイスタープログラムで金沢から通う人たちは、金沢駅で待ち合わせをして5〜6人で乗り合いして、珠洲に通います。片道2時間半、乗り合いし

た人たちの間でいろいろ話をしながら来るわけです。これは、そこで学ぶ人たちのわれわれに対する評価につながっていきます。「今日の授業はくだらなかった」とか、「面白かったから、次はぜひこういう授業をしてほしいと要望しよう」という話になります。授業は9時半から始まりますから、朝7時に金沢を出発しないと間に合わないのです。ということは、6時には起きて準備して、金沢駅から乗り合いして来るわけです。それだけの時間を使っているわけですから、われわれに対する受講生の評価はものすごく厳しいです。それが逆に、プログラムの質を低下させないぞというわれわれのモチベーションにもなっています。

阿部――本フォーラムの標題には「COC+」が付いていて、地（知）の拠点大学による地方創生という側面もあります。大学が関わっている地域と協働し、お手伝いしながら活性化につなげていきたいという狙いがありますので、静岡大学のCOC+コーディネーターである岸本さんと、沼津高専のコーディネーターである北村さんにも伺いたいと思います。

岸本――2月に開かれた森里川海プロジェクトのフォーラムのときに初めて南伊豆を訪れて、良い所だなと思いました。COC+では、先ほど阿部先生が言ったように、地域の35市町と協働しながら地方創生に向けて取り組んでいます。その中のモデル地区の一つとして松崎町も取り組んでいますが、広域の南伊豆の中に一つの協働の拠点ができることは非常にいいことだと思いますし、そういう意味では非常に期待しています。できれば能登学舎のようなものができるといいなと、2月に来たときに思っていました。期待していますので、ぜひよろしくお願いしたいと思います。

北村――今日は興味深いお話をありがとうございました。沼津高専は県東部にある国立高専です。静大さんは中部と西部に拠点がありますが、東部の大きな特徴は、伊豆半島に幾つもの町があるため、町の数が中部・西部に比べてとても多いことです。それだけエリアが広いということですし、それぞれに違いがあるので、何を切り口にして発展させていくかということが重要になります。

それから、ジオパークの話は個人的に非常に興味深かったです。今まで伊豆半島といえば、天窓洞や大室山、石廊崎の景色などは知っていて、観光地としては何度も行ったことがありますが、それらは海底火山が南側からくっついてできたということを知り、非常に興味深く感じています。今日の報告の中でも、そうした特徴を生かして地域でガイドする人を養成したり、地元の人が活躍する場をつくったり、高校生も協力してくれたりする話があって、とても面白かったです。

逆に、沼津高専としてどんなつながりができるかなとずっと考えていたのです。一つは、学生がいろいろとフィールドワークに来ているのですが、沼津高専というと全体が理工系なので、例えば駿河湾の深海といっても、どうしても技術的な部分から入ってしまうのです。静大の学生のように、地元でソフト的なことをするときにうまく関われるだろうかということが課題です。伊豆半島には大学がないという話もありましたが、その点で沼津高専が拠点になって何かできないかと思っています。皆さんのお知恵を拝借して、5年先、10年先を踏まえて、もっとつながりを持って取り組めることを見つけたいと、まだ漠然とですが、思っています。

阿部――ぜひ沼津高専さんには、伊豆の南の方にも関わっていただきたいと思いますし、特に荒武さんは芝浦工大で建築などをやられていて、どういうきっかけか、東伊豆に移住されています。学生あるいは先生も含めて、こんな形で求められているのだということがきっかけで接点ができていくといいですし、静岡大や沼津高専、芝浦工大、早稲田大など、南伊豆に関わった複数の大学がありますが、どこがどうというのではなく、ネットワークを組んでできたらいいなと思います。

天野（大学職員）――静岡大学大学教育センターの天野です。私は8年間、静岡にいるのですが、ジオパークのことを初めてきちんと聞かせていただいて、非常に感動しました。小山先生のお話を聞いて、ジオパークによって人や地域が改めてつながっていく様子が見えたという感想を持ちました。お話の中では、ジオパークに携わっている方々が得意分野で関わりを増やしていく手段として、お菓子を作ったり、ガイドしたりする方法があったと思うのですが、あの関わり方はどうやって生まれてきたのでしょうか。その人たちが自然と自分たちから関わろうという動きがあったのでしょうか、それとも何か仕掛けがあって動きができたのでしょうか。

小山――人のつながりができていったのは、本当にそのとおりだと思います。私も6年ほど前までは、まったく個人的なつながりの中で、わずかな知人に声をかけたのですが、始めてみるといろいろな人が名乗り出てきてくれて、勝手につながって、みんなで勝手に盛り上がってくれています。ジオパーク効果のようなものを目の当たりにして、自分自身も感動しましたし、驚きました。私からも、ジオパーク推進協議会からも特別に仕掛けてはいないと思います。今日は何人かの認定ジオガイドの方が来られていたので、ガイドさんからお話を聞けたらよかったのですが、もう帰られてしまったようです。最近まで推進協議会におられた副町長のご感想はいかがでしょうか。

橋本――私は4月から7月末までの間、小山先生と世界審査のお付き合いをさせていただきました。4カ月しかいませんでしたが、私が伺った範囲では、ジオガイドの方々は特技や得意分野を伸ばして、自分もジオパークに参画していきたいという気持ちがどんどん大きくなっていきました。ですから、伊豆半島ジオパークはこれから非常に期待できると思います。

宇野――私も、今日はジオパークの話を聞けて、来た甲斐があったと思いました。一つ提案ですが、私はジオが伊豆半島の地域資源の最大の宝物だと直感しました。これをぜひとも子どもたちの学校教育に生かしていったらどうかと思います。文部科学省は特例教育を推進していて、その地域でしかできない学びを教科としています。例えば「ジオ教育」という名称を付けて、地球物理や地殻変動、防災の話やそれにまつわる文化など、総合的に35時間ぐらいの一つの科目を作ってしまうのはどうでしょうか。南伊豆町などの教育委員会が連携して、詳しい人たちが出前講座でお話ししたりするような教育を、初等教育あるいは中等教育の科目の一つにしてはどうかと思います。

　そうすることで、子どもたちの郷土愛というか、郷土に対する目覚めが出てくるのではないかと思います。能登半島でも「里海教育」ということで能登町が特例科目の指定を受け、漁業の町の生業や食品科学などを子どもたちに学ばせています。そういう形にすれば、地域の皆さんに対する恩返しになるのではないかと思います。

小山――先ほど紹介した伊豆総合高校では、すでに総合学科の必修科目としてジオパークが入っており、総合学科の生徒全員がジオパークのことを学んでいます。その中の一部の生徒が、自然科学部というクラブ活動としてジオパークに取り組んでいます。松崎高校はまだそこまで行っていないのですが、サイエンス部がとても活躍していて、必修化された伊豆総合高校よりも頑張っているという印象をもっています。

　特例教育はきちんと知らないのですが、検討したいと思います。幸いにして、日本ジオパークネットワークの教育部会のアドバイザーをしている山本隆太先生が地域創造学環に関わっていますし、学環の学生たちが山本先生の指導で、伊豆市でジオパーク教育に関するフィールドワークを始めようとしていますので、そういったことを少し検討していただけると思います。

宇野――逆に学校教育までジオパークを持っていくと、ユネスコの方も無視できなくなってしまうのです。

質問者（学生１）――農学部大学院1年生です。能登学舎に常駐されているスタッフの方は、珠洲市周辺にお住まいなのですか。

宇野――珠洲市に在住しています。

質問者（学生１）――これまで大学がなかった地域に研究者が住民として住むことによって、地域や研究者自身にとってどのような得るものがあったのか、それぞれ教えていただければと思います。

宇野――基本的に、能登学舎の教員スタッフとして、特任助教や博士研究員が来ています。担任制になっていて、受講生は30人、教員は5人ですから、それぞれ6人の担任になっています。それだけでなく、教育プログラムの開発や、実際に自分が担当する里山里海におけるコミュニティーの成り立ちや文化、歴史を担当して、コーディネートもしています。そういう里山里海のマイスター教育だけではなく、自分の研究を能登でできるというお得感もあるのです。せっかく能登にいるのだから、能登の里山里海をテーマにした文化・歴史、生態学やコミュニティー論などいろいろなことを研究しています。科研費を取っている研究者もいます。教育と自分の研究の二本立てですから、非常に有意義だと思います。

阿部――今回は、高校生にも参加いただいて、受付等手伝っていただきましたが、先生でも結構ですので、質問や感想をいただけますでしょうか。

南伊豆分校教員――感想になるのですが、大学生が今回こういったことに関わることが一つのコンセプトだと感じました。一つ考えたのは、地域の方がいろいろと検討する中で、どうしても円をぐるぐる回るような会になってしまうのではないかと思うのですが、そこに何も知らない大学生がぽっと入ることによって円が突然はみ出し、流れを変えることにつながるのではないかと感じました。

今回、静岡大学の学生さんがいろいろ発表してくれたのですが、こういう活躍をどんどんしてもらって、地域活性にも当然つながるとともに、学生にとっても非常に大きな勉強になると私は思います。学生は、人とつながることによって育つと思うのです。社会に出ていろいろなところで活躍できる人材になると思うので、その点で静岡大学にはますます期待ができると感じました。

阿部――今日は松崎町とテレビ会議で結んだので、とーふやさん側からご質問・感想等をいただければと思います。

寺田――松崎町の地域おこし協力隊をしている寺田です。私はもともと静岡県出身なので縁は若干ありますが、荒武さんは他の地域から移ってこられたということでした。もちろんいろいろ魅力はあると思うのですが、ちょっと大変だなと思ったところがあれば教えてください。それから、こうしたらうまくいったということがあれば、教えてください。

荒武――自分は寺田さんの1年上の協力隊なのですが、一番しんどいと思うのは活動を一人でしているときです。ただ、考え方を変えれば、周りには地域の人たちやよそから来る仲間たちがいて、そういう人たちと一緒にやっていく方向に思考をシフトしていくと、今まで見えなかったことが見えてきます。現に、自分も観光産業の企業の方たちといろいろなことをしようとしているのですが、一人ではなくて、そういう人たちからいろいろなことを学ぶことができます。一人でやるとつらくなってしまう時期があるので、そういうふうに地域の人たちと一緒に取り組めるといいと思っています。

寺田――ぜひ松崎町とも協力していただいて、一緒に頑張っていけたらと思います。

阿部――最後に、地域創造学環の平岡学環長からまとめのコメントと挨拶を兼ねてお話しいただきます。

平岡――地域課題解決支援プロジェクトは、支援プロジェクトといいながら、逆にさまざまな地域の方々の支援なくしては成り立たないものでもあると思います。そのプロジェクトのフォーラムのためにお集まりいただき、本当にありがとうございました。

今回は、伊豆半島の拠点づくりを考えるというテーマでした。拠点づくりというと、場所をイメージしてしまうと思ったのですが、今日の話を聞いていて、むしろその根っこにあるのはつながりではないかと思いました。皆さんの話はいずれも、つながりができるということが大きなポイントではないかと思います。そういうさまざまなつながりが生まれ、太くなっていくと、拠点が出来上がっていくのではないかと思います。そうなっていく一つのきっかけとして、本フォーラムが意味を持ってくるとありがたいと思います。

そして、今回は高校生にも何人か来ていただきました。学環は高校生ともつながりたいと思っています。この地域を良くしたいという人にぜひ学環に来て、一緒にフィールドワークに取り組んでもらいたいと思います。そういう人に来てほしいというのがわれわれの切なる願いですので、その一つのきっかけになればと思います。

学環は、5年、10年という形でフィールドとお付き合いさせていただきます。そういう中で、このつながりを少しずつ太くし、さまざまな糸をつないでいくことができればと思っています。このフォーラムがその第一歩となればと思います。

COC+ 地域課題解決支援プロジェクト

フューチャーセッション in 南伊豆町

日　時：2017年8月11日（金・祝）10:00～12:00
会　場：南伊豆町湯けむりホール
ファシリテーター：静大フューチャーセンター
（宇賀田栄次、天野浩史、佐藤直樹、奥洞知依、増田彩香）

8月10日の研究フォーラムに続き、翌11日、南伊豆町にて「フューチャーセッション in 南伊豆」を開催しました。静大フューチャーセンターのメンバーがファシリテーターを務め、南伊豆町の高校生・静岡大学学生・地域住民など、さまざまな年代の方が参加しました。参加者はグループに分かれ、「20年後を想像してみよう」そしてそのために「南伊豆町で今できることは何か」について意見を出し合い、互いに共有しました。

写真　当日の様子（左：全員で自己紹介、右：グループに分かれて話し合い）

地域課題解決支援プロジェクトと地域創造教育センター

静岡大学理事（教育担当）／副学長
地域創造教育センター長
丹沢　哲郎

平成25年度に始まった地域課題解決支援プロジェクトも5年目を迎えました。本号も含めた3冊の成果報告書にみるように各地で取組が行われ、地域の様々な方々との交流を通して、教職員も学生も多くのことを学んでいます。地域課題の提案をきっかけとして、各地域に入り、住民の方々にお話をうかがい、課題解決をともに考えることを通して、学生たちは大きく成長しています。教員だけを導き手とするのではなく、また学生だけで学ぶのでもなく、具体的な地域課題を中心におきながら、様々な立場の地域の方々と交流・協働しながら実践的に学び合うことが、大学にとって不可欠であることを改めて感じています。

静岡大学では、第1期・2期の公募で寄せられた地域課題の解決支援を、多様な担い手に協力いただきつつ進めており、平成28年度からは学部横断型教育プログラム「地域創造学環」との連携を進めています。たとえば、伊豆賀茂地区からの提案課題との対応をはかりながら、松崎町、東伊豆町には学環学生のフィールドワークを受け入れていただいています。さらには、松崎町、東伊豆町、南伊豆町、菊川市等の課題提案者を報告者としたCOC+地域課題研究フォーラム・公開シンポジウム等を開催し、そこには地域創造学環生だけでなく、人文社会科学部、情報学部、教育学部の地域づくり副専攻学生も参加しています。

こうした経緯を受け、平成29年10月に「地域創造教育センター」を開設しました。本センターは、「地域創造学環部門」と、地域課題解決支援プロジェクト等を担当する「地域人材育成・プロジェクト部門」(旧地域連携生涯学習部門)から構成されています。後者の担当する本プロジェクトは、大学が地域づくりの支援者・担い手になろうとする取組ですが、地域からの様々な働きかけ、協力、支援がなければそもそも成立しない試みです。これまで同様、地域の皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

静岡大学
地域課題解決支援プロジェクト成果報告書　第３号

発行日――2018 年 1 月 31 日
発　行――静岡大学地域創造教育センター
編　集――大谷 悦子
連絡先――静岡大学地域創造教育センター 地域人材育成・プロジェクト部門
〒422-8529 静岡県静岡市駿河区大谷836
☎054-238-4817　E-mail：kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp
ウェブサイト――http://www.lc.shizuoka.ac.jp/
印　刷――株式会社三創